
麻帆良に降り立つボディーガード

Rデッド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

麻帆良に降り立つボディーガード

【Nコード】

N5878V

【作者名】

Rデッド

【あらすじ】

「ええ、実は君に木乃香の護衛を頼みたいのですがよろしいでしょうか？」

関西呪術協会の長、近衛詠春に近衛木乃香の護衛を頼まれた主人公狩野健宏17歳。暇人の彼が麻帆良に降り立つ時、さまざまな珍道中が描かれていく・・・

プロローグ

「長、ご命令により伺いましたが入っても宜しいでしょうか？」

「ええ、どうぞ。お入りなさい。」

夜の帳も下りた深夜。京都府にあるばかりでかい屋敷にこの屋敷の主であり、関西呪術協会の長、近衛詠春このえいしゅんの私室に呼ばれる者がいた。

「長、一体何用でしょうか？」

「実は少々君に頼みたいことがあります。それと、普段通りの君でおねがいますよ、健宏君」

ここに呼ばれたのは近衛家に幼少の頃からの付き合いが長い狩野健宏かのうたけひろ、17歳である。

「ありがとうございます、長。やっぱりあんま畏まって話すってのはどうにも疲れるんで助かりますわ。」

「はは、君らしいね健宏君。実は君に少々頼みたいことがありますてね。」

詠春は頬をかき、苦笑しながら本題を切り出す。

「俺にですか？一体何の用なんですか？」

「ええ、実は君にこのかの護衛を頼みたいのですがよろしいでしょうか？」

近衛木乃香このえこのか、14歳。関西魔法呪術協会の長、近衛詠春の一人娘で、関東魔法協会の会長、近衛近右衛門このえこうえもんの孫娘でもある。

「お嬢の護衛？麻帆良学園にですか？あっちにや魔法先生やら何や

らいるんだから必要ないような気がしますけどねえ。それに護衛にはせつちゃんもおることやしなあ」

「ええ、それは十分に分かっています。」

しかし、ここ最近関西呪術協会から反逆者が出ているのも事実です。それも相当の数がです。」

「つまり、関東呪術協会からお嬢を奪った関東魔法協会からお嬢を連れ戻そうとする勘違い野郎達からお嬢を守るために俺をお嬢の護衛に加えるっちゅうわけですね？」

「ええ、お恥ずかしい限りですが。そこで君に護衛を頼みたいというわけです。」

君なら木乃香や刹那君とも親しいですし。おねがいできますか？」

「任せて下さいな、長。お嬢のためなら俺に断る理由なんかありませんーへんのさかい。」

その答えを聞き詠春の顔が輝く。

「そうですか！ありがとうございます、健宏君。では3日後、おねがいますね。」

「分かったつすよ、3日後ですね・・・」

って3日後ツスカ！？荷物やらなんやらどうするんスカソレ！？」

「君なら受け入れてくれるのは分かっていますからね、早めに用意させてもらっていたんですよ。」

イイ笑顔でサムズアップしながらとんでもないことをのたまう長であつた（汗）

「何考えとんねんアンタは！・・・ま、ええわ。」

今日はもう遅いから明日にでも荷物の整理するとして寝るとしましようかねえ。宅配業者の手配やら

学校の転校手続きやら何やらはもちろんしてくれてるんですよ、

「長？」

最初はツツコんでいた健宏だったが、どこでもよくなったらしい（汗）

「ええ、そこは抜かりなく終わらせていますよ。……すみませんね健宏君、このようなことに巻き込んでしまつて本当に申し訳ない。木乃香のことをおねがいしますよ」

健宏が振り返るとそこには彼に向かって土下座をする詠春が目に入つた。

これを古株が目にしたら間違いなく泡を吹いて卒倒するだろう。

「ちょ、何やってんですか、頭をあげてくださいよ長！？」

いきなりの土下座に慌てた健宏。これには流石にギョツとしたらしい。

「大丈夫ですよ、お嬢の護衛をするのは俺が好きですることなんですから。俺に任せて下さいよ。」

「……そうですか。君に頼んだのは正解でしたね。本当にありがとうございました。」

おっと、もうこんな時間ですか。君はもう休んで3日後に備えて下さい。」

「分かりました。では失礼します。」

詠春の部屋から退出し、一息ついた健宏。

「なーんかとんでもないことになつちまつたなあ……ま、何とかなるやろ」さて、さっさと寝ますか。」

「・・・ええ、お義父さん詠春です。はい、健宏君は了承してくれました。3日後にはそちらに向かわせます・・・はい、お休みなさいお義父さん。・・・フフ、さてどうなることでしょうか・・・」
詠春は一体何を考えているのか・・・
3日後に向け、時はどんどん進んでゆく・・・

プロローグ（後書き）

初めまして、Rデッドです。

小説を書くのは初めてなんですがおてやわからにおねがいします。

この小説にはもちろん魔法でのバトルはありますが、大体4話位からとなってますので、どうかご了承ください。

第1話 幼馴染との再会（1）（前書き）

前回、長から木乃香の護衛を任された健宏が麻帆良に降り立った！
これから先どのような物語を彼は描いてゆくのか？
今回はほのぼのストーリー、それではどうぞ！

第1話 幼馴染との再会（1）

「はぁーっ、つたくやつと着いたぜ・・・」

出発してから約3時間半の旅を終え、ようやく麻帆良学園についた健宏。

回想・・・

「健宏君。木乃香の事よろしく頼みましたよ。」

「大丈夫ですよ、長。というか別に見送りなんかしなくてもよかったですよ?」

実際のところ、見送りに来てもらったのは素直に嬉しかった健宏だったが、流石に申し訳ないらしい。

「何を言ってるんですか。私のエゴで君を麻帆良に送るんです、私が見送りに来るのは当たり前ですよ」

「そう言われると流石に恥ズインすけどね、ありがとうございます。」

「

ここでちょっと感動しホロリと来たのはここだけの秘密である。

「じゃあ行ってきますね、長。」

「ええ、行つてらっしゃい。君も頑張ってください。」

こうして、健宏は、京都を離れ、麻帆良へと、赴くことに、なった・・・（世〇の車〇から風に）

回想終了・・・

そして今現在にいたるのである。

「しつかしまあ、ホントでけえな麻帆良学園・・・どんぐらい広いんだココ？」

何せ初等部から大学部はおろか、コンビニに病院、カフェ、挙句の果てには島などetc・・・とにかく何でもある学園なのだ。

おそらくCLOMP学園といい勝負だと作者は思っている（笑）

「それはともかく迎えが来るって言うてたよな長は？まだ（モグ）来てねーみたいだけど。つーか一体誰なんだろ（モグ）うな、実はお嬢だつたりして・・・んなわきゃ（モグ）ねーか（笑）」

ケケツと不気味に笑い、埼玉駅で買った牛肉弁当（1,000円）を食べながらあり得ない（と思っている）ことを考えてみる健宏。傍から見ると結構怪しい・・・

「ピンポーン、大正解やでータケちゃん？」

背後に気配を感じ振り返ってみると、そこには今し方考えていた俺の幼馴染で護衛対象の、近衛木乃香がいた。

「ブッフオオ、お、お嬢！？なんでここにいるんスカ！？あ、あかん、のどに詰まった・・・」

考えていたことが本当になり驚き、弁当をのどに詰まらせる健宏。

「た、大変や！ホラ、麦茶飲み、タケちゃん！」

健宏が弁当をのどに詰まらせたことに慌てた木乃香は麦茶を飲ませ、背中を叩いたりして看病をする。

「ああ、ホンマ死ぬとこやったわ・・・すみません、お嬢。」

「ええんよ、別に。無事でなによりや。ウチこそ驚かせてごめんなー。」

説明しよう！

このえこのか

近衛木乃香、14歳。前回話した関西呪術協会の長、近衛詠春の娘であり、ここ麻帆良学園の学園長であり、関東魔法協会の会長でもある近衛近右衛門の孫娘でもある。

サウザンドマスター

その魔力は魔法使い最強と名高い千の呪文を操る魔法使いをも超えるいわれている魔法使いの超スーパードエリート！しかし、父親・近衛詠春の意向により本人には魔法のことは一切知らされていないのだ！

「そーいや何でここに？どっか遊びにでも行くんスか？」

「ちゃうちゃう、ウチはタケちゃんを迎えに来たんやで？」

「は？何スかそれ？聞いてないんすけど？」

2日前・・・

「電話？おじいちゃんからや、一体何なんやろ？」

『木乃香や、おじいちゃんじゃ。実は明後日、木乃香に頼みたいことがあつてのお』

「ええよ、一体何なん？」

『実はのお、明後日こっちにある人が来るんじやがその人の迎えをしてほしいんじやよ』

「ある人の迎え？別にええけど、それって誰なん？」

『健宏君じゃよ』

「なーんや、タケちゃんか・・・ってホンマなんおじいちゃん!？」

『ぬおおっ、み、耳が・・・ほ、本当じゃよ』

「分かったでーおじいちゃん!あ、そや!なあおじいちゃん、せつちゃんも一緒にええかな?」

『ん、刹那ちゃんか?もちろんじゃよ』

「やった、ありがとうなあおじいちゃん!」

・・・

「というわけや」

「最初に連絡入れるやあのジジイ・・・つーか出る前に教えるやあんのオッサン・・・」

弁当をのどに詰まらせたり、驚かされたことやらなんやらで（八つ当たりも含み）必要以上に怒る健宏。

つーか大人げない・・・（じゃかしいわ!）

「ごめんなタケちゃん怒らせてしもて・・・」

あまりの怒りようにしゅんとしてしまい、目をうるませる木乃香。

「へ?イヤイヤイヤ、お嬢のせいちゃいますって!?!悪いンのはあのジジイとオッサン何やさかい泣かんでーな!?!な、ホンマ頼むわ!?!これ以上泣かれると青い服着た兄さん達に連れて行かれてまうから!?!」

流石に泣くとは思わなかったのか、些か慌てて謝る健宏。というかさつきから周りの視線がマジで痛い。

「ア、アハ、アハハハ!?!慌てすぎや。嘘やで、ウ・ソ」
「ってウソかい!?!」

結構芯に迫っていたので見事に騙されてしまう健宏だった。

「あー、おもしろかったわ。ごめんなータケちゃん。でもタケちゃんが悪いんやで？」

「へ？俺がですか？」

騙したことを謝ったと思ったら何故かそっちが悪いといわれ困惑してしまう健宏。

というか理由が本気で分からない。

「だってタケちゃん昔は「このちゃん」やったのに、いきなり敬語になっとるんやもん。」

なんかせつちゃんみたいいきなり他人行儀になったみたいでちょっと悲しかったんや。」

何のことは無い。要は敬語を使われて悲しかったただけなのだ。

「そうやったんですか・・・そらホンマにすんません、お嬢・・・」

「もう、今敬語はアカンって言ったばっかやん。昔みたいに話してーな、ダメなん？」

もう一度タメ語ではなく敬語で話したため、寂しそうに上目遣いで頼む木乃香。

そんな表情をされては断るものも断れない。（最初から断る気もなかったが）

「（かわえーなあ、もう！）OK、わあーったよ、このちゃん。これでいーっしょ？ぬおっ！？」

「うん！それでええよ！」

いきなり木乃香が自分に向かってジャンプしてきたので少々慌てて抱きとめる健宏。

護衛対象の木乃香に自分の不注意で怪我をさせてしまったては長と学園長に何をされるかわかったもんじゃない。

「あり？そーいやさつきせつちゃんみたいに他人行儀につて言つてたけどどーゆーこつた？」

「ううん、ウチにもよー分からんのや。中学になった時せつちゃんもこつちに来とつてん。そやけどせつちゃん、ウチとは口聞いてくれんのや。そやから今日はせつちゃんも一緒にタケちゃんのお迎えする予定やったのに、ウチだけやったんや。ウチせつちゃん怒らせるようなことした覚えないし何でなんやろ？」

「（何でまたせつちゃんはのちやんのこと避けてんだ？今度会つたときに聞いてみるか）」

「大丈夫だつて、今度俺もわけを聞いてみるからさ。」

「ホンマ？ホンマに聞いてくれる？せつちゃん昔みたいにウチとしやべつたり、遊んだりしてくれるようになると思う？」

小動物のように目をうるうるさせながら聞いてくる木乃香。これを否定するやつは男が廢る！

「なるなる、絶対になる！健宏さんいままで

このちゃんに嘘ついたことないっシヨ？」

「・・・うん、わかつた！」

「オッシャ！ええ子や！・・・そーいやなんか忘れとるような気がするけど何やったかな？」

「・・・つてそーや！はよ学園長ン所いかにやらんかった！このちゃん、案内頼むわ！？」

「へ？あッそうやった！はよいかんとじいちゃんに怒られてしまふ！？こつちやでタケちゃん！」

時計を見ると駅に着いてから何と2時間が経過していた。
いささか慌てて学園長の元へ向かう二人だった。

「すいません学園長、遅れてしまって・・・」

あれから急いだ健宏（と木乃香）は校長室の中にいた。

「タケちゃん怒ったらアカンでじいちゃん、ウチが悪いんやさかい。」

「フオツフオツフオ、ワシは怒ってなんぞおらんよ木乃香。二人とも久しぶりに会ったんじゃ、昔話に花が咲くのは当たり前じゃて。健宏君、君も謝らなくていいんじゃないよ？」

この顎に白ひげを蓄えたぬらりひょんヘッドの持ち主がこの麻帆良学園学園長にして関東魔法協会会長を務める一近衛近右衛門。このえこつえもんである。

その肩書きに恥じぬ魔法使いであるのだが、実際にはただの助平爺である。

「少々侵害じやの、この紹介は・・・」

「どうかしたんですか、学園長先生？」

「ん？あ、いや大したことじゃないんで気にせんでくれ。ああ、木乃香。ちよつと健宏君と大切な話があるんで席を外してくれんかのう？」

「わかったで、じいちゃん。また後でなー、タケちゃん。」

木乃香が部屋から退室したのを見計らい、話を切り出す学園長。

「京都からはるばるご苦労じゃったのう健宏君。君には学校もあつたろうに、すまんかったのう。」

「大丈夫ですよ学園長。このちゃんの護衛は俺が好きでやっていることですし。」

「そう言ってもらえると助かるのう。さてこれから君には麻帆良学園高等部に生徒として転入してもらう。実際にはもちろん魔法生徒という扱いで。そして麻帆良学園高等部の寮に入ってもらふこととする。それと何かと入り用じゃろ？君に給料として毎月50万を給与しよう。なに、ワシらの我が儘で君に来てもらったのじゃ、受け取ってくれんかのう。」

「・・・はい、わかりました。それじゃお言葉に甘えさせてもらいますね。」

麻帆良学園高等部とは、1学年ごとにAからZまでの31クラスに約1000名が在籍していることが確認されており、全生徒数約3000名以上を誇るマンモス校である。

その麻帆良学園高等部に属する生徒が入寮するのが麻帆良学園高等部寮、通称まほ高寮である。

この寮は右半分に男子が生活する男子棟、左半分に女子が生活する女子棟、そしてロビーや医務室、食堂等を揃えた中央棟の3つから成り立っている。

基本的に部屋は2、3人住まいでそれぞれの部屋にトイレ、キッチン、風呂を完備、さらに中央棟には大浴場、シアタールーム等を兼ね備えた麻帆良学園最大といってもよい寮なのである。

「ええ、わかりました。これからはそこで暮らせばいいんですね？」
「うむ、頼むぞ。それからもう一つ、今日の夜7時に麻帆良学園の

世界樹の下に来るように。世界樹とは学園で一番大きな樹なので、すぐに分かるじやろう。そこで君にこの学園に所属する魔法生徒と魔法先生を紹介したいのでな。6時30頃にまほ高寮に迎えをよこすからのう。」

「わかりました。それでは失礼します。」

「じいちゃんとははなしとったん？」

「この学園での棲む場所とかだよ。俺はまほ高寮とかいう所らしいぜ。」

「そんなら知つとるよ。案内するわ。でもその前に、学園の中色々案内したるからなー。」

「おう、頼むわ。出来れば遊び場所や買い物できる所重点的にヨロシク。」

それから二人でスーパーやデパート、ゲーセン等etc・・・いろいろと出歩き、ふと時計を見れば6時ごろだったのでまほ高寮まで案内してもらう。

「ありがとうな、このちゃん。本当は送っていききたいところなんだけど・・・」

「ええよ、別に。まだこっちに来たばかりで道もようわからんやろうし。タケちゃん方向オンチやから帰り道分からんくなるで？」

「おっしゃるとおりでゴザイマス・・・と、とにかく気をつけて帰れよ。」

苦笑しながら木乃香の頭を優しくなで、帰宅を促す。

「！えへへ、ほなまたなー。」

「おう、また今度な。」

寮に帰っていく木乃香の姿が見えなくなるまで見送った後、学園長が言っていた迎えが来るまで外で待つことにする。

「そついや誰が迎えに来るか学園長に聞いてねーな。誰が来るんだろ?。」

学園長に聞いておくべきだったと少々後悔しながら待つこと10分。そこに現れたのは?

第1話 幼馴染との再会（1）（後書き）

「どうもこの小説

『麻帆良に降り立つボディガード』の主人公を務めさせていただいています、

狩野健宏ですどうぞヨロシク。」

「どうもー、幼馴染の一人、このちゃんこと近衛木乃香です。

これからよろしゅうになー！」

「この回から小説に出てくるキャラクターでのネタ話（？）等やらせてせてもらうので楽しみにしてねー！」

「楽しみにしとってなー」

「イヤー、とうとう会ったねー俺達。なあこのちゃん？」

「ほんまやなータケちゃん。ウチが麻帆良に来たんが初等部の時やから約6年前ぐらいやな。」

「そうそうあの時のこのちゃん達とはよく遊んだよな。」

「そやそや、せつちゃんもいっしょにな。・・・」

ホンマ何でせつちゃん話してくれへんようになったんやろ？」

「まあまあ、それも次の話で分かると思うよ（たぶん・・・）」

そんなことより次回はもう一人の幼馴染のアノ子が登場！このちゃんとはまた違ったお話が楽しめること請け合いです！」

「そうやで次はムグツ！？・・・いきなりなにするん！？」

「このちゃん、こういうのは分かっけていても言っちゃダメだつて！

OK？」

「オ、OKや。」

「そんならいいんだけよん、それなら皆さん次回をお楽しみに！」

「ほななー！」

第2話 幼馴染との再会（2）（前書き）

前回このちゃんとの久しぶりの再会を楽しんだ健宏。
さて、今回健宏を待ち受けていたのは？
今回はもう一人のアノ子が登場！
それではどうぞ！

第2話 幼馴染との再会(2)

「お、お待たせしました／＼」

「いんや、別に待つちやいないんで大丈夫つすよ・・・つてせつちやんか！？久しぶりやな〜！」

「は、はい！こちらこそお久しぶりです、健宏さん／＼」

迎えに来たのは幼少の頃木乃香と一緒に遊んだ刹那だった。

さくくつのみぎせじな

桜咲刹那、14歳。約10年前、健宏が来たのと同じくらいに近衛家に来た後、木乃香の一番の友達になった女の子である。木乃香とは違い魔法使いではなく、京都神鳴流という流派を得意とする剣士である。長から受けつぎし巨大な野太刀、「夕風」を愛用している。ちなみに神鳴流とは巨大な野太刀を用いて魔を討つために作られた剣術の流派である。

「しかし、このちゃんといいせつちゃんといい、ほんツときれいになつちやつて。俺としちや鼻高々だね〜。」

「そ、そんな滅相もございません！お嬢様はともかく私がき、キレイになつたなどと・・・」

「いやいやほんとだって。俺ツチはその点微妙だけどね・・・」

刹那をべた褒めした後、自虐的な言葉を吐きるーと目から涙を滝のように流しなら言う健宏。

夜道で涙を滝のように流す男と一人の美少女。傍から見ると通報されかねない。

「それはひとまず置いて・・・どったのよイキナリ「健宏さん」だなんて、昔はこのちゃんと同じようにタケちゃんだったのに？」

ひとまず先ほどから気になっていたことをそれとなく聞いてみる。

「はう！？そ、それはですね。あくまでそれは幼い頃だったから言えたことでして！昔のように読んでは失礼ですし・・・」

「いやいや、俺がそういうの苦手なの知ってるっしょ？昔みたいに話してほしいわけよ、おわかり？」

あくまでそれは昔だからこそ使えていたのだというと、それには異を唱えるこの男。

まあある意味当然と言えば当然だろう。

「う、わ、わかりました。で、ではタケちゃん・・・」

「はいはい何ですがシヨ？」

「／／／」

あまりの恥ずかしさに顔を真っ赤にしてうつむいてしまう刹那。
小動物みたいで誰であろうと保護欲をそそれそうだ。

「そっぴや、もうひとつだけ聞いていい？」

「はい、何でしょう？」

あれから刹那が落ち着きを取り戻すのを待つこと数分、もうひとつの気になってたことを切り出していた。

「いやね、こっちに来た時迎えがこのちゃんだったんだけどせっちゃんやんがウチと口を聞いてくれん理由を聞いてくれて頼まれたからさー一体何なんだろうと・・・私にはお嬢様とお話する資格などないからです・・・」資格？なんだそりゃ？」

木乃香を避けている理由を聞くと一気に赤かった顔の色が引き、無表情になった刹那は痛々しく、そして寂しそうな力のない笑顔を浮かべ話を切り出す。

「何でまたそう思うんだ？ ああ理由は話したくないんじゃないぜ？」

「・・・聞かないんですか？」

話そうとしたことを止められ首をかしげる刹那。

「別に無理に聞こうとは思っちゃいないさ。せつちゃんが話したいと思ったときに話せばいいさ。俺はそれを受け止めるだけだからな」

にひつと人を食ったような笑みを浮かべ質問に答える健宏。それに対して刹那は

「・・・ありがとうございます（ニコッ）」

とても優しい笑顔が浮かべるのだった・・・

第2話 幼馴染との再会（2）（後書き）

「どうも、前回に引き続き司会進行役を務めさせていただく狩野健宏です！」

今回はこの小説初出場のもう一人の幼馴染、桜咲刹那さんに来てもらいましたー！」

「ど、どうも、も、もう一人の幼馴染を務めさせていただいております、桜咲刹那でしゅ。ど、どうか、よろしくおねがいしまひゅ・・

」

「おーい、せつちゃん？もうちょいリラックスしようなー？」

「む、無理ですよこんなの！前回のようにお嬢様の方が絶対適任でしたよ！？」

「何言つてんだよ？前回このちゃんと来たら次はせつちゃんに決まってるだろ？物語の流れるに？」

「それなら私は次回は出なくていいんですよ！？」

「そこはこの作者の腕の見せ所だね。（ネタ的には次回もつぽいけど・・・）」

「何か言いました？」

「いやいや、独り言だよ独り言。それよりも次回は魔法バトルが勃発だ、さてどーなる？」

「私としてはお嬢様に危害が及ばなければそれで構いませんけどね

」

「それは大丈夫だよ。次にはこのちゃん出ないし。」

「それもそうですね。」

「それでは皆さん。次回をお楽しみに！」

「それではごきげんよう！」

第3話 VS 高畑（前書き）

前回、幼馴染その2・桜咲刹那と再会した健宏。
今回は魔法先生達との顔合わせ！
あの魔法先生とのバトルもあるぞ！？

第3話 VS 高畑

「うん？あれが世界樹か？ほんとにでけーなオイ・・・」

ふと前を見るといつのまにか世界樹の前まで来ていた。結構な時間話しこんでいたらしい。

約300mほどの大木につけられた葉が風に揺られ、何とも神秘的だ。

「というかすげー魔力もってんなこの木。・・・蘇生に使えねーかなこの葉・・・」

そんなド○クエみたいなことを言っていると・・・

「それは流石に無理じゃよ？」

「あ、学園長。」

いつの間に出てきたのかぬらりひょん・・・ゲフンゲフン、学園長が姿を現わしていた。

周りを見渡すと、何人もの魔法先生＋魔法生徒が集まっていた。

「もう時間ですか、学園長？」

「うむ、そうじゃ。さて皆紹介しよう。彼の名は狩野健宏、この麻帆良学園に転入することになった魔法生徒じゃ。健宏君、挨拶を。」

「えー、今現在ご紹介に預かりました狩野健宏です。なんにせよこれからよろしくおねがいします。」

紹介を促されひとまず挨拶をする健宏。適当なのは気にしない。

「久しぶりだね、健宏君。今日からよろしく頼むよ。」

「あ、お久しぶりッス高畑先生。こちらこそよろしくおねがいします。」

高畑・T・タカミチ、麻帆良学園が誇る（学園長を除いた）最強の魔法先生である。

20年前にはかのサウザンド・マスターことナギ・スプリングフィールドひきいる紅き翼のメンバーだった程の実力者だ。

今現在では通称死の眼鏡と呼ばれ、不良生徒たちから恐れられている。

ひとまず教員との挨拶を交わす健宏。

「ひとまず彼には今夜から学園の警備に当たってもらおう。」

「はい？あの、それ初耳何スけど学園長・・・」

いきなり言われて困惑する健宏。木乃香の護衛をするだけだと思っていたのだ、無理もない。

「まあ、別にいいんスけどね。」

「すまんのう、言うのを忘れていたんじゃ。それでは健宏君には南側の方を「ちょっとお待ち下さい、学園長先生！」ん？何じゃね、高音君？」

唯一学園長の決定に異議を述べたのが魔法生徒の一人、聖ウルスラ女子高等学校に在籍の1年、高音・D・グッドマンである。

「まだ、彼の實力がどのようなものかも判らないのですよ！？それなのに、何故彼に警備を任せるのですか！？」

「だ、ダメですよお姉様！？」「メイ、あなたは黙っていなさい！」「ひゃあ！？す、すみません・・・」

今高音に叱責されたのが麻帆良学園女子中等部在籍の1年、佐倉愛^め衣である。

高音をお姉様と呼び慕い、行動を共にしているおとなしい子である。

「フォツフォツフォ、高音君、確かに君の言う通りじゃ。ワシと刹那君、葛葉君、そして高畑君しか彼の实力を知る者はおらんからう。彼は戦闘に関しては高畑君と同等、もしくはそれ以上の实力の持ち主なんじゃよ。」

学園長の言葉を聞き、先に述べた4人以外が驚く。

「ちょ、学園長！？何言ってるんですかアンタは！？「私は認めません！こんなにも不真面目で適当な方にそんな实力があるとは到底思えません！」可愛い顔してスッゲーきついこと言うね高音ちゃん・・」

しかし、そのようなことを言われても高音が納得するわけがない。むしろさつきよりもさらにひどくなっている。そりゃこんな適当な男がそんなにすごい実力者であるなどとは、彼女にとっては悪夢にも等しいのだろう。

「フォツフォツフォ、そういうと思っておったよ。健宏君、君の實力を皆に判ってもらうために高畑君と模擬戦を行ってくれんかのう？」

「最初っからそのつもりだったんでしょが・・・」
「たたくわかりましたよ、やりやいいんでしょやりや！」

ぶつくさ言いながらもタカミチとの模擬戦を了承する健宏。

「では頼むぞ。先生方は結界の補強を手伝ってくれたまえ。このまま二人が模擬戦を行うとさすがに結界が壊れるからのう。」

学園長に言われ結界の補強を行う魔法先生達。
数分後、準備が整った。

「さて、それでは模擬戦の開始じゃ。ルールは健宏君がどんな攻撃でも構わん、高畑君に一発入れられれば健宏君の勝ち。
高畑君は健宏君をKOすれば勝ちじゃ。それでは始め！」

ここで両者の戦闘スタイルを見てみよう。

タカミチはポケットに手を入れ戦闘準備を整えている。
対する健宏は両手を下げ、だらけた格好をとっている。見た感じ的にはナマケモノのようだ。

「行くよ、健宏君！」

そついうなりいきなり居合拳を放ったタカミチ。

「ほいっと。」

しかしそれを涼しい顔して首を傾け避ける。
その光景にギャラリーは驚きを隠せない。

「はは、相変わらずすごい反射神経だ。僕も以前よりは成長しているんだけどな。」

「でも実際、威力とスピードは以前よりいくらか上がってますよ？」

健宏からの指摘に笑みを深くし喜ぶタカミチ。

「それはありがたいね、修行を積んだ甲斐があつたよ。次行くよ。」

タカミチは、瞬動を使い四方八方から機関銃マシンガンのように居合拳を連続して放つが、健宏にさっきより避けるスピードを上げられただけでかわされてしまう。

「（どうやらこのままでは掠らせることも難しいようだね、それならこの一撃ならどうか？）」

それならばこれならどうだい？左手に魔力、右手に気、気と魔力の合一！」

咸卦法かんがほう、気と魔力を融合させる究極技法であり、タカミチの切り札でもある。

「な！？いけません高畑先生、それを使われては！？」

流石に自分がけしかけたせいで死人が出てしまうのは本末転倒なので慌てて止めに入ろうとする高音。

「止めてはイカンよ、高音君。」

それを止めたのは学園長である。

「何を言っているんですか、学園長先生！？このままだと彼が死んでしまうじゃないですか！」

「健宏君なら大丈夫じゃよ。まあ、見ていなさい。」

「豪殺居合拳！！」
ドガアアン！！

健宏を大砲のような居合拳が襲い、轟音が響きわたる。

あたりに爆煙が立ち込める。次第に爆煙が晴れてくると・・・

「！？どこに行っただ、健宏君！？」

何故か健宏の姿が見当たらない。

「ココっすよ、高畑先生♪」

タカミチが慌てて振り向くと・・・
スパアーン！！

健宏がいつの間にか持っていたハリセンでタカミチの首をぶっ叩く。

「勝負あり！健宏君の勝ちじゃ！」

タカミチの負けに周囲がどよめく。

「ほ、本当に勝ってしまいましたね、狩野君。」

魔法先生の一人、瀬流彦がつぶやく。

「ああ、彼の实力は本当のようだ。」

これに魔法先生の一人、ガンドルフィーニが同意する。

余談だが、高音はガンドルフィーニが受け持っている魔法生徒だ。

「皆の者、これで彼の实力は判ったじやろ？彼が警備をすることに
反対の者はおるか？」

なんせ、魔法を使わず体術のみでタカミチに勝ってしまったのだ。
あんなに見事なものを見せられては誰も反論できるはずもない。

「それではここまでじゃ、本日警備の仕事があるものは仕事を行ってくれたまえ。では解散！」

次々と皆が解散していく中、数人が健宏の元に集まってゆく。

「素晴らしい試合でした、健宏さん！」

先ほどの試合を見て感動してしまった刹那が健宏に詰め寄る。その様子はまるで子犬のようだ。

「はは、あんがとさん、せっちゃん。でも敬語は使わなくていいっていったろ？」

ま、徐々に慣れてくれればいいけどさ。」

「完敗だよ、健宏君。僕もまだまだ修行が足りないな、それを教えてくれてありがとう。」

タカミチは負けたとは思えないほどすがすがしい笑顔で礼を言う。

「俺が何かしたわけじゃないんで礼を言われるのも変な感じなんですけどね。」

「さすがですね、健宏。」

「！刀子さん、どうもツス。」

次に彼に声をかけてきたのは葛葉刀子くすのはなつひ、タカミチと同じ麻帆良学園の教員である。

京都神鳴流を使い、刹那の（年の離れた）姉弟子でもある。

「今、何か言いました？・・・それはともかく流石ですね、高畑先生に勝ってしまうなんて」

「いやいや、まだまだツスよ。」

まさか刀子からも賛辞を受けるとは思わなかったらしい。気のせいか一番うれしそうだ。

「ん？どした、高音ちゃん？」

なんと、次に近づいてきたのはあの高音とメイである。

「あの、先ほどは失礼なことを言ってしまい申し訳ありませんでした！」

近づいてくるなりいきなり90°。腰を曲げ謝ってきたので流石に驚く健宏。

「はい？どったのよ、いきなり？ああ、さっきのことね。大丈夫だって別に怒っちゃいからさ。」

んなしゃっちょこばらないでよ、頼むからさ。」

「・・・わかりました。しかし、何故ああまで高畑先生の技をよけられたのですか？」

よろしければ教えて頂きたいのですが？」

「それは僕も教えてほしいな、何故なんだい？」

高音どころか技の使い手のタカミチさえも聞きたがる始末。しかし本人は、

「ん、なんでっていわれてもねえ・・・俺、居合拳の時に生じる風圧を感知して避けてただけだからねえ。あんまお勧めしないよ、失敗したらピンボールみたいに吹っ飛んじまうから。」

・・・いくらなんでもそんなので避けきれるのはバンドナがトレードマークの煩惱少年ぐらいだろう。

「そうですか。しかしおしかったですわね高畑先生。後ろにいることに気づけば高畑先生の勝ちだったろうに・・・」

高音の発言にタカミチは苦笑する。

「いや、僕の完敗だよ高音君。彼のスピードでは先に気づいてもやられていただろうからね。それに最後に健宏君が使ったのがハリセンではなく刃物だった場合僕はどうなっていたかと思う？」

「！？そ、それは・・・」

そうだった場合の光景を思い浮かべ真っ青になる高音。メイにいたっては泣きそうになっている。

「そう、確実に死んでいただろうね。健宏君、君が最後にハリセンを使ったのは、戦場で気を抜いたら即死に繋がるということを教えることが目的だったからだろ？」

タカミチの指摘を受けた健宏が頷く。

「正解ツスよ先生。ここの生徒は、どうにもそういう危機的状況に陥った時の心構えってのが、イマイチでしたからね。それを教える意味でも、あえてあのハリセンを使っただんすよ。」

アレ、何人が判ってるんスカねえとため息をつく健宏。

「いえ、少なくとも私にはとても役に立ちましたわ。私は戦いとい

うものにどこかで甘えがあったのでしよう、それを教えて下さって感謝していますわ。今度また、ご指導いただけないでしょうか？」

健宏を見据え、指導を頼む高音。健宏の返事は・・・

「そういうのは俺のキャラじゃないんだけどなあ・・・ま、いつかいいよ、いつでも聞きに來な高音ちゃん。もちろんせっちゃんやメイちゃんもね。」

そついうと木乃香や刹那にしたように高音とメイの頭を優しくなでる。

「は、はい！今後ともよろしくおねがいますわ／＼／」

「わ、私もよろしくおねがいます／＼／」

頭を撫でられ、その優しさと温かみに触れた二人は礼もそこそこに逃げるように帰ってしまう。

「俺、何かまずいことしたか？痛つてえ、いきなりなにすんねんせつちゃん！？」

二人に嫉妬し、健宏の足を思いつきり踏みつける刹那。同時刻、いきなり機嫌が悪くなり首をかしげる木乃香だった。げにおそろしきは恋する乙女。張本人は全くわかってなかった。

第3話 VS 高畑（後書き）

「どうも、今回も司会進行役を務めさせていただく狩野健宏です！今回は3回目にして何と二人ものゲストにおいで頂きました！」

「どうも、ご紹介に預かった高畑・T・タカミチです。」

「同じくご紹介に預からせていただきました、高音・D・グッドマンです。」

「初のバトルものだったせいかめっちゃ疲れたわホント・・・」

「僕は楽しかったけどね。」

「本当にお疲れ様です。」

「あんがとね、高音ちゃん。」

「いえ、当然のことですわノノノ」

「いい雰囲気のところすまないけど、そろそろ今回のネタ話に移った方がいいんじゃないかい？」

「おっと、そうだった。どれどれ・・・マジか、これは？」

「一体何だったんだい？」

「何でも、当初の予定では高畑先生とじゃなくて高音ちゃんとのバトルだったらしいですよ？」

「そ、それ本当ですよ！？」

「ああ。書いてる途中で今回のほうが面白いと思い変更したらしい。なんか俺をチートキャラにするためには高音ちゃんだと不足だと思っって書き換えたらしい。」

「結構失礼ですわねこの作者！？」

「でも作者が変えないと君が健宏君と試合する羽目になってたんだよ？」

「何という素晴らしい作者なんでしょう！？そう思いませんか！？」

「まあ別にいいけどね・・・そんなことより次回予告いっちゃおう！」

麻帆良学園の警備が終わりついに始まる学校生活。

しかし、幼馴染3人に姦しい影が忍び寄る！3人はどのように切り抜けるのか！？

健宏の学校生活にこうご期待！

「あやしいの字間違ってますん？」

「どうやらこれでいいみたいだよ高音君。」

「今回はこの辺で。そんじゃーね！」

「次回もよろしく頼むよ。」

「次回もよろしくおねがいいたしますわ！」

第4話 女は多けりや多いほど姦しい（前書き）

昨夜の高畑との戦いに見事勝利した健宏。

今日から高校3年生としての学校生活の始まりだ！

今回はギャグパート？

3A生徒が大暴走！

それではどうぞ！

第4話 女は多けりや多いほど姦しい

4月・・・それは学校生活という学生にとっての1年間における苦行(？)の始まる月でもある。

そして、それに関してはこの男にとっても変わらない真実であった。

「ふあゝあ、まったく眠ーなオイ。あの後寝たのは結局深夜すぎてたしな・・・」

昨日行われたタカミチとの模擬戦の後、学園長の指示の通り南側の警備を行った健宏。

ちなみに南側の警護のメンバーは高音とメイの二人とだった。

特に侵入者もなく、この男にとつては麻帆良の地理をよく知るためと、高音達との交流を深めるための散歩のようだったのだが、範囲が広すぎた為に、寮に戻って寝たのは午前2時を超えていたのだ。

「今日から新学期だからな。3年にもなったんだし、しっかりせんとあ。」

そう、どんなにやる気なさそうでもこの男は高校3年生。いやがおうにもしっかりしなければならぬ立場なのだ。

そんなことを考えている間に、転入することとなる麻帆良学園高等部3年B組の前に来ていた。

「今日からこのクラスに転入生が入ってくる、皆仲良くするように。それでは入ってくれたまえ。」

「ども、今日からこのクラスに転入することになった狩野健宏です。1年間ヨロシクねえゝん、以上！」

「それじゃ狩野には豪徳寺の隣の席に着いてもらう。」

このクラスの担任は魔法先生の一人、神多羅木先生だ。かたらぎ

オールバックの黒髪に髭、サングラスをかけ、常にタバコを吸い、黒スーツを着用している。

見た目だけなら立派にヤクザなのだが、実際にはクールでマイペースな人である。

「よう転入生、俺は豪徳寺薫だ。1年間ヨロシクな。」

「おう、こっちこそよろしくな。（実際にリーゼントにしてるやつは初めて見たな・・・）」

隣の席に座っているのは豪徳寺薫である。しつてくじかある

髪型はリーゼントに服は学ランという、一昔前のヤンキーの格好をしているのが特徴だ。

始業式が終わった放課後、適当に話を切り出す健宏。

「しっかしまあ、すげーよなこの学園。完全に一つの都市になっているし。」

「確かに初めて来たやつはそう思うよな、俺も最初はそうだったし。何ならこの後案内するぜ？」

「イヤいいよ別に。昨日こっちに来た時知り合いにいろいろ案内してもらったんだ、悪いな。」

なんせ昨日だけでも20か所以上見回ったのだ、今日は警備の仕事は休みなのでゆっくりしたい。

しかし、その思いをあざ笑うように一本の電話が鳴り響く。

「もしもし、このちゃんじゃん、どつたの？へ？この後暇なら世界樹の所まで来れないかって？」

OK今から行くわ、そんじゃーね。」

「誰だ、彼女か？」

「バカ抜かせ、さっき話した知り合いの子だよ。しかし何の用かね

「ま、行ってくるわ。じゃあな。」
「おお、じゃあな。」

木乃香の連絡を受け世界樹の元へ向かう健宏。
しかし、これが悪夢の始まりになるとはこの時はまだ予想できなかった。

15分後、世界樹の元に来た健宏を待っていたのは、このか&刹那の幼馴染コンビ+麻帆良学園女子中等部3年A組のメンバーだった。
「・・・いろいろ言いたいことがあるけどまず、これはいつたいうことなのでせう？」
「実は・・・」

質問に答えたのは刹那だった。話は約1時間前にさかのぼる・・・

麻帆良学園女子中等部3年A組。良く言えば最も学園一元気があり、悪く言えば学園一騒がしいクラスで有名だ。このクラスの担任を務めるのが今最も話題の多い教師、ネギ・スプリングフィールドである。

何と年齢10才にして大学卒業程度の学力を持っている脅威のお子様だ。

さらに父にナギ・スプリングフィールドを持ち、魔法界では英雄の息子としても有名だ。

まあ今回ネギにはスポットは当たらず、3Aの生徒が主役になるが、事の発端はHRが終わった時に起こった。

「ねえ、このか。ちょっと聞きたいことがあるんだけどいい？」

このかと呼びとめたのは朝倉和美、あさくらかすみ新聞部員である。

通称「麻帆良のパパラッチ」。その腕前は「朝倉に知られたら世界中に知れ渡る」と言われるほどである。

これは完全に余談だが、クラスNO・4の巨乳の持ち主らしい。

「ええよ、朝倉。一体何なん？」

「実はね、この写真の人について聞きたいのよ。」

そう言われて写真を覗き込むと、そこには健宏とこのかが楽しそうに歩く写真が写っていた。

「ああ、この写真の人？これはな、ウチの知り合いでタケちゃん言うんや。」

「タケちゃん？何か深い仲っぱいね。彼氏？」

「そうやって言いたいところやけどちゃうよ。タケちゃんはウチとせつちゃんとうよう遊んでくれたお兄さんや。」

「へえ、そうなんだ・・・って桜咲も！？これはスクープの匂いだね。桜咲、ちよつといい？」

「何でしょう朝倉さん？」

何も知らない刹那が朝倉に近づいてゆく。
憐れな子羊 スクープの鬼

「今このかに聞いたんだけどさあ、この人って桜咲の幼馴染でもあるんだって？」

「！？お嬢様と健宏さん！？」

写真を見た刹那が驚きの声を上げる。その声に驚き3Aの生徒全員が集まって来る。

「何、どうしたの？」

「このかのデート写真見せたらさ、桜咲が反応しちゃってね。何かこのかと桜咲の幼馴染らしいのよ。」

『このかのデート写真！？しかも、このかと桜咲との幼馴染でもある人！？』

朝倉の発言に3Aの生徒が俄然騒がしくなる。何せ女子中学生、他人の恋バナほど楽しいものはない。

今も勝手に、三角関係か！？略奪愛！？など無責任な会話が飛び交っている。

というか既に女子中学生の会話ではない。

「そ、そんなではありません！健宏さんはただ幼馴染というだけで・・・」

「またー、そんなこと言っちゃって。桜咲もこの後二人出会ってたじゃ「何で知っているんですか！？」「へえー、会ってたのかぁ・・・」

「」

朝倉の誘導質問で墓穴を掘ってしまい、真っ赤になってしまう刹那。「これはぜひとも健宏さんって人に取材しないとね！このか、この人呼び出して！」

興奮して、鼻息を荒くしながらこのかにせまる朝倉。絵面的にはちよつとまずい。

「ええよー。ちょうどこの後、せっちゃんも誘って一緒にタケちゃん遊びに行くつもりやったんや。」

「お、お嬢様！？」

私を巻き込まないでください！？と言わんばかりの刹那。巻き込まれないように等比社1・5倍ほどの速さで逃げ出すが、そうは問屋がおろさない。

「早く呼び出すんだ、近衛。刹那は捕まえておくから。」
「おい龍宮！？離してくれ！？」

刹那を捕らえたのはルームメイトの龍宮真名たつみやまなである。

褐色の肌とストレートロングの黒髪、三白眼が特徴で、中学生らしからぬ大人びた雰囲気とナイスバディを持つクールビューティーである。

裏の世界では名の知れたスナイパーで、刹那と魔物退治を一緒に行う仲間でもある。

これまた完全に余談だが、クラスNO・3の巨乳の持ち主でもある。

「いいじゃないか、刹那。私も君の幼馴染に興味を持つてね。さあ近衛、呼び出してくれ。」

「う、裏切り者ー！！」

「うん、タケちゃん？このかや。この後暇なら世界樹のどこまで来てくれん？せつちゃんも一緒やで。ほな、また後でなー。」

「ナイス、このか！さて、それじゃ私も取材に行かなきゃね。皆も行くでしょ？」

『もちろん！』

さすがは3A。ここぞという時の団結力はダントツだ。

「みなさんも来られるんですか！？」

当り前じゃない、こんなおもしろいことほおっておけるもんですか！？とばかりの声上がる。

当り前だが刹那の発言は無視された。

そして現在に至る。

「あー、何というか・・・その、お疲れ様。」

その時の展開が目には浮かぶようで苦笑しながら刹那に激励の言葉をかける。

刹那の背中に漂う哀愁が何とも痛々しい。

「しかし、何でまたこんなに集まってんだ？俺なんか見て楽しいかね？」

そんな中、健宏はこの人数に対して疑問を浮かべる。何故こんなに集まったかについては、思いもよらないようだ。

「そりやそうですよ。なんせあの、このかと桜咲の幼馴染らしいじゃないですか！」

「・・・誰、チミ？」

「私は麻帆良報道部・突撃班の朝倉和美です。ご質問よろしいですか？」

「別にいいよ、お手柔らかにね。」

最初は不思議がっていた健宏だったが暇だったのか、はたまたこういうノリが好きなのかあっさりと取材をOKする。

「もちろん分かってますって。（分かっても止めないけどね）まず名前を聞かせてもらえますか？」

それからこのかと桜咲との関係について。」

「OK。狩野健宏、17歳だよん。みんな知ってる通り、このちゃ

んとせつちゃんは俺の幼馴染で、出会ったのは大体6年ぐらい前だったかな？ちなみに、俺は今日から高等部の3年に転入してまほ高寮に住むことになったから、二人の面白エピソードが聞きたい人は寮に来なよ。いつでも話してあげるからさ。」

「健宏さん？」

「そんなことゆつたらあかんえー？」

ドゴン！！

ガツン！！

調子に乗った健宏は刹那から納刀したままの夕凧の一撃を、このかからはお得意のトンカチツツコミを喰らった。

しかし健宏の発言に朝倉や龍宮などが目を光らせた生徒がいたのに気づかなかったのは二人にとって不運だった。

他にも朝倉から様々な質問を受け、解放されたのはそれから1時間ほどしてからだった。

この後、このかの最初の予定の通り3人で遊びに出かけた健宏達だったが、健宏は自らの発言の代償として昼飯を奢らされたのは言うまでもない。

第4話 女は多けりや多いほど姦しい(後書き)

「どうも、毎度おなじみ司会進行役の狩野健宏です！今回も前回同様、2人のゲストにおいて頂きました！」

「どうもー！ご紹介に預かせていただきました、麻帆良のパパラツチこそ朝倉和美です！」

「同じくご紹介に預かった龍宮真名だ、よろしく頼む。」

「だけどさー、私は分かるけどなんでたつみもゲストなの？ほとんどセリフ無かったのに？」

「少々引つかかる発言だが朝倉の言うとおりだ。何故なんだろうな？」

「作者によると、本当は真名ちゃんを出す予定は全くなかったらしい。真名ちゃんを出したのはせつちゃんが逃げ出すのを止めるためだけだったらしいよ？」

「それだけなのかい？・・・」

「あと真名ちゃんがせつちゃんを面白がって止めたのは、作者にとつて真名ちゃんは、仲の良い友達に対しては澄ました顔して友達をからかって楽しむ小悪魔的なキャラという印象が強かったらしい。」

「なんとなく判るなー、それ。」

「どういう意味かな朝倉？」

「イイ笑顔で銃をこっちに向けないでよたつみー！？てゆうかそれモデルガンだよね！？」

「まあまあ、真名ちゃん。ここで和美ちゃん殺っちゃうと後々展開に困るからやめなよ？」

「・・・チツ、仕方ない。」

「今舌打ちしたよね、たつみー！？てか、フォローひどっ！？・・・それはともかく、健宏さんラストでこのかと桜咲にとんでもない一撃喰らったよね？あれ大丈夫なの？」

「なんのなんの、昔からいろいろとんでもない目に会ってたんだ。」

たかだかあれ式のダメージ、どーってこともないさ・・・」

「昔何があっただんだい？（汗）というか、あなたに運が悪いなんて設定あつたのかい？」

「一応ね。作者が書くの忘れてたんだよ・・・主人公の設定書き忘れるってどうなのよ・・・」

「うわ、ホントに運悪いね健宏さん・・・」

「ホント、同情するよ・・・」

「・・・まあそれはさておき、次回予告いっちゃおー！」

桜通りの吸血鬼・・・

それは暗い夜道に音もなく現れ、人の血を吸うと言われている・・・健宏が警備をしていたある日の夜、お食事中に出会ってしまったのでさあ大変！

2人のバトルが勃発だ！？

ネギ先生にも出番あり！

「桜通りの吸血鬼・・・一体誰なんだろうね、取材が必要ね！」

「やめなさい！・・・真名ちゃん頼むよ？」

「了解だ。」

バシユウ・・・

「ふにゃあ・・・」

「よし、眠ったな。あんがと、真名ちゃん。

それでは皆さん、次回もお楽しみに！」

「次回もよろしく頼むよ。」

「またねえzzzz・・・」

第5話 ロリッ子吸血鬼の吸血騒動（前書き）

女は多けりや多いほど姦しい、前回それを身をもって知った健宏。
今回はついに登場エヴァンジェリン！

健宏が初めて魔法を使うよ！

奇想天外、愉快痛快な物語！

それではどうぞ！

第5話 ロリッ子吸血鬼の吸血騒動

「桜通りの吸血鬼？何だそりゃ？」

授業が終わったHR、神多羅木先生からの注意に首をかしげる健宏。

「何だ、知らないのか？ここ何日か、夜に桜通りを通ったやつが血を吸われるという事件が起きているんだよ。」

「それで桜通りの吸血鬼か・・・」

（ちよいと本腰入れて警備してみるかねえ・・・）

豪徳寺から桜通りの吸血鬼の由来を聞き、警備の強化を考える健宏。

「このちゃん達にも夜は出歩かないように言わなきゃな。」

「あー、タケちゃんや。こんなところで何しとるん？」

「こんにちは、健宏さん。」

「あ、健宏さんじゃん。」

「こんなところで会うなんて奇遇だね。」

声が聞こえ振り向くと、このか・刹那の幼馴染コンビと、何故か一緒に帰っていた朝倉・龍宮の4人がいた。

「都合良すぎねえか、オイ？」

「・・・？何の話？」

「いやね、桜通りの吸血鬼ってのが出るらしいじゃん？だから皆にしばらく夜間の外出を控えるようにって言おうと考えてたんだけど、あまりにもタイミング良く会ったもんだからつい・・・」

「・・・なるほど（ね・なー）」

先ほどのツツコミに対し尋ねたところ、明確な答えを聞き納得する4人。

「まあ今言った通り、4人とも気をつけてよ。特に和美ちゃん、吸血鬼のこと調べようとしないうちに！OK？」

「判ってるって。てゅーか3日前まではそのつもりだったんだけど、一昨日の朝起きたら、それだけはやつちやいけないって体が拒否反応起こすんだよね。何でだろ？」

「へえー、不思議な話やなー。」

「（真名ちゃん、あれ効き過ぎだったんじゃないの？）」

「（まあ、結果オーライみたいだしいいんじゃないのか？）」

「（一体何の話です？）」

「（いや3日前にね、桜通りの吸血鬼の調査するって聞かなかったから真名ちゃんに眠らせるように頼んだのよ。そしたらあーなったってわけ。）」

「（・・・何を使っただんだ龍宮？）」

「（何、唯の特殊な術式を込めた新型の麻酔弾を撃ち込んだだけさ。）」

「（なーんだ、唯の麻酔弾・・・ちょい待ち、今しんがたっついていかなかったか？）」

「（ああ、しかも彼女が初の試験者だ。何、問題はない。）」

「「イヤ、問題大アリだろ！？」」

「どーしたん二人とも？いきなり大声あげて？」

「そーよ、どーしたのよ？」

「あ、ああ。何でもない何でもない。」

「気にしないで！」

流石に本当のことを言うわけにもいかないので適当に流して置く健宏。

（麻酔云々は第4話の後書きを参照に！）

「まあ、それはひとまず置いて・・・ホント夜は出歩かないよ

うにね。」

「大丈夫だよ、私ならそれ位撃退できるからね。」

自分なら大丈夫だと、バッグからエアガンを取り出して説明する真名。

「あのね、真名ちゃん女の子なんだから、危ないことはしないように。この世の中、何が出てくるか判らないんだから。皆もだよOK？」

真名を注意し、全員の頭を優しくなで、諭す健宏。

「……わ、わかった／＼／＼」

何で赤くなってたんだ？と思った健宏だったが、このままだと遅くなってしまうので4人を寮まで送り返す健宏だった。

時刻は7時、周りはだんだんと薄暗くなっている。

「遅れちゃったな、急いで帰らないとー。」

今現在暗い夜道を急いで帰っているのは中等部3A在籍の女生徒、宮崎のどこである。

今日は本の整理のために夜遅くまで残っていたのだ。

「あ、ここ桜通りだ・・・」

桜通りの吸血鬼、その噂に怯え、足がすくむのどこか。

「（ううん、あれはみんなが噂だつて・・・でもまき絵さんは、本当に吸血鬼に襲われたつて言うし・・・ううん大丈夫だよ）怖くないー、怖くないー。吸血鬼なんて怖くないー。」

吸血鬼の恐怖を和らげるため、歌（？）を唄うのどか。しかし、こういう時にそういう行動をとってしまうのは死亡グラフである。

「（んー？あの人は一体？）」

さらに先を進んでいくと、街灯の上に魔女がかぶっているような帽子を頭にかぶり、体にマントを着けた人物がいた。その口から立派な牙が覗いている。

「出席番号27番、宮崎のどかか・・・悪いが血を少しばかり分けてもらつぞ」

「きゃああー！！」

謎の人物が襲い掛かり、宣言通りに血を吸われる直前に乱入者が現れる。

「待てー！！ば、僕の生徒に何をするんですかー！！」

それはネギだ。実は、自分が受け持っている生徒の一人が吸血鬼に襲われたため、独自に放課後から調査を行っていたのだ。

のどかは気絶してしまったので、魔法の秘匿の心配もなくなり躊躇なく魔法を使う。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル。風の精霊11人。縛鎖となつて敵を捕まえる。」

魔法の射手・戒めの風矢！！」

ネギは拘束呪文を使うが、相手はフラスコを呪文に向けて投げ、魔法を使い防ぐ。

レフレクショ-

「氷楯・・・」

「僕の呪文を全部はね返した!？」

呪文がかき消されるならまだしもはね返されるなんて・・・
予想していたとはいえ、自分の何倍もの実力を持つ魔法使いを目にして、ネギに衝撃が走る。

「驚いたぞ・・・凄まじい魔力だな・・・」

風に帽子が飛ばされ長い金髪が靡かせて、素顔が露になる。黒いマントで身を包み、ネギの攻撃が防ぎきれなかったのか、指から軽く流れる血を舐め感嘆の意を述べる彼女は・・・

「き、君はウチのクラスの・・・エ、エヴァンジェリンさん!？」

思ってもみなかった吸血鬼の正体に、ネギに動揺が走る。

「フフ・・・新学期になったことだし、改めてご挨拶といこうか、先生? いや、ネギ・スプリングフィールド。10歳にしてこの力、さすがアヤツの息子だ」

「っ!!!(この人は何で父さんのことを!?! いや、今はそれどころじゃない!)」

ど、どうして!? 僕と同じ魔法使いなら、人を襲ったりするんですか!？」

突然父の事を持ち出されさらに動揺するが、今はそれ所ではないと

自分を言い聞かせる。

「ど、どうして！？僕と同じ魔法使いなら、人を襲ったりするんですか！？」

「甘いな・・・この世には、善良な人間も悪い人間もいるだろ？それと同じく、魔法使いにもいるのさ！！氷結・武装解除！！」

彼女はフラスコと試験管を投げ、呪文を唱える。武装解除とはその名の通り、相手の武装を解除するだけでなく、何故か服をも脱がせてしまう初步的だが戦闘ではとても有効で、ラッキースケベな技だ。咄嗟にレジストしたものの完全に防ぎきれず、何故かのどかが半裸になってしまいその少女の姿に敵のことも忘れ、パニックになる。そんな時、

「何や、今の音！！」

「あつ、ネギーー！！」

いつまでも帰ってこないのどかを心配し迎えに来た、神楽坂明日菜とこのどかが現れた。

神楽坂明日菜、このかと共に3Aに在籍する生徒である。かぐらさかあすな

当初は魔法のことを知らなかった一般生徒だったが、ネギの着任初日にネギが魔法使いであることを知ってしまい、魔法使い達の事件に関わっていくことになった女の子である。

現れた二人に対し、エヴァは2人に気づかれないように場を立ち去る。

「アスナさん、このかさん！！宮崎さんを頼みます！！身体には何ともありませんから！！」

僕は事件の犯人を追いかけますので、心配しないで先に帰ってください

「さい!!」

「ちょっと、ネギ!!」

アスナの静止の言葉にも耳を貸さず、走り去る。

アスナは魔法がらみの事件と察し、またネギを放っておく事など出来ず、ネギを追いかけることを決意した。

「ゴメン、木乃香!! 私も追いかけるから、後はよろしく!!」

「あ、アスナー!?!」

アスナも走って追いかけてしまい、この場には木乃香と半裸で倒れているのどが残された。

「そんなんゆわれても、うち一人じゃどないしたらええねん・・・」

いつもは能天気なこのかも途方に暮れてしまう。ひ弱な彼女ではのどかを抱え上げることなどできないからだ。その時・・・

「おい、何だ今の音は!」

「あっちの方からですわ!」

「ま、待って下さいお姉様!」

周りから聞こえてくる声に驚きあたりを見回すと、今夜警備を行っていた健宏、高音、メイが現れた。

「このちゃん、何でここにいるんだよ!? 夜は歩き回っちゃダメだつて言っただろ!?!」

「あー、ごめんなータケちゃん。のどかなかなか帰ってこんかつたから探しに来たんや・・・」

健宏の叱責に慌てて謝るのか。しかし今はそれどころではない。

「お説教はひとまず置いて、そののどかって子を安全な場所に・
・・って半裸！？なぜに！？」

「あつ！！見たらあかんえー、タケちゃん！！」

「わーっとるわー！！ひとまずこれを早く！！」

後ろを向いてパーカーを脱ぎ、このかに渡す。彼女も心得たのか、
のどかに着せる。このかがのどかに着せたのを見計らって、健宏も
元に戻す。

「一体何が起こったんだ？」

「それが、ウチにもよう分からのや。噂の吸血鬼の仕業やと思う
んやけど、ネギ君とアスナ・・

アスナはウチと同じルームメイトの友達で、追いかけて行ったんや。

「

「吸血鬼？ま、真相はさておき、今はそのアスナって子とネギ君つ
てのを連れ戻さないとな。（アスナちゃんか。ネギ君は魔法使いつ
てのはわかるからいいとして、アスナちゃんの方はどうすつかねえ・
・・

その前に問題は吸血鬼だ。こりゃちつとばかし面倒だぞ、魔力の残
り香から考えると相当の手練れだなこりゃ。」

「そうなんや。でも、一人じゃ運ばれへんからどうしようかと・・・

「

「ああ、それで途方に暮れてたのか。」

事情は分かった。このままこのか達をここに残して置くのは危険だ
ろう。しかし件の吸血鬼をほおっておくわけにもいかない。大体2
人を送り届けるにしてもそれは女子寮、しかも一人は半裸だ。健宏
が送った場合、問答無用で逮捕されてしまうのは言うまでもない。

「俺が女子寮まで送るわけにもいかないしなあ・・・あ、そうだ。高音ちゃん、メイちゃん。この二人を女子寮まで送って行つて来れねえ？2人をこのままここに残すわけにもいかないしな。」

自分が送るより高音達を送る方が怪しまれないだろうと解決策を出す健宏。

「私たちがですか？判りました、お二人は私たちに任せて下さい。

（それはかまいませんが、一人で大丈夫ですか？）」

「ああ、頼むよ。（大丈夫だって。大体あつちにや魔法を知らない一般人の女の子だっているんだぜ？どうやって誤魔化すか考えてないんだろ？）」

「（それはそうですがそうではなくてですね・・・まああなたなら彼女が相手でも大丈夫でしょう、判りましたわ。）では参りましょうか。」

短い間でこのかに気づかれないように会話する二人。それに気がつかないこのかではない。

「うー、二人で何話しとるん？ウチだけ仲間外れや。てゆーか誰なんこの二人？ウチなんも知らんのやけど・・・」

二人の仲のよさに嫉妬したこのかだったが、その前に健宏と一緒にいた知らない二人の女の子に興味を持つ。

「あら、私としたことが・・・私は聖ウルスラ女学院2年の高音・D・グッドマンと申しますわ。」

「私は女子中等部2年の佐倉愛衣です。初めまして。」

このかのことは学園長に聞いていても、会つのは初めてだった二人はこのかに自己紹介をする。

「ウチは女子中等部3年の近衛木乃香や、よろしくなー。ところでこんな時間に何で3人一緒におつたん？」

自らも自己紹介をし、当然の疑問を浮かべるこのか。

「この前ちよいと知り合つてね、帰るのが遅くなつたらしいから送つてたんだよ。」

このかも納得するような説明を述べる健宏。

「あーそつかー、それもそうやな。本当はタケちゃんに送つてほしいんやけど、さすがにのどかがこんなんやからなー・・・ほなおねがいしていい？高音さん、メイちゃん？タケちゃん、アスナとネギ君のことよろしくなー。」

「ええ、もちろんですわ。では健宏さん私たちは行きますわね。」

「ああ、頼むよ高音ちゃん。任せときなつて、このちゃん気ーつけてな。」

3人を見送り吸血鬼を追う健宏。その途中で二人を追いかけるアスナを見つける。

「ちよい待ち、君がアスナちゃん？」

「あ、アンタは確かこのかの幼馴染の・・・何でここに？」

思つてもみなかった人物からの問いに驚き、足を止めるアスナ。

「君が吸血鬼を追つた子供先生を追いかけてつたつてことをこのち

やんに聞いてね、連れ戻しに来たわけよ。」

追いかけてきた理由を話す健宏。

「大丈夫ですよ、ネギを連れ戻したらすぐ帰りますから。（あーもう、何で付いてきたのよ！これじゃこの人に魔法がばれちゃうじゃない！）」

「いや、大丈夫じゃないって。ネギ君は俺が何とかするからさ。（こりやらちが明かな、こうなったら・・・）」

しかし健宏は魔法関係者じゃない一般人なので魔法がばれるとマズイと思い、助けを拒むアスナ。

それに対し、アスナは魔法関係者じゃない一般人なので魔法がばれるのは面倒だと思い、説得を試みる健宏。どちらも誤解している分たちが悪い。

「あ、あれはまさかネギ君か！？（今だ、ゴメンねアスナちゃん！）」

「え、ネギ！？どこにもいないじゃ・・・あれ？（ドサッ！）」

アスナが気を取られているうちに、アスナを気絶させる健宏。

「ホントゴメンね、アスナちゃん・・・さて、さつさとネギ君と吸血鬼を止めに行きますか。」

アスナを建物の壁に立てかけ、ネギ達の後を追う健宏。

ちょうどそのころ・・・

ネギはエヴァに追いつき、空中戦を制した。彼女に武装解除をかけ、黒マント（コウモリの集合体）を吹き飛ばす。

「これで勝負ありました。父の事を教えてください。」

建物に降り立ち、ネギは降伏を呼びかける。しかし、下着姿になったエヴァは余裕の表情を崩さない。

「・・・これで勝ったつもりか？なら、お得意の魔法を掛けてみる。」

ズシャ！！

突然、エヴァの後ろから何者かが現れる。

「（新手？仲間がいたなんて！？・・・なら、二人とも捕らえるだけだ！！）」

ラス・テル・マ・スキル・マギステル。風の精霊１１人。縛鎖となつて敵を捕まえる。魔法の・・・あたっ！！

咄嗟に有効な戦術を判断し、呪文の詠唱に入る。しかし、それは新手的デコピンによって塞がれてしまう。弾かれたオデコを撫でながら、不思議そうな表情を浮かべる。

「あたた・・・あつ！君もウチのクラスの・・・」

「紹介しよう。魔法の従者『絡繰 茶々丸』だ。」

「えええええ！！茶々丸さんがあなたのパートナー！！」

軽く頭を下げる茶々丸に対し、ネギは驚きを隠せない。

実際に魔法の従者を見るのは初めてのネギ。

本来ならここで魔法の従者に対しての説明を述べるのだが、それは

後日行うでしょう。

「パ、パートナーがいなくなつて!!」

何度も魔法を放とうとするが、その度に茶々丸によって中断させられる。

「無駄だ。魔法は詠唱中に邪魔されると無効となり、また唱えなおさなくてはならない。

だからこそ、盾や剣となり守護するのが本来の従者の役目。パートナーがいらないお前は勝てるはずがないのだ。」

『魔法の従者』 本当の意味を知り、慌てるネギ。

しかし、ネギは諦めない。

相手が油断しているこの時こそチャンスだ。だからこそ諦めるわけにはいかない!

「ラス・・・」

茶々丸のデコピンのタイミングは同じなので、先に詠唱し杖に跨り後ろへ飛ぶ。

うまくタイミングが合い、空振りした彼女から距離を開けながら詠唱を続ける。

「縛鎖となつて敵を捕まえる・・・」

正面からネギを追いかけてくる茶々丸。おそらく、また詠唱の中断をさせる気だろう。

ここでネギはある一つの賭けに出る。

「（お願い!!）」

茶々丸の攻撃がまたデコピンと予想し、勘で奇跡的に2度目の避ける事に成功する。

しかも、今度は後ろではなく正面へだ。

「っ!!」

そう、ネギの狙いはエヴァだったのだ。

今の彼女は無力だし行動不能にさせてしまえば、茶々丸もおとなしくなるはず。一直線にエヴァへ向かうネギだが・・・

「なっ!!」

「油断しましたね。」

更にスピードを上げた茶々丸に追いつかれ、後ろから羽交い絞めにされる。

時間稼ぎに距離を開けすぎたのが原因だった。

ネギの速度は最高でも自動車並、対する茶々丸はジェット並。大人と子供ほどの差があるのだ。

杖もその拍子に落としてしまい、もうネギには成す術がない。

「うぐぐぐ・・・」

「申し訳ありません、ネギ先生。」

「よ、ようやくだ・・・この日をどれだけ待ち望んだが・・・これで呪いも解ける。」

ネギを捕まえたままエヴァの下に戻ってくる茶々丸。

エヴァは少しずつネギに近づき、興奮気味に今の思いを口にする。
ネギも『呪い』の言葉に反応を示す。

「の、呪いって、なんですか？」

「お前は知らぬのか？
ならば教えてやる！」

15年前、お前の父『サウザンドマスター』に掛けられた呪い！！
魔力も極限に封じられ、今までずっと女子中学生をやらされてい
るんだぞ！！

アヤツが来ていたら、このような苦勞もなかったのに
「ごほっ、ごほっ！！そんなことをいわれても・・・」

エヴァはネギの襟元を掴んで振り回し絶叫する。
最後の言葉は小さい声で聞き取れなかったし、咽てそれどころでは
なかった。

「この呪いを解くには、ヤツの血縁たるお前の血が大量に必要なの
だ。悪いが、私の目的の為に死ぬまで血を吸わせてもらう！」
「い、いやですー！！」

口を開き、首元に顔を寄せるエヴァに必死に抵抗する。
しかし茶々丸の拘束が解けるはずも無い。
もう駄目かと、恐怖で目を瞑ろうとするネギ。その時・・・

「デビス・エイルス・レビス・ラビテウス！魔法の射手・炎の一矢
！」

どこからともなくものすごいスピードで飛んできた魔法の射手がエ
ヴァンジェリンを襲う。
さすがのエヴェンジェリンもこれに当たるとまずいと思ったのだろ
う、慌てて自分に襲い来る魔法の射手を回避する。

「クツ、一体何者だ！？茶々丸！」

「了解しました、マスター・・・データとの照合完了、おそらく狩野健宏さんだと思います。」

「何、狩野健宏だと！？」

その可能性は思いつかなかったのか、茶々丸の返事に驚きを隠せないエヴァ。

そうこうしているうちに健宏が現れる。

「お、久しぶりだねネギ君。大丈夫だった？」

「か、狩野さん！？あなた、魔法使いだったんですか！？」

思ってもみなかった人物の登場に驚くネギ。

「あり？学園長先生に聞いてないの？」

（ありや、マズツたかこりや？）

自分が魔法使いだと知らなかったネギに対し、これはまずいんじゃないかと冷や汗を流す健宏。
その時、

「キサマら・・・この私を無視するとは何事だー！！」

今の今まで忘れられていたエヴァが怒りだす。何せ魔法の射手をよけたと思ったら放った張本人が現れ自分を無視し、ネギとしゃべっているのだ。怒るのも無理はない。

「おっとそうだった・・・ところで君、誰？早く帰ないと危ないよお嬢ちゃん？」

エヴァが犯人とは思わず、帰るよう優しく諭す健宏。

「アホか貴様は！この前の模擬戦の時にあっただろうが！」

「え、マジで？」

タカミチとの模擬戦の時にいたことを主張され、軽く驚く健宏。

「ごめん、ホンマに気づかんかった・・・ところでキミ、誰？」

「キサマ、私を知らんのか！？私の名はエヴァンジェリン・A・K・マクダウェル、吸血鬼の真祖にして最強最悪の魔法使いだ！」

バカにされたと思い、自分が何者かを知らしめるため名乗るエヴァ。
それに対し健宏は・・・

「吸血鬼の真祖、エヴァンジェリンだと！？・・・知らん！」

ズシャア！！

予想もしていなかったセリフにズツこけるエヴァ。

「き、キサマ本当か！？本当に知らんのかこの私を！？貴様は詠春の部下だろうが！」

健宏が知らなかったせいか、はたまたズツこけて痛かったのか涙目で睨むエヴァ。

理由はおそらく後者の方だろう。

「・・・まあいい、死にたくないのなら私の邪魔をしないことだな。さて、吸血の続きといこうか、ネギ先生？」

どうでもよくなったのか、相手をするのに疲れたのかネギからの吸血を再開するエヴァ。

「おーっとそうはいかねえよ、エヴァちゃん。こっちもちゃんと連れて帰るって、このちゃんと約束してるんでね。」

「だれがエヴァちゃんだ！・・・」

キサマ、本当に私と殺りあうつもりか？手加減はせんぞ？」

一触即発の空気に緊張が張り詰める。
その時、

「ネギー、大丈夫なのー！？」

何と先ほど気絶させたはずのアスナが復活して追ってきたのだ。

「ゲエッ！？普通ならあと1、2時間は気絶してるよう調整したんだぞ！？何でもう目え覚ましてんだ！？」

「チツ、また邪魔者か・・・おい狩野、この勝負預けたぞ！行くぞ、茶々丸！」

「はい、マスター。」

さすがに健宏相手だと手に余ると思ったのだろうか、健宏の気がそれた瞬間エヴァは屋根から飛び降り去っていった。

ネギを見ると、相当怖かったのか泣き出しており、アスナがよしよしと慰めていた。

健宏はエヴァ達が去っていった方向を見ながらネギの方へ歩いて行った。

第5話 ロリツ子吸血鬼の吸血騒動（後書き）

「こんにちはまた！毎度おなじみ司会進行役の狩野健宏です！

今回のゲストは6話目にしてやつとスポットが当てられたこの方！」

「初めまして、ネギ・スプリングフィールドです。これからよろしくおねがいします。」

「いやー、ホントやつと出てきたねネギ君。そのわりには微妙な気もするけど。」

「いえ、出られただけでも嬉しいですよ。」

「ホントイイ子だねえネギ君は。今回は何と初めて俺が魔法を使うんだ。」

「あれが健宏さんの始動キーなんですネ。」

「そ。『デビス・エイルス・レビス・ラビテウス』、これが俺の始動キー。これは何か適当に考えたところ、意外によかったんで採用したらしいよ。」

「へえー、そうなんですか。素敵な始動キーですね。」

「・・・君、ホントにイイ子だねえネギ君・・・なんかこつちが申し訳ないくらいだよ。まあついでに言っておくと俺の得意な属性は今の所、火らしいね。」

もちろんまだあるけど、それは後のお楽しみだってさ。」

「わあー早くみたいナ。」

「そんなことより、次回予告だ！」

エヴァとの顔合わせから数日、健宏はいつものようにこのか達と遊ぶ約束をしていた。

しかし、待ち合わせ場所で起こってしまった魔法バトル。

しかもその瞬間をこのかに見られてしまった！

一体どうなる！？

「一体どうなるんでしょうね？」

「こればかりはな・・・作者はその場で小説作るタイプだからマジでどうゆう展開になるのかわかんないんだよなあ・・・」

「即興なんですかコレ!？」

「そんなことより奇想天外、愉快痛快な物語!これから目が離せないぞ!次回もお楽しみに!」

「皆さん、どうか読んでくださいね!」

第6話 ついにバレた！？（1）（前書き）

舞台はエヴァとの顔合わせから数日後。

このかに魔法がばれてしまう！？

今回はちよっぴりシリアス風味？

今回も目が離せない！

第6話 ついにバレた！？（1）

エヴァとの顔合わせから数日後、健宏は学園長室に呼び出されていた。

「健宏君、数日前エヴァと戦闘を行ったというのは本当かの？」

「戦闘っていか何て言うか・・・ネギ君が襲われていたので一発魔法の射手撃っただけですよ？」

学園長に数日前のエヴァとの顔合わせのことを聞かれ正直に話す健宏。

「・・・まあ良い、今後はこのようなことをせんようにな。頼むぞい。」

「わかりましたよ、学園長。」

話を終え退出する健宏。その後肩にイタチ（？）を乗せたネギと、アスナに遭遇する。

「お、ネギ坊ちゃんじゃないの・・・アスナちゃんも一緒か・・・」

「あ、お久しぶりです狩野さん。」

「あーっ、健宏さん！この前はいきなり何てことしてくれたのよ！」

「あーいや、あれはつまり「あのですね、アスナさん。狩野さんは魔法使いでアスナさんのことを一般人と誤っていただけで」ってネギ！？何言っちゃってんの！？」

アスナへの言い訳を考えていた健宏だったがネギがアスナに自分が魔法使いだということをバラしてしまい、いつものおちゃらけた雰

困気をかなぐり捨て問い詰める健宏。

「じ、実はアスナさんは以前から魔法のことを知っていました・・・」

「そうなの!？」

思いもよらないネギの言葉に驚く健宏。

「そんなことより、何でこの前なんことしたんですか!？」

「あーゴメン、一般人だと思ってさ・・・魔法がバレる訳にはいかないし、説得する時間も無かったからね。それに君は魔法の存在を知っているだけで、一般人ということには変わりはないからね。もし君が魔法関係者だってわかってても俺は止めたと思うよ？」

「だからって!・・・」

「仕方ねえよ姐さん、旦那の言うとおりだぜ？」

「何だこのイタチ？」

「俺たちはイタチじゃなくなつてオコジヨ妖精のカモツスよ、狩野の旦那!」

改めてアスナに謝った健宏に同意したのはオコジヨ妖精のカモである。

アルベール・カモミール、由緒正しきオコジヨ妖精でネギの使い魔である。

「旦那って俺はまだ17だぞ? まあいい、俺このちゃん達と遊ぶ約束してるからじゃあな!」

危ないことすんなよー! そう言い残し、立ち去る健宏。

「何て言うか変な人よね、健宏さんって。」

「そうですか、狩野さんはいい人ですよ？」

「そんなことよりさっきの作戦通り茶々丸って野郎を探し出して、ボコツちまいやしょうぜ兄貴！」

この会話だけ聞くとヤクザの殴りこみのようだが、実際は茶々丸を戦闘不能にしてエヴァの戦力を半減させる力モの作戦である。

「でもやっぱりなあ・・・」

「何言ってるんスか姐さん方、そのためにさっき仮契約したんスよ！大丈夫、自信持って下さい！」

最後まで渋っていたネギとアスナだったが力モの説得を受け茶々丸を探し出す。

ちょうどその頃健宏は

「はあゝ、癒されるねえ・・・」

数多くの猫達と戯れ、癒されていた。

このか達との待ち合わせ場所に早めに着いた健宏は猫を発見、可愛がっていたところたくさん猫が寄って来て今のような状態になったというわけである。

「ほんと癒されるよ、ここんとこ戦闘やら何やらいろいろあったからなあ・・・」

何かを達観したような笑顔で呟く健宏。いい具合にキているのだろう。

健宏がそうやって癒されている時、
「あり、行っちゃった・・・あれは茶々丸ちゃんとネギ達？何やってんだ？」

可愛がっていた猫達がいなくなってしまうと探していると、茶々丸とネギ一行を見つけた。

しかし何やら様子がおかしい。

しばらく様子を見てみるとアスナが茶々丸に襲いかかり、ネギが攻撃呪文で攻撃する。

「魔法の射手 連弾・光の11矢!!」

その魔法の射手は茶々丸を破壊するには十分な威力を持っていた。

ナンダ、アノ威力ハ？コロスキナノカ？

ドクン・・・

健宏の脳裏に、自分の周りに延々と転がっている屍の光景が映し出される。

イヤダ、モウ目ノ前デ誰カガ死ヌノハ・・・

「やめろ、やめろおおおー!!：デビス・エイルス・レビス・ラビテウス!!」

逆巻け 紅蓮の焰 彼の者に 炎の加護を 炎華獄炎 炎障壁!!」

ドガンッ!!

ネギが思いとどまり魔法を自分の方へ向けた瞬間、勝手に爆発する

魔法。

間に合わなかったのか？

あまりのことに呆然とするネギ。爆煙がはれた後、茶々丸を護るように現れている炎の竜巻に驚き、竜巻が消え、見えてきた茶々丸の傷一つない姿に安堵する。

「良かった・・・でも、一体誰が？」

「この魔力反応は？」

「これはどうということだ、ネギ？」

茶々丸の無事が判り安堵するネギを待っていたのは、底冷えのするような声を出しネギに対し詰問する健宏の姿だった。

「狩野さん！！これはですね・・・」

「俺はお前の言い訳を聞いてるんじゃない、何故茶々丸ちゃんを殺す攻撃をしたのかを聞いているんだ。」

「殺す攻撃！？ちよつと、どうということよネギ！？」

慌てて事情を説明するネギに何故殺す攻撃をしたかを問う健宏。健宏の言葉に驚くアスナ。

それもそのはず、カモにとって茶々丸をボコす＝破壊するという段取りで、

アスナにとって茶々丸をボコす＝戦闘に参加できなくなるよう動けなくするということだったのだ。

そんな緊迫した空気の中、茶々丸が口を開く。

「狩野さん・・・」

「茶々丸ちゃん、悪いけど今日はこのまま引いてくれねえ？頼むよ。」

「ですが・・・わかりました。ネギ先生、アスナさん、狩野さん、私はこれで。」

口を開いた茶々丸だったが、振り向いた健宏が自分に向けたいつものようにおちやらけていながら、
しかしどこか無理をしている力の無い笑顔を見た茶々丸は何も言えず、静かにその場を飛び去るのだった。

「やいやい、テメー！！何で邪魔したんだよ！？さてはエヴァンジェリンの仲間だな！！」

そうじゃなかったら、庇うこともないしな！！兄貴、コイツもボツコボコにしてやろうぜ！！」

「黙れ。」

茶々丸が離脱するのを見送ったが、ふと我に返ったカモが文句を言うが、健宏の淡々としているが底冷えした声に野性のカンが騒いだカモは、何も言えなくなる。

「さて、聞こうかネギ。お前の言い分を。」

ネギは全てを話す。茶々丸の強襲の理由を・・・

「なるほど。エヴァちゃんの戦力半減のためにねえ・・・」

話を聞いていた健宏もだんだん頭が冷えてきたのか、いつもの人を喰ったような態度が戻ってきた。

「なあネギ・・・俺も別に戦うなどとは言わん、戦いの前に相手の戦力を半減させるのは戦法の一つだし、着弾する前に標的から外そうとしたからな。だが今回の相手はお前が担当するクラスの子だろ？

もし茶々丸ちゃんに何かあったらお前や片棒を担いでしまったアスナちゃんはどうなる？それにクラスの子たちにどう説明するつもりだったんだ？」

「っつ！！」

自分達の行動の後に、どういう結果が待っているのかを理解した2人は青褪める。

「クラスの子は良い子達ばかりだからな。何とかして誤魔化すしかないんだろっけどその罪悪感はずっと永遠に付きまとうちまう。そのまま担任を続けられんのか、ネギ？」

「それは・・・」

無理だろう。その罪悪感はずっと一生消えないのだ、自分はもうなつてしまっただけの想像もつかない。

下手したら杖さえ持てなくなるかもしれない。

「・・・その様子からすると自分たちが何をしたのか理解したらしいな。判ったらもう行きな。」

この後このちゃん達がここに来る、今のままじゃ会っても気まずいだろう？だから早く・・・！！このちゃん！？」

ネギ達が何をしたのか理解したことを判断した健宏は、この場から立ち去るよう言う。

しかし、時すでに遅し。このかは一部始終を見ていたのだった。

第6話 ついにバレた！？（1）（後書き）

「どうもおなじみ司会進行役の狩野健宏です！今回のゲストはこのお方！」

「絡繰茶々丸です。よろしくおねがいします。」

「まさかネギが茶々丸ちゃんを襲うとはなあ・・・」

「その節は助けていただきありがとうございました。」

「イイよ礼なんて。俺は当然のことをしただけだし。ところで今回茶々丸ちゃんを助けた魔法、炎華獄炎 炎障壁。これは作者が考えたオリジナル魔法なんだ。」

「そうなんですか？」

「ああ、風花旋風 風障壁の炎バージョンと考えてくれ。」

今回はこれだけじゃ終わらないぞ。何とこの小説に初めて感想が書かれたんだ！」

「そうなのですか？」

「作者はスッゲー嬉しいらしいぜ。文才がないからなかなかアクセス数も伸びないって悩んでたらしいからな。」

「それは素晴らしいことですね。」

「でしょ？それで感想の内容は・・・なにに、このかの護衛のわりには他のことばかりじゃないかって？まあ、確かにそう思うよな・・・」

「やはり行っていないんですか？」

「いや、実際作者が書いてないだけでちゃんとやってるんだぜ？このちゃんにバレないように、でも何かあった時いつでも助けられるように護衛してるのさ。縁の下の力持ちってやつだ。」

「そうだったんですか、お疲れ様です。」

「あんがと。というわけで感想ありがとうございました。」

また、このような後書きでその理由を書かせてもらったのは、同じような気持ちを抱いてる人がいるかもしれないと思ったからなので

不快に思われた場合はすみません。」

「どうか私からもおねがいます。」

「ありがとね、茶々丸ちゃん。それでは気を取り直して次回予告行ってみよう!」

このかにバレた!?!どうやって誤魔化そう!?!
健宏が取った行動は!?!

「一体どのような行動をとるのでしょうか?」

「こればかりは作者の気分しだいだからな。ま、なるようにしかならんだろうさ。それではこの辺で!奇想天外・愉快痛快な物語、次回も読んでね!」

「ご静読ありがとうございました。」

第7話 ついにバレた！？（2）（前書き）

このかに魔法を見られてしまった！？このかにどう説明する！？
今回はギャグとシリアスの二本立て！
幼馴染トリオから目が離せない！

第7話 ついにバレた！？（2）

何が起こったんやろ？・・・

タケちゃんと遊ぶつもりでせっちゃんと一緒に待ち合わせ場所の公園に行ったんや。

そしたらそこでな、ネギ君とアスナが茶々丸さんと喧嘩しとってん。そんでもってネギ君がよう分からへん言葉を出すと、周りから光の矢みたいのがぎょうさん出て茶々丸さんへ襲いかかったんや。えらいキレイやなあと見とれとったんや。でも、それを見たタケちゃん
は・・・

『やめろ、やめろおおおー！！デビス・エイルス・レビス・ラビ
テウス！！』

逆巻け 紅蓮の焰 彼の者に 炎の加護を 炎華獄炎 炎障壁！！』

タケちゃんもなんやよう分からん言葉を出した思たら、炎の竜巻が出て茶々丸さんを包み込んだんや！

「（やべえ、このちゃんに見られた！どうすりゃいいんだ！？「タケちゃん、今のって・・・」

クツ、そりや疑問に思うよな。やべえどうすりゃ・・・」 「うわぁー、すごいなー！今のってどういうトリック使ったん！？ウチにもそのタネ教えてーな！もちろんネギ君もやで！」へ？」

「（まさかこのちゃん今のマジックかなんかと思ったのか？バレなかったのは良かったけど何か将来が不安になってきたぜ・・・待てよ、うまくいきやあ・・・よし、イチかバチか・・・）」

このかにどう説明するか考えていた健宏だったが、このかは今のマジックの一種と考えたらしい。

魔法がバレなかったのは良かったが木乃香の天然さに将来が少々心配になる健宏。だがこのまま誤魔化す算段が付いたらしい。

「違うぜこのちゃん、さっきのはマジックじゃねえんだ。」

「「「健宏さん！？（狩野さん！？／旦那！？）」「「「」

「ほんなら一体何なん？」

「さっきのはな・・・このちゃん達を驚かすドッキリだったんだよ。」

「「「「はい？」「「「」

このかにさっきのはマジックではないという健宏。まさか魔法の存在をばらすつもりか！？

そう思った4人だったが、健宏のあまりの発言に呆然としてしまう。

「（何考えているんですか健宏さん！？いくらお嬢様が天然で有らせましても、そんなので誤魔化せるわけないでしょう！？）」

「（そうですよ、いくらこのかさんだって・・・）」

「（でも、このかだしもかすると・・・）」

「（そうだよな、このか姉さんだしなあ・・・）」

「（大丈夫だつて！このちゃんならこのまま信じるって！）」

「そうなん！？メツチャすごいドッキリやったなー！」

「「「「（信じたー！？）」「「「」

「（な、言っただとおりだろ？）」

そんなこと言っても信じるはずがない・・・そう思っていた4人（アスナとカモは誤魔化せるかもしれないと思っていたが）はこのかがあっさり信じたことに驚きを隠せない。

「いやーホント苦労したぜ・・・ネギ達にも協力してもらってな。ちなみにさっきの光の矢みたいなのは、極細のワイヤーを張り巡ら

せてそれに特殊な塗料を塗って発光させてたんだ。炎の竜巻はワイヤーに炎をまわりつかせたのさ。この前このちゃん面白いことなんかないかっていつてたろ？どうだ、面白かったろ？」

「うん、めっちゃおもしろかったわ！ホンマありがとなータケちゃん！もちろんネギ君とアスナもな！」

「そ、そうですか。喜んでもらえて嬉しいですよ。」

「ほ、ホントね。私たちも協力した甲斐があつたわ。」

まるで本当のことのようにデタラメが出てくる健宏、そのデタラメに便乗するネギとアスナだった。

「そや！ネギ君、アスナ、この後暇？もし暇やったら今から5人で遊びにいかへん？」

「え！？ご、ゴメンねこのか。私この後用事があるのよ。」

「はう！？す、すみませんこのかさん。まだ仕事が残ってまして・・・」

今一緒に遊びに行く気まずいから！互いにそう思ったふたりは、適当な都合をでっち上げこのかの誘いを断る。

「そっか、残念やなー・・・しゃーない、3人でいこか。なー、せつちゃん、タケちゃん。」

「え、ええ・・・」

「OK、このちゃん。そんじゃ行きまひよ行きまひよ。」

そう言つてその場を去る3人。

「健宏さんつてさあ、変だけどスゴイ人よね・・・」

「そうですね・・・」

「そうだなあ・・・」

3人とも健宏の認識を改めるのだった・・・

「まさかあんな誤魔化し方をするなんて・・・」

その後、3人で遊びに行き、さっきの健宏の誤魔化しに呆れる刹那。
このかは今服を選んでいるようだ。

「しゃーないやん、このちゃんがマジックだと思っちゃったからついそれに乗っちゃったんだよ！・・・まあ理由はそれだけじゃ無いけどな。」

「他の理由、ですか？」

このかがマジックだと思ったからそれに合わせたという健宏だが、
理由はほかにあるという。

「せっちゃんさあ、魔法バレたらまたこのちゃんから離れるつもりだったろ？」

「！！・・・何故分かったんですか？」

「ネギ達がバトツてるのをこのちゃんが見たとき、この世の終わりにてーな顔してたからな。それでピンと来たのよ。」

幼馴染だかな、それぐらい分かんよ。こともなげに言う健宏。

「なんで離れようと思ってんのかは知らないけど、せっちゃんがそれを納得しているんなら俺はそれでもいいと思う。でも、納得してないのにこのちゃんのためだからって離れるのは、ただ現実から逃げてただけだ、そういう理由なら俺は止めるぜ。」

納得してないのにこのちゃんのためだからって離れるのは、ただ現実から逃げてるだけだ・・・
その言葉は刹那に重くのしかかった。

「・・・ればいいんですか・・・」

「何だって？」

「それなら、私はどうすればいいんですか!？」

唇を噛み締め、切り裂くような声で叫ぶ刹那。

「私だってこのちゃんと離れたくない!でもそうしなければ、このちゃんは魔法の存在を知ってしまう、そうなればこのちゃんは危険な目に巻き込まれてしまう!そうならないようにするには、このちゃんから離れるしかないじゃないですか!？」

そこには普段の冷静な彼女ではなく、親友の安全を第一に考える一人の少女の姿があった。

「それに私はこのちゃんにも、あなたにも教えてない秘密があります。もし、それを知られてしまった時が怖いんです。もしかしたら私から離れてしまいかもしれない。そんな思いを味わうくらいならいつそ私の方から離れてしまうのが一番なんです!」

ついに自分の考えを口に出した刹那。そんな刹那を優しく諭す。

「それがこのちゃんを避けてた理由か、なら俺も一つ言わせてもらうぜ。このちゃんはそんな子じゃない。あの子は俺たちが知っている中でも最も優しく、そして最も強い子だ。それにな、隠してることがあるからって、そしてそれが判ったって、俺もこのちゃんもせ

「つちゃんを見捨てたりしないよ。」

「そうや、タケちゃんの言う通りや。」

せつちゃんを見捨てるはずがない、そう諭す健宏、そしてこのか。服を選んでいたはずなのにいきなり返事をしたこのかに驚く二人。

「こ、このちゃん！？服選んでたんじゃなかったのか！？」

「もちろん選んどったえー。せつちゃんの叫び声が聞こえたから戻ってきたんや。せつちゃん、ウチはせつちゃんが何を隠し取るのか知らん。でもそれを知ったって、ウチもタケちゃんと一緒にせつちゃんを見捨てたりはせん。絶対や！」

刹那に自分も見捨てることは絶対はないというこのか。

「あ、ありがとうございます！このちゃん、タケちゃん・・・」

二人の言葉に励まされた刹那は目をうるませながら昔のように二人を呼ぶ。

「あ、せつちゃん今昔みたいにウチのこと呼んでくれた！」

「俺もだ・・・。たたく遅すぎなんだよ。さてと、昔みたいに戻ったお祝いとしてアイスでも食べに行きますか。健宏さんはお兄さんですからねえ、おごつちやいますよ。」

「やった！ウチ、チョコとミントがええな！」

「それなら私は、苺とオレンジを！」

「二人そろってダブルか？・・・まあいい、おれはバニラのダブルだ！」

そう言って駆け出す3人。その光景はまるで幼い頃の3人で遊んで

いたころのようだった。

第7話 ついにバレた！？（2）（後書き）

「どうも、毎度おなじみ司会進行役のタケちゃんこと狩野健宏です！」

「そして今回はこのちゃんこと近衛木乃香と、」

「せつちゃんこと桜咲刹那の、」

「「幼馴染トリオでお送りさせていただきます！」」

「今回は3人の絆を改めて知ることができたいい話だったよな。」

「ホンマやな。」

「ええ、本当に。」

「それにしても、すごいドッキリやったなー。せつちゃんも驚いたやろ？」

「え！？あ、はい。あれには驚かされました、ハイ。」

「（そーいやアレ、ドッキリって言う設定だったな。実際にはこの回でこのちゃんに魔法がバレるっていう内容だったんだけど、流石に早すぎるって作者が変更したんだよなあ・・・）」

「ま、喜んでくれたんならいいか。そんなことより次回予告行ってみよう！」

木乃香たちとの絆を深めた数日後、健宏は茶々丸と遭遇する。

茶々丸が言うにはエヴァは風邪をひいているらしい。

お見舞いに向かう健宏だったが・・・

「何やいろいろと気になる次回予告やなー。」

「そうですね。」

「んなこと作者に言えよ、俺に言ってもしやーないだろ・・・それはともかく奇想天外愉快痛快な物語、次回もお楽しみに！」

「ほななー！」

「ご静読頂きありがとうございます！」

第8話 ロリッ子吸血鬼とお見舞い騒動（前書き）

風邪をひいたエヴァお見舞いに来た健宏。

そこで待っていたものとは？

奇想天外愉快痛快な物語、ごらんあれ！！

第8話 ロリッ子吸血鬼とお見舞い騒動

「何故にこうなった？」

時は夕方、場所はエヴァンジェリンハウス。ベッドにはこの家の主、エヴァンジェリンがいて、床にはエヴァの学校の担任の先生ネギ・スプリングフィールドが正座で座っている。ちなみに健宏は壁に寄り掛かって立っている。

なかなか立派な正座をするじゃないか、日本人並だな。そんな現実逃避をしながらこうなった経緯を思い出す健宏だった。

3時間前、学校の都合で早く授業が終わった健宏は学園内をうろついていた。

その時、

「お久しぶりですね、健宏さん。」

上から声をかけられ振り向くと、茶々丸が宙に浮いていた。

「よお茶々丸ちゃん、おひさー。どったのソレ？」

降りてきた茶々丸に声をかける健宏だったが、茶々丸が手に持っている薬を見て疑問に思う。

「これはマスターの薬です。大学部の病院にこれを取りに行ってください。マスターは今風邪をひいていますので。」

「風邪？吸血鬼の、それも真祖がか？」

「マスターは、魔力を封印されている間は10才の子供と変わらないのです。後この時期、マスターは花粉症を患っています。」

「なるほどね。花粉症か、辛いんだよなあアレ。目え痒くなるからなあ・・・」

花粉症の辛さを知っているのか、それに同意する健宏。

「しかし風邪か。そりやお見舞いに行かんな。俺も一緒に行つていい？」

「かまいません。マスターもきつと喜びます。」

当たり障りのない話をしながら歩くこと10分、二人はログハウスの前にいた。

「ここがマスター、私、そして姉さんの3人で住んでいる家です。」

「こりやまた本格的だな・・・てか茶々丸ちゃんお姉さんいたんだ？」

「はい、チャチャゼロ姉さんです。最もマスターの封印が解かれな
い限り、動くことはできませんが。」

「なるほどねえ・・・なあ、何か中が騒がしくないか？」

「確かに騒がしいですね。今はネギ先生にマスターの看病をおねがいしているのですが。」

「ネギに？何やってんだ、あのお子ちゃまは？」

そんな会話をしながら中に入ると、ネギがエヴァにリンチを受けている所だった。

「狩野さん、おひさしぶりです・・・ってあたた！？止めて下さいよエヴァンジェリンさん！？」

「貴様のせいだろーが！？」

「おいおい、何事だ！？ひとまず止めるやエヴァちゃん、チミは病人でがシヨー！？」

「貴様は狩野！何故ここにいるんだ！？ってそんなことは今は後回しだ、今はこのぼーやにお仕置きをしなくてはならんのだからな！」
「待てや、んな体で動いたら「きゅう・・・」って言わんこっちゃない！ベッドはどこだ！？」

「ベッドは2階です。おねがいできますか？」

ぶっ倒れたエヴァを慌ててベッドに寝かせる健宏。流石に苦しそうだ。

「何やってんだよ、病人のくせに。」

「やかましいわ！こーなったのも元はと言えばぼーやが悪いんだ！」

「何？何やらかしたんだこのお子ちゃまは？」

エヴァの説明を聞くとどうやらエヴァが寝ている時に魔法でエヴァの夢を盗み見たらしい。
そこから冒頭につながる。

スパアアン！！

「何やつとんじゃオノレはー！！」

「あううー、ごめんなさーい！（涙）」

話を聞いた健宏は持っていたハリセン（第3話参照）でネギをぶっ叩く。涙目になりながら謝るネギ。

どうやら自分が悪いのは分かっているらしい。

「アホかお前は！？んなことやりやーエヴァちゃんも怒るわ！」

「すいません、父さんの手掛かりが分かるかもしれないと思って・・・」

「父さん？サウザンド・マスターのか？」

エヴァの夢を覗いたのは父さんの手掛かりのため。この言葉にちょっと考え込む健宏。

「ネギ、だからってエヴァちゃんの夢を覗く理由にはならんだろ？
これからは絶対にするんじゃないぞ？」

「はい、すみません」「謝るのは俺じゃなくてエヴァちゃんだっての。
「すみませんでした、エヴァンジェリンさん。」

「ふ、フン。次は無いからな、ぼーや。」

シユンとしながら謝るネギ。ツンデレしながらネギを許すエヴァ。
流石にこれで許さないと真祖の名が廃るのだらう、少々罰が悪そう
だ。

「まあいい、もう帰ればーや。・・・見舞いに来たことに関しては
礼を言う。」

「分かりました、僕はこれで失礼しますね。それではお大事に、健
宏さんも風邪には気をつけて下さいね。茶々丸さん、失礼しました。
」

そしてネギが帰っていく。

「ようやく帰ったか。それはともかく狩野、何で貴様がここにいる
？」

「学園をうるついてたら茶々丸ちゃんに会ってね、風邪引いてるつ
て言うからお見舞いに来たのよ。あ、コレお見舞いの果物ね。」

そう言いながら途中で買ったお見舞い（500円）を渡しながら理
由を述べる健宏。

「貴様も暇な奴だな。」

「否定はしねーよ・・・」

「そついえば貴様との勝負がまだついていなかったな、風邪が治つたらぜひとも・・・と言いたいところだが今度の大停電が終わるまで勝負はお預けだな。」

「大停電？何だそりゃ？」

「明日の20時から24時の間、学園都市がメンテナンスのために行うことです。その間、マスターにかけられた登校地獄の呪いが解け、マスターの魔力が復活するのです。」

「登校地獄？なんだそりゃ？」

健宏の疑問に対し、登校地獄の内容と解除方法を答えるエヴァ。

「またなんちゅーアバウトな・・・だからネギの血を吸おうとしてたんか。」

「そうだ。狩野、今度は邪魔するなよ。もし邪魔を「んじゃがんばってね、俺は高みの見物と行くから」って邪魔しないのか？」

健宏の思いもよらない返答に目を丸くするエヴァ。

「まあ理由が理由だしね、別に殺すわけじゃないんだろ？だったらとことんやりやあい。」

「意外だな。貴様はぼーやだの味方だと思っていたのだが。」

「俺はこのちゃん、そしてせっちゃんの味方さ。それになにより、」

「なにより？」

「なんか面白そうじゃん？」

健宏の返答にまたも目を丸くするエヴァだった。

「ククク・・・ハァーハッハッハ！！面白いやつだな、貴様は！貴

様とは気が合いそうだ。」

「奇遇だねえ、実は俺もだよエヴァちゃん。」

額を寄せ合って邪笑をする二人。どちらも悪役っぽい。

「では貴様は私の邪魔をしないということでもいいのかな?」

「ああ、もちろんだとも。」

「フツ、貴様はなかなか見所があるな。また今度ここに来るがいい、歓迎しようじゃないか。」

「そりゃありがたいねえ、ぜひとも来させてもらっよ。」

そんな会話をしながらふと時計を見ると時刻は午後6時。そろそろ警備の時間らしい。

「おつと、もうこんな時間か。じゃあ俺行くわ。」

「ああ、今日はすまなかったな。」

「それは言わねえ約束だろ、お父つつあん・・・なんてな、そんなじゃーね、お大事に。」

そんな会話をしながら帰って行った健宏。

狩野健宏、新しい友達ができた一日だった。

おまけ

「狩野さん、一体あの真祖の家で何をしていたんですの!？」

エヴァの家から出てきたのを見られ、高音とメイに問い詰められる
健宏だった。

第8話 ロリッ子吸血鬼とお見舞い騒動（後書き）

「どーも、毎度おなじみ司会進行役の狩野健宏です！今回は俺の新しい友達がゲストです。どうぞ！」

「ハァーハッハッハッハ、今回のゲストはこの私、最強最悪の魔法使い

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだ！

愚民どもよ、私の前にひれ伏すがいい！」

「おい、エヴァちゃん？この小説って読者がいるから成り立ってるってこと忘れないようにねー？」

「ム、それもそうだな。」

「さて、今回のネタ話は・・・」

「健宏よ、私からも一ついいか？」

「ん？何？」

「第5話といい、今回の第8話といい、私がメインの時のサブタイトルの『ロリッ子吸血鬼』とは誰のことだ？」

「そりやもちろんエヴァちゃんに決まってグハッ！？」

「誰がロリッ子吸血鬼だ！？他に言いようがあるだろうが！？」

「俺にツツコムなよ！？・・・大体このサブタイにも元ネタがあるんだぜ？」

「・・・いやな予感しかしないが言ってみろ。」

「ちび〇こ吸〇鬼だけどってグハッ！？・・・またかよ（涙）」

「やはりそれかー！」

まさか私のことをリユ〇イガーやア〇ナと同列に思ってるんじゃないだろうな作者は！？」

「読んだことあるんだなちび〇こ吸〇鬼シリーズ・・・」

「人間が書いたとはいえ我が同族の話だからな、それなりに興味はあったんだよ。」

「さいですか・・・ま、まあそれはともかく次回予告いつてみよう！」

ついにやって来た学園都市の大停電！

ネギは見事エヴァの計画を阻止することができるか！？

チャンネルはそのまま！！

「何かのCMじゃあるまいし、もう少しひねりようは無かったのか？」

「いやー何かだんだんネタ切れに・・・」

「ネタ話のネタはいくらでもあるのか？」

「それを言うなよ・・・何はともあれ、奇想天外愉快痛快な物語、次回もお楽しみに！」

「貴様ら！ちび○こ吸○鬼シリーズはなかなかいい作品だ、一度読んでみるがいい！では次回も必ず見るのだぞ！」

「最後なんか宣伝入ってねえ！？俺達会社の回し者じゃないんだからほどほどにしてくれー！？」

第9話 ネギVSエヴァ！ 健宏の魔法観戦！（前書き）

時は20時前、大停電が始まる直前。
ネギVSエヴァ、今ここに始まる！
今回はバトル一色！
それではどうぞ！

第9話 ネギVSエヴァ！ 健宏の魔法観戦！

「あともう少しだな・・・」

現在時刻は19時50分。ネギとエヴァの試合開始まであと10分である。

ここは体育館。魔法を使いネギとエヴァの試合を観るために場所をここにしたので。

「ネギ君とアスナ君はエヴァに対してどういう作戦を立てているのかな？」

「何にせよ暇つぶしにはもってこいだね。いい話のネタになるよ。」

「不謹慎だぞ。」

「一般人には話さないようにのう？」

上から順にタカミチ、真名、刹那、学園長の順である。今からネギVSエヴァの魔法対決が始まるのだ。タカミチと学園長はネギの現在の实力を見定めるために、刹那は木乃香の護衛において役に立つかを見定めるためだ。真名は完全に映画鑑賞のようなつもりらしくポップコーンとコーラを持っている。健宏もポップコーンとオレンジジュースを持っているのは気にしないでおこう。

しかし中には、

「何故みなさんここでのんきに試合観戦などしてるのですか！？一刻も早くあのエヴァンジェリンを止めるべきですわよ！？」

このようにネギとエヴァの戦いを止めるようにいう者もいる。

「落ち着きなよ、高音ちゃん。別に殺しあいをするわけじゃないか

「大丈夫だつて。」

「相手はあのエヴァンジェリンですわよ、約束など守るわけ無いですわ！というかメイ！何故あなたまで観戦しようとしているのですか！？」

頑固として譲らない高音だったが妹分のメイが、観戦の体制をとっていることに愕然とする。

「だ、だってお兄様が戦いの参考になるからちゃんと見ておくようにって……」

どうやら健宏を慕っているらしく（木乃香と刹那に対抗しているということもあるのだろうか）

彼をお兄様と呼ぶメイ。ちゃっかりベストポジションである膝の上をキープしている。

「だからって素直に見ること無いでしょう！？（というか何故あの子は膝の上を陣取っているのですか！？私だって近くにいたいのに！）」

真面目だからだと思っていたのだが、単純に近くに座れなかったからちよっぴり拗ねてるだけらしい。

乙女ゴコロは複雑なのだ。

「高音ちゃんもこっち来て観ようぜ？」

そついう自分の右隣を叩く健宏。ちなみに刹那は左隣、真名は後ろだ。（真名が後ろなのは自慢の巨乳をアピールに使うかららしい。）

「し、仕方ありませんわね。メイも観戦するようですし、私も今後

のために観戦することとしますわ!」

その代わり、エヴァンジェリンが妙な真似をした場合は即刻止めますからね!

そう言い残し健宏の右に座る高音。なんだかんだいって乙女ゴコロには勝てなかったらしい。

「どうやら始まるようじゃのう。」

「来ましたよ、エヴァンジェリンさん!! まき絵さんを放してください!!」

始まりと同時に大浴場に現れたネギの前に、メイド服に身を包んだ茶々丸やまき絵たち、幻術を用いて大人の姿になったエヴァが立ちふさがった。
アタルトボディ

「パートナーはどうした? 一人で来るとは・・・見上げた勇氣だね? いや、無謀か・・・」

「あ、あなたは・・・!?!」

妖艶に、しかしどこか恐ろしさがある笑みを浮かべるエヴァにネギは・・・

「ど、どなたですか!?!」

エヴァと気付かず、当然の質問をする。考えてみたら当然の事だろう。今の彼女は大人の姿だ。

勘のいい者は状況と姿で察する事も出来るが、10才のネギにはそ

ういうことはまだまだ早い。

驚かせるはずが、逆にスベってしまったのでエヴァは変身を解く。

「ブハハハハ！初っ端っから笑わせてくれるぜ、ネギのやつ！！」

体育館の皆にはバカ受けだった（汗）

「私だ、私ー！！！」

「あー！」

幻術を解きようやく分かったネギに、改めて話を進めるエヴァ。その顔が引きつっているのはいうまでもない。

「卑怯ですよ、エヴァンジェリンさん！まき絵さん達を人質に取るなんて！」

「こいつらは人質ではない。こいつらは私の忠実な下僕だ。いうなれば私の手足のようなものだ。」

さてばーや、今宵こそお前の身を吸わせてもらう。そして私は自由の身になるのだ！」

「分かりました、あなたが勝ったら僕の血をいくらでも吸ってください。その代わり僕が勝ったらちゃんと授業に出て下さいね！」

「フン、いいだろう。その代わり、こちらが勝った場合は容赦せんとぞ！」

売り言葉に買い言葉。エヴァの言葉にとんでもない約束をするネギ。

「いけません！早く止めるべきです！きゃあ!？」

「おいおい、ちよいと待ちなよ高音ちゃん。」

立ち上がった高音だったが、健宏に抱きしめられ動きを止めてしま
う。

「勝負はまだ始まって無いんだ、もうちよい観戦しようぜ？」

「し、仕方ありませんわね。もう少しですわよ／＼」

自分では威厳を保った高音だったが、傍から見ると顔を真っ赤にし
てデレてるようにしか見えなかった。

「いいだろう、それでは試合開始だ!」

合図と同時に襲いかかるまき絵たち。それを眠りの霧で眠らせ脱出
するネギ。

「ダメージを与えられないと見るや、眠りの霧で無力化したか。な
かなかの判断だね。」

「いい判断じゃ、ワシも同じことをするのう。」

タカミチと学園長は感心したように話す。

「まあ最初にためらったからこそ、あのようなめにあったんだけど

ね。そこに関しては失点ものだな。」

「やはりまだ子供だからか少々判断が甘いな。」

それと対称に真名と刹那は酷評だ。

「さて、これからどうするか見物だな。」

「なかなかやるな、ぼーや！行くぞ！！リック・ラク・ラ・ラック・ライラック！！」

魔法の射矢 連弾 氷の17矢！！」

ネギにエヴァの17本の魔法の射手が襲いかかる。ネギは直撃は避けたが、押し出されるようにガラスを突き破り落下する。

「クッ！！」

杖に跨って飛ぶが、エヴァの魔法は追尾型なのか追いかけてくる。彼も負けじと用意していた魔法銃で退ける。対するエヴァも飛びながら追いかけてつ、放った魔法を防いだ事に感心する。

「ほう・・・魔法銃とは珍しい。」

「全弾撃破を確認。ネギ先生はマジックアイテムのコレクターだそうですね。」

主の側で同じく飛んでいる茶々丸（魔法ではなくジェットだが）が主の疑問に調べた情報を伝える

「あの魔法銃なかなかいい物だな。私には使えない代物だがね。」

ネギの魔法銃を見て感心した真名が、感想を述べる。

「使えないって何でなんですか？」

メイが当然の疑問を聞く。

「私はあくまで銃を扱う傭兵であって、魔法使いではないからね。あのように魔力を用いる銃とは相性が悪いのさ。」

それに対し丁寧に説明をする真名だった。

「魔法銃にもいろいろあるからね。覚えておくといいよ。」

「はい、わかりました。」

タカミチの発言に素直に従うメイだった。

その頃ネギは・・・

「ほらほら、逃げるだけか？もっとも呪文を唱える余裕もないだろうだな！！」

リク・ラク ラ・ラック ライラック！！ 来たれ氷精 大気に満

ちよ 白夜の国の 凍土と氷河を

こおる大地！！」

「うわっ！！」

エヴァの攻撃魔法で、ついにネギは体勢を崩し橋の上で倒れこむ。
何度の攻撃の余波で装備もほとんど外されてしまった。彼女達も橋へ降り立ち、ゆっくりと彼へ近づく。

「なるほど・・・確かにこの場所は学園都市の端・・・私は呪いの為、外に出る事は出来ん。

ばーやなりに良く調べた・・・と言いたい所だがせこい作戦だな、ネギ先生？」

「う・・・」

「これで決着だ・・・思ったより、呆気なかったな」

「（もう少し・・・後、一步）」

ジワジワ近づいてくるエヴァ達をネギはじっと見ていた。ついに彼女らは仕掛けた『罠』を踏む。

キイイイイン！！

「なっ・・・！？これは・・・」

「・・・！！」

魔方陣が浮かび上がり、光の束がエヴァと茶々丸を拘束する。

「捕縛結界！？」

「や・・・やったー！！引っ掛かりましたね、エヴァンジェリンさん、茶々丸さん！！」

「へえー、橋に行ったのは結界の端に行くためじゃない、捕縛結界まで誘導するのが目的か！」

「なかなかやるじゃねーの。」

これには本当に素直に感心したらしいタカミチと健宏だった。

「これで僕の勝ちです！！大人しく観念して、もう悪い事もやめてくださいね！」

「・・・やるな、坊や。感心したよ。本来ならば、ここで私の負けだろう。だがな、茶々丸！」

「はい、マスター。結界解除プログラム始動。」

茶々丸の耳のセンサー部分が動き形を変える。その途端、拘束していた光の束にヒビがはいり・・・

「15年越しのチャンスに、私がこの手の罠に何の対処をしていないとも思うか？」

パキィィィン

「この通りだ」

あっさり拘束は解けてしまう。

「そんな！！うそっ・・・ずるい！！！」

魔法使い同士の戦いの前提で作戦を練っていた為、こういうことになるとは想像も出来なかった。

「ずるいわきやあるかよ、あれも戦術の一種だっつーの・・・」

ネギのセリフに呆れたようにつぶやく健宏。

「むしろ破られるわけが無いとタ力をくくって、何も対策をしてないのは大問題だね。」

健宏のセリフに同調する真名。

「うう・・・ラス・テル・・・あう!」

咄嗟に拘束呪文を唱えようとするが、茶々丸に杖を奪われてしまう。従者から受け取った杖を片手にエヴァは一瞬『サウザンドマスター』を思い浮かべるが、投げ捨ててしまう。

「ああー!!」

すぐに手すりまで駆け寄るが当然見つかるはずがない。その隙に、エヴァがネギをこちらに向かせて押さえ込む。

「ひどいですよ!あれは父さんの杖なのに!」

「戦場にひどいモクソもあるか!さあ約束通り、血を吸わせてもらおうか・・・」

エヴァはネギの前に顔を近寄せて、勝利宣言する。しかし、ネギと同様にこれで勝負が決まったわけではなかった。

「こらー!!待ちなさい!!」

「ん?」

突然の大声にエヴァも顔を上げると、声の主はようやく到着した明日菜だった。

「フン・・・来たか。坊やのパートナー、神楽坂明日菜か。ずいぶん遅い到着だな。茶々丸！」

「はい、マスター。」

「ア、アスナさん!？」

エヴァは茶々丸に迎え撃たせる。ネギも彼女に気付き、驚きの声を出す。

「行くわよ、カモ!!」

「合点、姐さん!!俺っちの力を見せてやるぜ」

明日菜と茶々丸が接触する瞬間・・・

「オコジョ・フラッシュユ!!」

実際には、マグネシウムにライター火を付けて生み出した目晦ましだったが。それでも効果はあり、明日菜は茶々丸を素通りする事に成功する。彼女達の目的はエヴァであり、ネギの救出する事だ。

「これでも喰らえー!!」

エヴァに向かって渾身の飛び蹴りを放つアスナ。

「バカか貴様は？真祖の私に向かってこのような攻撃をするとは。こんな物魔法障壁であぶるぽあ!？」

あたるはずがないとタ力をくくっていたエヴァだったが何故かアスナは魔法障壁を突破してしまう。

「な、何故だ！？何故、真祖のこの私の魔法障壁が破られる！？」

「なにぃ！？どーなつてんだ！？アスナちゃん魔法障壁蹴り破つちまつた！」

「そんなバカな！？」

こちらら魔法障壁を破れるはず無いとタ力をくくつていたのだが、アスナが突破したので驚きを隠せない魔法生徒一同。

「学園長！」

「うむ、これは・・・」

その時、タカミチと学園長が不穏な動きを見せたのには誰も気がつかなかった。

「勝負はこれからよ、エヴァちゃん！」

「やってみるんだな！」

「契約執行 90秒間！ ネギの従者 『神楽坂明日菜』！！」

以前のスカカードではなく、正式な手順によって作られた仮契約カードに魔力を注ぐ。

茶々丸も襲い掛かり、アスナとのデコピンの応酬を始める。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！！」

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル！！」

ネギとエヴァもお互いに起動キーを唱え準備に入る。一瞬明日菜を心配するが、彼女のみならず茶々丸も傷付けないと信じる。ネギは杖を無くしたままなので、予備に子供の頃に使っていた杖を取り出す。

「喰らえ！！ 魔法の射手 連弾 氷の17矢！！」

「うつつ・・・魔法の射手 連弾 雷の17矢！！」

お互いの魔法が相手を打ち滅ぼさんと襲いかかる。しかしやはり600年生きてきた真祖の吸血鬼と10歳の子供では、魔力も詠唱の長さも違うため、ネギは段々と劣勢になっていく。

「ま、わかってたことだけだな。こうなるとネギがどこまで引つ張れるか見ものだぜ。」

「ふはあ、私には絶対真似できません・・・」

メイが心なしに落ち込んだ声を出す。

「人には人のペースがあつからねえ、そこんとは気にしちゃダメだよ？」

というかあの二人のペースが異常なだけだし。そう付け加える健宏。

「どうした、坊や！！雷も使えるとは感心するが、詠唱に時間がか

かり過ぎるぞ！

リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！！闇の精霊　29柱！！」

「（あうえっ、に、29人！？）ラ、ラス・テル　マ・スキル　マ
ギステル！光の精霊　29柱！！」

ネギはエヴァの攻撃に合わせて、同じ数の魔法攻撃をするので精一杯。

「魔法の射手　連弾　闇の29矢！！」

「魔法の射手　連弾　光の29矢！！」

それでも相反する属性の魔法がぶつかり合い、互いに消滅し難を逃れる。

「うく・・・」

「ネギ！」

「マスター！」

明日菜も茶々丸も、もう戦わず2人の魔法の戦いを見守っている。
ネギも改めてエヴァの強さを思い知っていた。逆にエヴァは余裕所
か、楽しんでいた。

久しぶりの魔法のぶつかり合い、ネギの予想以上の強さに。

「（さすがあのナギ^{バカ}の息子だな。全く、楽しませてくれる！）アハ
ハ！いいぞ、よくついて来たな！」

だからこそ、次は先手を譲ることにした。その思惑に気付かないネ
ギはチャンスとばかり、先に詠唱に入る。このままでは負けが確定

してしまう。だからこそ、大呪文で勝負に出る。

「ラス・テル マ・スキル マギステル！来れ雷精 風の精！！」

「リク・ラク ラ・ラック ライラック！来たれ氷精 闇の精！！」
「えっ？」

だが、エヴァの詠唱を聞いて驚きを隠せない。この呪文は今のネギが使える中で最強の魔法だ。

さすがにエヴァを『殺せる』ほどではないが、かなりのダメージを与えられるはずだった。

これも属性とは違うが同じ魔法もエヴァも使ってくるのだ。驚くなと言っ方が無理だ。

しかし、ここまできたら後には引けない。全力でぶつかるしか選択はない。

「今までとは違ってとんでもねえ魔力だ。この一撃で勝負が決まる！」

「見せてもらっよ、ネギ君！成長したキミの力を！」

健宏はこの一撃が決め手になり事を察知し、またタカミチもこの一手でネギの実力を見図ろうとする。

「雷を纏いて 吹きすさべ 南洋の嵐」

「闇を従え 吹雪け 常夜の氷雪」

2人の手にそれぞれの精霊が集まり、凄まじい力が今かと開放を待

っ。

「来るがいい、ぼーやー!!」

「(来る!!)」

エヴァの宣言に、ネギも両手を突き出し力ある言葉を放つ。

「雷の暴風!!!」

「闇の吹雪!!!」

ドオンッ!!

光と闇、共に相反する魔法がぶつかり合う。

「くう・・・」

「うつ・・・つつ・・・(ダメだ、打ち負ける・・・)」

それは分かっていた結果だった。エヴァも全力に近いが全てを振り絞っていない。

(しかも全盛期には程遠い。) 対してネギは、振り絞り切っても押さえ込まれそうになっている。

「(でも・・・僕は負ける訳にはいかないんだ!!)」

その自分自身への発破がある意味、奇跡を起こした。限界以上に力を込めようとした瞬間・・・

「へっぷし!!」

何故か気が抜けるようなクシャミをするネギ。

そして起こるのは、明日菜が度々巻き込まれた武装解除の暴走だっ

た。

「な、何っ!？」

暴走が故に一瞬にしてエヴァの魔法を押し返す。さらに押し返すには時間がない為、直撃を受けてしまう。

「ネギっ!」

「マスター!!」

明日菜は遠くからだからはっきりとは見えなかったが、茶々丸はエヴァが直撃した事は把握している。

煙が晴れ、彼女が姿を現す。さすが真祖、ダメージはなかったようだ。

しかし、

「やりおったな、小僧・・・(激怒)」

「ぬ、脱げっ!？ご、ごめんなさい!!」

さすがネギの暴走。本来の攻撃魔法に暴走解除の属性をつけるとは。エヴァ自身は無事でも素っ裸。

口元は怒りで引き攣っている。

「って何で雷の暴風で武装解除が付け加えられてんだよ!?見たらアカンやろ俺っておわあっ!？」

「『見てはいけません!!』(見るな!!/見ちゃダメですー!!)」「『!!』」

同じ女としてか、はたまたヤキモチか健宏の視界を全員で塞ぐ。

「う、ごめんなさいごめんなさい！！決してわざとでは・・・！！」

先程までの決意は何処に行ったのか、謝り続けるネギ。英国紳士として謝るのは当然のことだ。

「わざとなら今頃くびり殺しておるわ！！・・・どうやらお仕置きが必要のようだな、ぼーや？」

両手の十の爪を伸ばし襲いかかるうとするエヴァ。

その時、辺り一帯に次々と電灯が輝き始めた。

「予定より7分27秒も復帰が早い！！マスター！！」

そのとき、結界も復活する。

「きゃん！！」

魔力を絶たれ、宙を浮いていたエヴァンジェリンはまっ逆さまに湖へ落ちていった。

「どうしたの！！」

「停電の復旧でマスターの封印が復活したのです！！魔力がなくなればマスターはタダの子供です。」

このままでは湖へ落ちてしまいます！！あとマスターは泳げません」

茶々丸は急いで駆けつけようとする。

ネギも動こうとしたが、疲労がひどく倒れてしまった。

「ネギ！！」

明日菜があわてて駆け寄った。

なすすべもなく落ちていくエヴァ。全速力で飛ばうにも、このままでは衝撃が強すぎてエヴァが大ダメージを負ってしまうためにスピードを出せない茶々丸。

「やべえ！！ちいっ！！」

舌打ちをした健宏は一瞬にして皆の前から消え去る。

いきなり消えた健宏を探す皆だったが、ふとエヴァ達を見ると、

「危ねえ危ねえ、間一髪だったな？」

「スマンな、礼を言うぞ健宏。」

エヴァをお姫様抱っこしている健宏の姿が目映った。どうやら影を用いた転移魔法を使っただけらしい。

「あの人はあんな芸当もできるのか・・・」

・
健宏の行動力に唖然とするもあまりの早業に驚く一同。もっとも・

「まさか影を用いた転移魔法を使えるとは！・・・これは是非ともコツを聞かなければ！」

高音は自分がまだ会得していない影の転移魔法を健宏が使ったことにより、それを教わろうと考えていた。（単純に健宏に会うための口実でもあったが。）

「な、何故健宏さんがここに!？」

いきなり現れた健宏に驚きを隠せないネギ。

「皆でお前さん達の魔法バトルを観戦してたんだよ。まさかこうなるとは思わなかったけどな・・・」

「・・・私の負けだなばーや。」

静寂を打ち破ったのはエヴァの敗北宣言だった。

「え、いいんですか？」

「大停電が終わり、学園の結界が復活したんだ。その間に勝負を決められなかった私の負けだ。」

「やったー、僕の勝ちだ!エヴァンジェリンさん、約束通り授業には出席して下さいね!」

エヴァが敗北を認めたことによりネギは自分が勝ったことを改めて認識し、喜んでいる。

だが、

「やったー、出席簿のエヴァンジェリンさんの所に『僕が勝った』って書いておこつと!」

「なあーっ!?やめんか貴様!結界が復活しなかったら私の勝ちだったんだ、調子に乗るな!」

ネギの発言に怒るエヴァ。本当に10才の子供のようだ。

「たく何やってんだか・・・」

呆れたように呟いていたが、その表情はとても優しいものだった。

これからどうなるかねえ・・・

面倒くさそうに、しかしそれでどこか楽しさを含んで呟く健宏だった。

第9話 ネギVSエヴァ！ 健宏の魔法観戦！（後書き）

「どーも、毎度おなじみ司会進行役の狩野健宏です！今回は前回とひきつづきゲストはわが友エヴァちゃん！」

「今回も私がゲストだ、貴様ら泣いて喜べ！」

「だから読者を敵に回すような発言するなよ・・・とにかく今回はお疲れ様。」

「ああ、まさかぼーやがあそこまでやるとはな。少々悔っていたよ。」

「まあ負けるのは仕方ないさ、原作がそうなんだし。」

「ぶっちゃけすぎだろそれは！？」

「それはともかく今回の魔法観戦モノってのはなかなかいいアイデアだろ？」

作者もこれならなかなか無いだろうって思うほどらしいぜ？」

「確かにな。作者が知っている限り、魔法観戦モノはひとつもなかったらしいからな。」

「ホント良く考え付いたもんだぜ。そんなことより次回予告行ってみよー！」

日曜日に呼び出された健宏。

そこにはネギとデートをする木乃香の姿があった！

さあどうする健宏！？

「何ともいえん次回予告やなー。」

「おや、貴様はもう少し過剰反応するかと思ったんだがな？」

「俺もちよいと意外だわ。そんなことより次回もよろしく！」

「そのの貴様ら！読んだ後はなるべくでいい、感想を書いてくれ。作者の励みにもなるからな！ではさらばだー！！」

「なんだかんだいってイイ子だよなー、エヴァちゃんって・・・」

第10話 ミッション！ 木乃香のデートを監視せよ！（前書き）

大停電から数日後、健宏は渋谷にいた。

渋谷にいる理由、それはある一つの出来事から始まった。

今回はあの子が大接近！？

奇想天外、愉快痛快な物語！

それではどうぞ！

第10話 ミッション！ 木乃香のデートを監視せよ！

「ネギ君、これなんかどうやる？」

「いいと思いますよ、このかさん。」

4月20日（日）、監視対象^{ネギ}NとKは渋谷での買い物を楽しんでいた。

「何かいい雰囲気だよあの二人！？」

「こ、これって・・・、やっぱり、デートなんじゃ・・・」

「あわわわ！！ たたた、大変かもー！！」

「（いや、あの表情から察するに普通に買物らしいな・・・）」

3人に対し、木乃香の表情を読み取り冷静な判断を下している健宏だった。

時は30分前に遡る・・・

「結構イケるじゃんこのゴーヤクレープ！」

「ホントおいしーねコレ♪」

「修学旅行のための買い物・・・」

上から順に柿崎^{かきさき}美砂、椎名^{しいな}桜子、釘宮^{くぎみや}円のチアリーディング三人組である。

今日は来るべき修学旅行のための買い物に来ていたのだが、何故か街で遊び倒す羽目になっている。

「あれってネギ君とこのかじゃない？」

事が起こったのは、この麻帆良大明神こと桜子の発言からである。

「あれってデートなんじゃ!？」

「ええー!？ままま、まずいよ!ネギ君は10才だけど教師なんだよ!？生徒に手を出すなんて!？」

「いやこの場合はネギ君からじゃなくこのかからって考えるのが妥当じゃない？」

「そっか。このかはネギ君と同じ部屋だし、ネギ君かわいいもんね!？」

などと根も葉も無い適当なことを言い合う3人。

「そ、そんなことより当局に電話しないと!」

「当局って!？職員室!？」

「バカ!！そんなことしたらネギ君クビになっちゃうでしょうが!？アスナよ、アスナ!」

「じゃ、じゃあこのかはあの人だね!？」

・ なんのかんの言いながら、美砂はアスナに電話をかける。桜子は・

邪魔者には 毒林檎♪

まほ高寮男子棟の一室に、スマートフォンの着信音として曲が鳴り響く。

(曲名は魔○戦記ディ○ガイア2の罪な薔薇だ。)

「はいはい、どちらさんでしょうーか？」

電話に出たのは我らが主人公、狩野健宏である。ラフな格好を見る限り、今からどこかに出かけようとしていたらしい。

「たたた、大変だよー!!このかがネギ君とデートしてるー!!」

「はい?あの、どちらさまでせうか?」

さすがに開口早々、要件を言ってくるとは思わなかったらしい。目が点になっている。

「あ、ごめんなさい。私です、このかのクラスメートの椎名桜子です!」

「椎名桜子?・・・ああ、チアリーディング三人娘の一人の!」

一応朝倉の取材(第4話参照)の時に顔合わせしたため覚えていたらしい。そういえばその際に何人かと電話番号を交換した気がする。

「にやははーそうですよ、おはよーございます・・・ってノンキに挨拶してる場合じゃ無くてこのかがー!」

「何っ!?このちゃんがどうかしたんか!」

最初はにこやかに話していたがこのかに何かあったのかと思いを荒らげる。

「実はこのかが・・・ネギ君とデートしてるんですよー!!」

「・・・ハイ?」

桜子の発言に一瞬空気が凍る。そりゃいきなりそんなこと言われたって呆れるだけだろう。

「それはねーんじゃねーの?」

「何冷静なこと言ってるんですか、！と、とにかく渋谷の渋谷109にいるから！早く来て下さいね！？」

「あ、ちょ、桜子ちゃ・・・切れちゃった・・・」

てか伏字になってないし・・・

そんなことを思いながらひとまず渋谷に向かう。電車代がもつたいないので、一般人に気づかれないうちに転移魔法を使ったのは秘密だ。

電話をかけてから数分後、健宏は3人のそばにいた。

「よ、桜子ちゃん。」

「健宏さん！？何でこんなに早いのか！？」

当然驚く桜子。

「たまたま近くにいたからね、そのまま来たんだよ。」

「あ、そりゃそっか。」

一番無難な嘘を話す健宏。恥ずかしそうに笑う桜子には、罪悪感が無いわけではない。

ここから冒頭に移るのであった。

「ね、このかとネギ君デートしてるでしょ！？」

興奮したように桜子は言う。

「いや、このちゃんのあの表情から察するにありや普通に買物を楽

しんでるだけだぜ？」

間違いない、そう断言する健宏だったが3人は納得いかないらしい。

「絶対デートだって！ってあー！このかがネギ君とパールツクの服を！？」

パールツクの服を見ているネギ達を見て、何をトチ狂ったのか変装をして二人が目にしたものを買い占めていく柿崎と釘宮（男役）だった。

「つ、疲れた・・・」

「ああ、お金がどんどん減っていく・・・（涙）」

「何考えてんだか・・・」

無駄に疲れている二人を見て呆れる健宏。

「だっていいんちょが二人（正確にはこのかからネギ）を止めろってメールで・・・」

「何考えてんだろーね、あのシヨタコンお嬢様は・・・女の子がこんな顔すんのはマズイだろ・・・」

柿崎があやかから送られてきたメールを見た健宏は、あやかの鬼のような形相に顔をひきつらせる。

「あれ、そういえば桜子は？」

「ああ、何かさつき化粧室に・・・ちよつと、離してよ！！」何だ何だ！？」

桜子がないのを疑問に思った釘宮が尋ねると化粧室に行ったこと

を教える健宏。その時桜子の声が響き渡る。

「なあ、別にいいじゃん。俺たちと一緒に遊ぼうぜ？」

「だから離してってば！！」

ふとあたりを見回すと何と3人組の男が桜子を路地裏に引きづり込もうとしているではないか

「おい、お前ら何やってんだ！」

「何って見てわかんねーのか？この子と遊ぶだけだっつーの！」

下心丸出しの顔をしながら言うナンパ男A。

「「桜子！！」」

柿崎と釘宮の悲鳴が響き渡る。

「お前ら・・・いい加減にした方がいいぜ？」

「ハア？いい加減にすんのはテメエの方だよ！！」

そういうと、健宏に襲いかかるナンパ男たち。

「ったく、しゃあねえな・・・」

健宏は面倒くさそうに呟くと、襲いかかって来た男たちを避け桜子を取り戻す。

「「「な、いつの間に！？」」」

「大丈夫、怪我ない？」

「う、うん・・・」

「「ふざけやがって！！これでも喰らいやがれ！！」」
「！！健宏さん、危ない！！」」

何とナンパ男たちは3人ともナイフを取り出して襲ってきたのだ。

「「死ねー！！！！」」

「健宏さん、逃げてええええー！！」

死の恐怖にとらわれ、絶叫する桜子。しかし、健宏は・・・

「まったくホントメンドーだな・・・」

そついうと襲ってきた3人をいなし、ナイフを取り上げる。この間、時間にして30秒の出来事である。

「まだやるか？」

「「ち、チキショウ！！！！覚えてろ！！！！」」

捨て台詞を残し、逃げ出すナンパ男たち。だが健宏は、あいつらが襲いかかって来た時点で警察に通報したので、捕まるのは時間の問題だろう。

「「大丈夫だった、桜子！？」」

「大丈夫だよー、健宏さんが助けてくれたからね！」

追いついた柿崎と釘宮が無事を尋ねられ、無事なことを答える桜子。

「ふう、良かった。あれって、ネギ君とこのかだ。」

桜子の無事にホッとした柿崎だったが同時にネギとこのかを見つけ

た。

どうやら疲れて眠ってしまったネギをこのかが膝枕しているらしい。すると・・・

「あー！！このかがネギ君にキスしようとしてる！！」

「ぬぁにー！？アタタ・・・」

釘宮がはいたトンでも無い発言に振り向く健宏。あまりの勢いに首を痛めたのはご愛嬌だ。

とにかく、木乃香を見ていると確かにネギにキスをしそうだ。

「「止めちゃダメだからね、健宏さん！！」」

「いや、止めるも何もこのちゃんが望んでるなら・・・いやいや、やっぱ止めるべきか！？」

何かいい具合に壊れているが無視しよう（爆）

そのとき、

「ちよつと待ったー！」

「お待ちなさいー！」

いいんちよとアスナが走って来た。

「ネネネ、ネギ先生を膝枕なんて、私がしたいですわー！！狩野さん！！なぜ止めなかつたんですのー！？」

「お、俺のせいだよ！？」

健宏はいいんちよに胸倉をつかまれ、勢いよくシェイクされる。そんな彼の姿に年上の威厳はない。

そんな大騒ぎを続けていると居眠りしていたネギが起きた。

「あれ？ み、皆さん……、アスナさんまで！？」

「ネギ君、どうやらばれていたみたいや。」

「ええー。どうしよう。せつかく驚かそうと思っていたのに・・」

「しゃーない、一日早いけど言っておお。」

木乃香がそう言つと、ネギは紙袋の中から何かを取り出し、明日菜に向かって差し出す。

「ハイ、アスナさん。4月21日の誕生日おめでとうございます」
「「「へ?」「」」

呆けるいいんちよ他三名。

「中身はアスナの好きな曲のオルゴール。明日渡すつもりやったんやけど・・。」

アスナが嬉し涙をほろりと流した。

「あ、ありがとう……、ネギ、このか。わ、私、嬉しいよ!」

「よ、よーし!! このままみんなでアスナの誕生会だー!!」
「ラオケへ行こうー!!」

柿崎が誤魔化すように言った。

いいんちよは三人に対して文句を言っていたようだが、誕生会については賛成のようだった。

健宏はそんな彼女たちの様子を苦笑交じりに見ていた。

「そんじゃ俺はそのカラオケをおごりますかねえ?」

ラッキー！、健宏さん、太っ腹！などの声が前方の方から聞こえる。

「ホント元気な子たちやなあ。」

俺も歳かねー、など少々じじくさいことを考える。

そのとき、

「今日は本当にありがとね、健宏さん。」

呼ばれて振り返ると桜子が微笑みながらお礼を言ってきた。
しかも礼をしたいから受け取ってくれという。

「別にいいって。俺は当然のことをしただけだし。」

「ダメ。私がしたいの！ほら、目えつぶってかがんで！」

あまりにもしつこく言うてくるので健宏も根負けし、言われたとおりにする。

すると、いきなり自分の唇に熱が集まっている。

まさかコレは！？

「そうだよ、ちなみに私、初めてだから？」

今度遊ぼうねー、木乃香達について行った桜子を見ながら未だ混乱している頭で考える。

エ、ワタクシハ今ナニヲサレタノデシヨウ？

答え・キス

それが改めて分かった瞬間・・・

あれ、マジですか！？俺初めて何スけど！？
慌てふためく健宏。そこに、

「どしたん、タケちゃん？」

いきなり後ろから声をかけられたからか、はたまた声をかけたのが
木乃香だったからか。

何故が必要以上にビビる健宏。

「ど、どしたんや、このちゃん？」

「タケちゃん何か遅いから様子見に来たんや。何かあったん？」

キミのクラスメートに〇〇されました、とは口が裂けても言えない
健宏だった。

言ったらたぶん確実に殺られる・・・そう思った健宏だった。

その後は約束通りカラオケに行ったご一行だったが、終始健宏は拳
動不審だったという。

第10話 ミッション！ 木乃香のデートを監視せよ！（後書き）

「どうも初めまして、この小説の作者のRデッドです。このたびは『麻帆良に降り立つボディガード』がめでたく10話を迎えたことに對し、このたびこの後書きにださせてもらいました。

たった数日のこととはいえ、このペースで小説を続けさせて頂いたことは皆様のおかげです。ちなみに私はこの小説の主人公狩野健宏の代理ですのでどうかご了承ください。ちなみに今回のゲストはこの3人です。」

「柿崎美砂です！」

「釘宮円です！」

「にやははー！椎名桜子です！」

「「「3人合わせて！」」」

「「「まほらチアリーディング三人娘！！！」」」

「いやー、流石に作者が出る後書きだけあってゲストが豪華だねー！」

「いや、別にそうでもないよ？3人は出す予定だったし？」

「そーいえば皆勤賞の健宏さんはどうしたの？」

「あー、ちよつと桜子ちゃんと顔合わせづらいだろうから俺の権限でアイツと変わったんだよ。」

「「あーなるほど、よくわかったよ・・・」」

「もー、そんな恥ずかしがること無いのに？」

「ちなみに今回のネタ話だけど実際ナンパ男達との戦闘シーン、最初はおそこまで激しく書くつもりなかったんだよな。」

「「「そーなの！？」」」

「うん、最初の考えでは桜子ナンパされる↓健宏が追い払う↓桜子、健宏にときめくっていう展開だったんだよな。もちろんキスシーンは無しで。」

「何でキスシーン考えなかったのよー！？」

「ちょ、やめ、吐く！？このままじゃ吐いちゃうからー！？

揺さぶらないでー！！？」

「やめなよ桜子！？」

「ほら、最終的にはキスしたんだからいいじゃん！？」

「わかったよー・・・にはは、ゴメンねー。」

「ホントに悪いと思ってんのか！？まあ、こういう展開にしたのは最初のじゃ何か味気無かったからなんだよね。ま、許してよ。」

「もう、わかったよ。私はこれからも出番あるよね？」

「それは保障するよ？俺の好きなキャラだし。あと今はただレギュラーになる子もまだいるしね。そんなことより次回予告にいつてみよー！」

健宏は明日、修学旅行。行き先はもちろん京都！

だがしかし、新しくできた友達、エヴァは登校地獄のせいで学園から出れない！

それに対し激怒する健宏！

彼が取った行動とは！？

「・・・登校地獄って何だろ？」

「ハッ、しまった！？仕方がない、作者権限最終奥義、『都合主義』！！！」

「・・・あれ、私たち今何考えてたんだっけ？」

「ホッ、なんとか忘れたみたいだな・・・そんなことより『麻帆良に降り立つボディガード』、これからもよろしくおねがいします！」

「・・・よろしくおねがいしますー！！！！」

第11話 ロリツ子吸血鬼の人生最良の日（前書き）

明日は待ちに待った修学旅行、木乃香の護衛も頑張ります！
今回の主役はエヴァ、ついに解けるか登校地獄！？
それではどうぞ！

第11話 ロリツ子吸血鬼の人生最良の日

「というわけです。いいですか学園長？」

健宏は学園長にそう言い放った。
ことは今から1時間前に遡る。

学校が終わった健宏は、学園長に呼び出され学園長室に向かう途中、エヴァと茶々丸に会った。

「こんにちわ、健宏さん。」

「ん、健宏ではないか。何でここにいる？」

ここは女子中等部だぞ、ナンパにでも来たか？とからかうエヴァ。

「誰がんな目的でここに来るか！学園長に呼ばれてんだよ、多分修学旅行の件だろうさ。」

からかわれ否定した健宏は、ここにいる理由を話すが、エヴァの表情が一瞬曇ったことに疑問を抱く。

「何かあったんか？今、修学旅行の話したら顔色変わったけど。」

「マスターは修学旅行に行けないので寂しがつておられるのです。」

「茶々丸！まったく、お前は余計なことを・・・まあいい、私に登校地獄の呪いが掛かっていることは説明したな？私はそのおかげでこの麻帆良から出ることができないことも。だから私は、呪いをかけられてから十五年間のうち4回あった修学旅行に一度も参加したことが無いんだよ。」

今回は京都だからなお残念だな。エヴァは寂しそうに話す。

「そうか、そうだったな・・・あ、そうだ！そういえばその登校地獄なんだけどな、解けるかもしれないんだわ。学園長に呼ばれついでに解呪の許可貰うつもりなんだけど、よかったらエヴァも付いてくる？」

「登校地獄の解呪の許可ねえ・・・何ー！？き、貴様、今何といった！？登校地獄の解呪の目処が立っただと！？」

寂しそうなエヴァにつられ、ちよっぴりブルーになる健宏だったが、登校地獄の解呪の目処が立ったことを教えるとエヴァは目をむいて健宏を問い詰めた。

「ゲエエツ、ちよっ、締まってる！首締まってるって！」

「あ、ああすまん。年甲斐もなく興奮してしまってた・・・本当に解けるのか？」

あまりに興奮しすぎたため首を絞めてしまい謝るエヴァだが、ドッキリだと思っているのかもう一度尋ねてくる。

「あ、ああ。成功率は保障するぜ？で、どうする？ついてくる？」

「無論だ！何をしている、早く行くぞ！茶々丸、今夜はごちそうを用意しておけ！」

そついうと、エヴァはものすごいスピードで学園長室に駆け付けた。

「走ると転ぶぞー！！たくあんなに急がなくても逃げたりしないって。」

「すいません、マスターは今まで学園を出ることができなかったの

でうれしいのです。」

フォローをする茶々丸に、別にいいと伝えこの場を去る健宏。そして、自らも学園長室に向かうのだった。そして冒頭に移る。

「フオ！？登校地獄の解呪の許可が欲しいじゃと？」

修学旅行での木乃香の護衛の話を終え、健宏に切り出された話に驚く学園長。

「おいジジイ、さっさと許可を出さんか！出さねばどうなるか分かっているな？」

まごついている学園長に脅しをかけるエヴァ。

「（フム、この子が登校地獄の解呪をのう・・・）エヴァ、お前さんは十五年待った。ワシとしては解呪をしてもいいと思う。だがその前に一つ聞きたいことがあるんじゃないかと思う？」

「いいだろう、早くしろ！」

だがエヴァの脅しには慣れている近右衛門は別のことを考えていた。思い切ってそのことを聞いてみる。

「健宏君、キミはどうやって解呪をするつもりなのじゃ？」

「確かにそれはもつともな疑問だな。健宏、一体どうやって解呪するつもりだ？」

近右衛門が聞いた理由に対し、賛同するエヴァ。

「まあ簡単なことですよ。この魔法はサウザンド・マスターが掛けた、これは間違いないんだよね？」

「ああ、実際に受けた私が言うんだ、間違いない。」

健宏の質問に答えるエヴァ。今更何を聞くのかと思っているのが手に取るように分かる。

「早い話が登校地獄は西洋魔法の呪いってことだ。ということは何も西洋魔法で考えることはねえ。東洋魔法なら解けるんじゃないかと俺は考えたんだ。」

健宏の考えがイマイチ分からないエヴァ。構わず話を続ける。

「呪いに関しては東洋の方が西洋より古くから使われてきたからな、東洋魔術なら解けるんじゃないかと俺は思ったんだよ。都合のいいことに、俺は呪いをかけるより呪いの解呪や呪いの術式自体をいじくって違うモンに変えるのが得意なんでね。」

説明を聞き、解呪の可能性があることにエヴァは喜びを隠せない。

「なるほどのう、確かにそうかもしれん。長々と悪かったのう、始めてくれたまえ。」

学園長の了承の言葉を聞き、解呪のための術式を組む健宏だった。

話から30分後、全ての準備が整った。

「よし、これでOKつと。エヴァ、こっちに来てくれ。」

「なあ健宏。私は呪いを解いてもらう立場だから、あまり言いたくはないのだから一つだけ言わせてくれ。何故そのような格好をしてい

るんだ？」

エヴァが尋ねるのも無理はない。何故か健宏はどこから用意したのか狩衣を着て烏帽子を被った陰陽師の格好をしているのだから。

「こっぴつのは形から入るのが俺のやり方なんでね。そんじゃ、始めますか。」

そっぴつと健宏は解呪の呪文を唱え出す。

「臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前！我、狩野健宏が命ずる！この者に掛けられし呪よ、我が名の元に解き放て！解！」

健宏の力ある言葉に、部屋に描かれた陣が光輝く。数秒後、光が消えた。

「どうだ、エヴァ？」

呆然としているエヴァを見かね、健宏が尋ねる。

「・・・った・・・」

「え？」

「魔力が戻った・・・消えたんだ、呪いが消えたんだ！やった、やったぞー！！！」

登校地獄の呪いを掛けられて十五年、封印されていた魔力が戻って来たのを感じ解呪されたのを知ったエヴァは喜びに声を震わせたが、突如自身の頬を伝う物に疑問を抱く。

「・・・これは涙か？何故、私は泣いているのだ？」

エヴァの頬を伝う物、それは涙、それも喜びの涙だった。

「・・・ありがとう健宏。本当に、本当にありがとう・・・」

声を詰まらせ、それでも懸命に礼を言うエヴァだった。

「別にいいよ、礼なんて・・・本当によかったな、エヴァ。」
「う、うああ・・・うあああー!!」

健宏が言った言葉に涙腺が崩壊し、泣き崩れるエヴァ。そんなエヴァを健宏は優しく抱き止める。

「ほらほら、泣かない泣かない。」
「本当によかったのう、エヴァ。そして、今まで本当にすまなかったのう。」

エヴァの解呪を祝福し、また今まで苦しめたことを謝罪する学園長。
4月21日（月）、この日は間違いなくエヴァの人生最良の日となっただろう。

1時間後、エヴァは泣き疲れて眠っていた。

「ま、十五年ぶりに魔力が戻ったんだ、無理もないか。」

エヴァを背に背負い、エヴァンジェリンハウスへ向かいながら、健宏は呟く。

10分後、エヴァンジェリンハウスに着いた健宏はその扉を叩く。

「お帰りなさいませ、マスター・・・健宏さん、マスターはどんなされたのですか？」

「大丈夫だよ、泣き疲れて寝てるだけだから。」

出迎えた茶々丸だったが、背負われてるエヴァを見て尋ねる。
健宏が説明をすると、エヴァを受け取り2階に寝かせる。

「才前ガ健宏力？礼ヲ言ウゼ。」

いきなり背後から声がする。振り替える健宏だが誰もいない。

「ココダヨ、ココ。」

下の方から声がしたので視線を下げると人形が立ってしゃべっている。

「俺ノ名前ハチャチャゼロダ。ゴ主人ト妹ガ世話ニナツタナ。」

「妹？ああ、茶々丸ちゃんか。俺は大したことはしてないぜ？」

「妹ノ命ヲ救ツタリ、ゴ主人ノ登校地獄ノ呪イヲ解ク事ハ大シタコトジャネーダロ。大体ゴ主人ノ魔力ガ戻ッタオカゲテ、俺ハ動ケルヨウニナツタンド。アリガトヨ。」

チャチャゼロに礼を言われ健宏は少々照れくさかったらしい。
話をそらし始めた。

「ん？お目覚めみたいだな、エヴァ。」

「・・・なえ・・・」

「？」

「記憶を失えー！！」

「おわあっ！？い、いきなり何すんじゃお前はー！？」

2階から降りてきたエヴァはいきなりものすごいパンチを放ってきた。何時もならどうと言うことはないのだが、今回は真祖の魔力全力パンチ。さすがにシャレにならないので慌てて避ける。

「黙れ、避けるな！」

「ふざけんな、ンなもん当たったらさすがに大ケガするわー！」

「イヤ、死ヌダロ。」

いきなり始まった（命懸けの）コントから数分後、エヴァは落ち着きを取り戻した。

「さっきはすまなかったな、みつともない所を見せて。」

「もういいさ。理由も大体分かるし。」

このやり取りの後、茶々丸が用意した食事を食べる二人。お祝いというだけあってかなり美味かった。

「健宏、改めて礼を言う。本当にありがとう。」

「だから礼なんていいって。修学旅行を楽しんでくれればそれでいいよ。」

そついうがエヴァは譲らない。だが健宏は名案を思い付いた。

「じゃあ一つだけ。修学旅行の三日間、このちゃんに危険が及ばないようにつくねえ？なるべくでいいからさ。」

「分かった。真祖の吸血鬼の名に賭けて近衛木乃香を守ることを誓

おう。」

「ンなに考えなくてもいいって。」

エヴァの発言に苦笑する健宏。真祖の吸血鬼の名に賭けて誓うということは結構トンでもないことなのだが、この男は判ってなかった。

夜も更けエヴァンジェリンハウスを後にした健宏。

明日は修学旅行、何事もないようにと歩きながら祈る健宏だった。

第11話 ロリツ子吸血鬼の人生最良の日（後書き）

「どうも、今回は復活しました、狩野健宏です！ゲストは三度目のこのお方！」

「2話ぶりだな、貴様ら！今回のゲストもこの私、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルだ！」

「めっちゃテンション高いなエヴァ！」

「封印が解けたからな、テンションの高さは何時もの三倍だ！」

「赤い○星かよ！」

「ところであの呪文は何なのだ？」

「解呪の呪文か？あれは完全にオリジナルだ、深く突っ込まれても困るので止めるように！」

「話の流れからすると、次は修学旅行だよな！？」

「モチのロンよ！エヴァも待ちきれないみたいだし次回予告いってみよー！」

ついに待ちに待った修学旅行！皆ドキドキワクワク！

しかし至るところで妨害発生！？

健宏は木乃香を守るか？

そしてネギは無事に親書を届けられるのか？

次回から始まる修学旅行編、お楽しみに！

「ほう、ついに長編スタートか。作者の文才に期待だな。」

「作者にプレッシャーかけんなよ・・・何はともあれ次回をお楽しみに！」

「貴様ら、絶対に見るのだぞ！」

第12話 いざ京都へ！（前書き）

今日から楽しい修学旅行、皆ドキドキワクワク！
しかし様々な妨害にあい・・・
奇想天外、愉快痛快な物語！
それではどうぞ！

第12話 いざ京都へ！

「早くせんか健宏！京都は待つてはくれんぞ！」

「まだ8時だぞ？ンなに急がなくても十分間に合つて。」

それに逃げねーし。苦笑しながら健宏は呟く。

「健宏さん、マスターの都合に付き合わせてしまいもうしわけありません。」

「いいよ別に。寝坊して遅れないだけマシさ。」

エヴァの都合に付き合わせたことを謝る茶々丸だが、特に気にしていない健宏にとってはどうでもいいことらしい。時間が時間だし誰も来ていないだろうと思っていた健宏だったが既に先客がいた。

「健宏さん、茶々丸さん！それにエヴァンジェリンさんも！」

嬉しそうに言つて近づいてくるのはネギだった。

「そついえばエヴァンジェリンさん、登校地獄の呪いのせいで学園から出れないんじゃない？」

「それなら大丈夫だよ、昨日俺が解いたから問題なし！」

「へえー、そうなんですか、良かったですねエヴァンジェリンさん・……ってええー！？」

登校地獄の呪い解いたんですか！？それも健宏さんが！？」

最初は喜んだネギだったが理解するにつれ驚いたらしい。

「なーんか引つかかる言い方するなあネギ？」

「あ、いえ、僕はそういう意味で言ったんじゃないですね・・・」
「ケケツ、判ってるってーの。」

「そ、そんなことよりどうしたんですかこんなに早く？あ、わかった！エヴァンジェリンさんも待ち切れなかったんですね！？」

「そ、そんなわけあるか馬鹿者！時間を間違えて早めに来すぎただけだー！」

ネギに対し素直でないエヴァ。見かけどおり10才のネギと同じ行動をとったのが恥ずかしいらしい。

「そ、そうなんですか・・・」

「ネギ先生、マスターは朝5時に起床し修学旅行の準備をしていました。」

「そーそー、俺なんか6時にエヴァン所に来させられたんだぜ？エヴァはリアルに10才のお前と同じことしたのが、恥ずかしいだけだよ」

「き、貴様らー！！余計なことを言うなー！！」

落ち込んでいたネギだが、茶々丸と健宏の説明を受け嬉しそうに笑う。エヴァはもちろん顔を真っ赤にして怒り狂っていたが。

そうこうしているうちに、京都へ出発する時間になった。
ここで3Aの班構成を紹介しよう。

第1班・柿崎、桜子、釘宮、鳴滝風香・史伽。

第2班・古菲《クーフェイ》、超《チャオ》、葉加瀬、五月《さつき》、楓。

第3班・あやか、千鶴、千雨、夏美、朝倉、美空。

第4班・裕奈、亜子、アキラ、まき絵。

第5班・夕映、ハルナ、のどか、木乃香、明日菜、刹那。
第6班・エヴァ、茶々丸、ザジ、真名。

以上が3Aの修学旅行の班構成である。ちなみに4両目からは高等部3Bが乗っている。

新幹線内2両目。木乃香、刹那、真名、桜子、朝倉、エヴァ、そして健宏。7人に緊張が走る。

静まり返る新幹線内。張り詰めた空気の中、健宏が動いた。

「ワンペア、また俺の負けかよ・・・」

何のことは無い、ポーカーをしていた7人だった（汗）

「また負けかよ・・・」

「5回連続負けというのはなかなか聞かないぞ？」

エヴァの言葉に肩を落とす健宏。何故ここにいるかというと、近くで護衛をしていた健宏だったが木乃香に遭遇、あれよあれよという間に2両目に引きずり込まれポーカーをやっていたのだ。

「フフ、弱いね健宏さん。」

「ホンマ弱いなータケちゃん。」

「すみません健宏さん。」

「ホント、いいカモだねー。」

「にやははー、どうする？まだやるの？」

上から順に真名、木乃香、刹那、朝倉、桜子の発言である。

「弱い弱いいうなー！！心折れるわー！！」

次こそ勝っちゃる！意気込む健宏。この男は護衛だというっ自覚はあるのだろうか。

「（どうやら今ん所異常ナシだな。）」

「（ええそのようですね、何事もないことはなによりです。）」

「（これだけの実力者が近衛の側にいるんだ、迂闊に手を出せないのだろうさ。）」

「（襲って来た奴を無事に帰す必要もないしな。）」

訂正、どうやら遊びながらもちゃんと護衛をしていたらしい。ちなみに真名は単純に遊んでいるだけだ。

「ところでまだやるのか？貴様の負けは目に見えているぞ？」

「この手を見てもそういえるのかな？どうだ、ロイヤルストレートフラッシュ！」

「にははー、ゴメンねー。私ファイブカードなんだー。」

「「「「「またかよ！？」」「」「」「」」

余談だが5戦とも勝者は桜子だった。

様々な遊びをしながら京都に向け順調に進む麻帆良学園一行だったが、その時事件が起こった。

『キャーーーーー！ーーーーー！ーーーーーッ！！！』

『ヒーーーーー！！！！！』

車内に湧き上がる悲鳴。

「――ゲコ。」

何とカエルが突如大量発生したのだ。

「これは・・・関西呪術教会の妨害!？」

「カエルって・・・アホや、仕掛けたヤツはホンマもんのアホや・・・」

刺客の妨害に焦る刹那とは対称に、健宏は妨害のあまりの幼稚さに呆れていた。

しばらくしてカエルが全て回収された後、ネギが関西呪術教会への親書を式神に奪われ追いかけていた。

それを取り戻した刹那だが、

「あたっ!？」

戻ってきたところを、一部始終を見ていた健宏にデコピンされてしまう。

「あんなあ、親書を取り戻す分には構わんが返す時にあんなこと言ったら敵だと思われちゃうぞ?」

「あう・・・」

ネギに向けての発言に対して注意する健宏だが、これがあながち間違っておらずネギが刹那をスパイだと思い込んでしまったことにはさすがに気がつかなかった。

京都、それは日本が誇る観光スポットのひとつである。京都に着い

た麻帆良学園御一行は清水寺にいた。
各々が目の前の光景に興奮しているので少々騒がしいが仕方がない
だろう。

最も、さすがは麻帆良学園というべきなのか、

「誰かココから飛び降りるアレ!？」

「誰か飛び降りれっ!」などのお約束のセリフが飛び交い、本当に
飛び降りようとする子が出るなどの、
ハプニングがあったが。

そんなハプニングもさておき、みんなが見学に回る。それはエヴァ
も例外ではない。

「ああ・・・実に良い所だな京都は。さすがは日本が誇る観光スポ
ットというだけはある。」

「おほめに頂き光栄ですってな・・・ホントに良かったなエヴァ。」

「はい。感謝しています」

エヴァは目の前の光景に感動し、健宏の声も聞こえないようだ。
茶々丸が対応しているので問題はないが。

どこへともなく歩く健宏たち。そこには3Aのメンバーが集まって
ざわついている。

近くにいた生徒に話を聞いてみると恋占いの石に誰かがチャレンジ
するらしい。

メンバーはまき絵、あやか、そしてのかの3人・・・と言いたい
ところだが原作どおりにいかないのが創作ものの醍醐味。

メンバーは上記の3人＋木乃香、刹那、朝倉、真名、桜子の計8人である。

「ってこんなにいるんかい！？こんな別嬪さん達に想われとる幸せモンは誰なんやろな・・・どったの皆？俺になんかついてる？」

健宏が放ったセリフに対し「何いつてんだこの人は」と言わんばかりの顔をする3A生徒たちだった。

そうこうしているうちにレースが始まるかと思われたが健宏が待ったをかける。皆が文句を言うのを無視し、中間地点まで来ると足を振り落とした。

「あーらよつと！」

するとなんとカモフラージュされた落とし穴があらわれた。

「えー！？なんで落とし穴があるの！？」

当然みんな騒ぎだす。

「カエルといい落とし穴といい、アホな罠ばっかだよ・・・」

このままここにいて怪我をさせるわけにはいけないので、ひとまず皆を移動させる。

この後、音羽の滝に酒が仕掛けられていて3Aの生徒が酔っぱらってしまふハプニングもあったが、何とかごまかし酔いつぶれた皆を部屋に運ぶ事に成功した。

「まさかここまで大胆に仕掛けてくるとは・・・」

「これからどうしようかねえ・・・」

ロビーで話し合う健宏と刹那のところにネギたちがやって来た。

「健宏さん！桜咲さんも！どうしたんですかこんな所で？」

「やいやいやい！狩野健宏、桜咲刹那！やっぱりお前らが関西呪術協会のスパイだったんだな！？」

「いきなりなに抜かすか妖怪オコジョ。」

ネギ達とも対抗策を練ろうとすると、カモがいきなりスパイ容疑を掛けてきた。

「大体どつからそんな妄想もつてきやがったんだお前は？俺たちはこのちゃんの護衛のために麻帆良に来たんだぞ、このちゃんを裏切ることはしねーよ。」

カモの発言に口調こそ何時ものとお里だが、スパイ容疑を掛けられたため心なしか機嫌が悪いようだ。

「旦那だけじゃなく刹那の姉さんもか！？新幹線での刹那の姉さんが怪しすぎたもので・・・」

旦那の口調からするとホントの事らしいな、疑っちまってすまねえ！！」

なにはともあれネギ達の誤解も解けた皆は一度解散する。

「風呂はいいねー、リオンが生み出した文化の極みだよ。」

「誰ですかリオンって？」

「それをツッコむのは無粋だぜ兄貴。」

風呂での定番(?)のセリフを吐く健宏。当然ながらネギは分からない(作者も元ネタは知らないが)。

読めばわかるように健宏たち男組は露天風呂に入っていた。

それからなんやかんや話していると脱衣場の戸が開く音がした。

まほ校のやつらかと思いい目を向けると、びつくり仰天した。

なんと入ってきたのは刹那だったのだ。慌てて岩影に隠れる健宏たち。

(なななな、何で!? 入り口は男女別だったのに!?)

(こついうのを混浴って言うんだよ兄貴!!)

(ひとまずせつちゃんが出るまで待つしかねえ!! つーか落ちつけばれるから!!)

あわてるネギとカモだが健宏の発言で落ち着く。

ネギ達を落ち着かせた健宏だったが、落ち着いてしまったせい刹那の白い肌に見とれてしまっていた。げに恐ろしきは男の性である。

(肌白いなー、昔せつちゃん達と風呂に入った事あったけどあん時からぜんぜんかわってねーな・・・)

つてなにを俺はまじまじと見とんじゃ、アカンやろ!?)

そんな風にあわてたせい、はたまた邪念を感じ取ったのか、刹那が反応した。

「誰だ!!」

((ヤバッ!)))

刹那は夕風に手をかけ健宏たちのほうへ走ってきた。

「逃がさん！！ 神鳴流奥義、斬岩剣！！」

彼女は居合いから横薙ぎに夕風を振るい、健宏たちが陰に隠れている岩を真つ二つにした。

次の瞬間ネギが小さな杖を構え、魔法を放つ。

「風花・武装解除！！」

刹那の持っていた夕風が弾き飛ばされたが、それでも彼女は徒手空拳で挑む気なのか突っ込んできた。

「ちょ、ちょい待ち！！せつちゃん、俺や、皆の人気者、健宏さんですよー！？」

風呂場でさらに素っ裸だからか、あわてて刹那を止める健宏。

「へ？健宏さん・・・？」

刹那はきょとんとして健宏を見た。

「と、とにかく夕風を仕舞って・・・つておわあっ！？」

夕風を仕舞うように言う健宏だがいきなりあわてて後ろを向いてしまふ。タオルはちゃんと巻いていた筈だと思い、自分の姿を見ている。すると、

「！？」

胸が見える！！タオルがない！！丸見え！！見られた！？理解した刹那は

顔を真っ赤にした。

「き・・・」

「「「き？」」」

「きゃあああー！？」

あわてて、バスタオルを取り、体に巻きつける。

「な、なんでここにいるんですか！？」

「先に俺たちが入ってたらせつちゃんが来たんだよ！」

「まさか混浴ですかココ！？見てませんよね！？」

そう言われると先ほどの光景が頭に浮かんでしまうのは人間の性、健宏も例外ではなかった。

「見てない見てない！！肌白いなーなんて思って・・・あ・・・」

パニックたせいでいらん事まで言ってしまう、刹那の目に涙がたま
る。

「う、うわああーん！！」

ついに耐えきれなくなったのか、刹那が風呂場から逃げ出そうとする。その時

「ひゃあああー！！」

脱衣所の方から悲鳴が聞こえた。

「ッ！！お嬢様の悲鳴！？」

「脱衣所の方からだ！」

関西呪術教会のやつらか！？迂闊だった！

そう思いながら女子の脱衣場の方へ突入する健宏たち。そこには多くの子猿がアスナと木乃香の下着を脱がし、木乃香をさらおうとしていた。

「チイツ、これは式神か！！」

一瞬のうちに怒りに染まり、子猿を切り裂こうとする刹那。しかし、

「嫁入り前の婦女子に何さらすんじゃボケー！！」

健宏がそれよりも早く、どこからともなく取り出したハリセンで小猿を叩きのめす。あまりのスピードにあっけにとられた刹那だが、今やるべきことを思い出し自分も子猿たちを切り裂いていく。全ての式神を片付けると健宏たちは木乃香の元に駆け寄った。

「……ご無事ですか（大丈夫か／大丈夫ですか）、お嬢様（このちゃん／木乃香さん）！？」「」

「うん、大丈夫やえー。ありがとーな、皆。そーいえば何でタケちゃんとなネギ君がここにおるん？」

無事なことに礼をいう木乃香だが、健宏たちがここにいることに疑問を浮かべる。

「へ！？あー、それは、そのー、なんと言いましょうか・・・」

さすがに鉢合わせてしまいました、というわけにもいかずどうごまかすか必死に考える。しかしアスナがとんでもない一言を放つ。

「・・・もしかして覗き!？」

「んなわきゃあるか!てかこんな堂々とした覗きがいてたまるか!つてそうじゃなくて、俺たちが入ってたとこにせつちゃんが来たんだよ!」

アスナが抜かした爆弾発言に大慌てで否定する健宏。そりゃさすがに覗きのレッテルを貼られるわけにはいかないし。

「混浴なのココ!?聞いてないわよ!？」

「俺に言つなや・・・と、とにかく俺たちはもう出るから!そんじやぐゆつくり!」

そついうと健宏はとんでもないスピードで出て行った。これ以上何もいられないように。

「ああー!」

「ど、どうしたの木乃香!？」

「た、タケちゃんに裸見られてしもた・・・もうお嫁に行かれへん・・・」

「そ、そーいえばそーだったわ!・・・もー何でこーなるのよー!あとで口封じしなきゃ・・・」

・・・とりあえず健宏たちの無事を祈ろう、合掌。

「いやもうホントとすんませんでしたー!」

結局あれからボッコボコにされた健宏は、数秒ほどで復活しアスナと刹那を前に上〇さんもびつくりの見事な土下座を披露していた。

ネギとカモはあまりの恐ろしさに真っ青になり震えている。

「健宏さん、次はないからね!？」

「こ、こうなったら責任を取ってもらうしか・・・／＼／」

・・・一人おかしな考えがいるが気にしないでおこつ。

「と、とにかくこれからどうするかを考えよう。式神が襲ってきたんだ、襲撃はまたあるだろうしな。」

「ええ、敵はお嬢様を狙う者たちと、長への親書を狙う者たちを相手にしなければなりませんから。」

「すみません、僕が不甲斐ないばかりに皆さんに余計な手間をさせてしまつて・・・」

「何いつてんのよネギ。アンタのせいじゃないわよ。」

「アスナちゃんの言う通りだ。おまえはよくやってるよ。あんま自分を卑下すんなつて。」

自分のせいで皆に余計な手間をかせってしまったことを申し訳なくネギだが、健宏とアスナのおかげで取り直す。

「こつちにこのちゃんが来てるんだ、親書を狙ってくる輩はいないだろうからこのちゃんを守ればいい。」

「しかし油断はできませんね。健宏さんがいるとはいえこちらは5人、一体どうすればいいのか・・・」

「それに関しては私が手を貸してやるから問題はない。」

全員声がしたほうを振り向くとそこにはエヴァと茶々丸がいた。

「手を貸すとはどういう意味ですか？そしてなぜ・・・」

「そのままの意味だよ桜咲刹那。理由は健宏との約束だからだ。」

「おう、頼むぜエヴァ。茶々丸ちゃんもよろしくな！」

「はい、お任せください。」

約束というのを強調するエヴァ、刹那は若干不機嫌そうだ。

「とにかく、万全の体制はとった。あとはこのちゃんを護るだけだな。式神返しの結界も張ったんだから術者が入ってこない限りは安心だろうよ。俺がこのちゃんの部屋あたりをうろつくわけにはいかないから、ちつとばかし離れたところにいるけどなんか起こったらすぐ行くから頼むわ。んじゃ各自持ち場につくように！」

そういつて健宏は離れた所に行く。

ホテルの見回りを終えたアスナと刹那が五班の部屋に戻ってきた。

「ただいまー、ってみんな寝てるわね。」

のどか、ハルナ、夕映、木乃香は疲れたのか布団の中で眠っている。彼女らは見回りの途中で茶々丸と廊下で出会い、木乃香を送ったと知らせを受けた。エヴァがいなかったのが気になったが、二手に分かれて見回りをしているらしい。

「では、私は廊下で警戒を続けますので」

「それじゃあ、何時間かごとに交代しましょう」

「いえ、構いません。アスナさんは一般人なので、これ以上は・・・就寝時間になれば、教師に見つかる可能性のあるので。」

「・・・分かったわ。木乃香はつきつきりで守るから」

「ですが、何かあったらすぐ呼んで下さい。では・・・」

「うん」

刹那が見張りを続けるのは大変だろうと、明日菜は交代を申し出る。だが刹那の指摘に納得し、木乃香を守ることに気合を入れる。刹那が退室し、明日菜は上着を脱ぎながら一つ疑問に思う。

「ふう、今日はこのまま徹夜かしら。やれやれだわ。でも、疑いが晴れたのに桜咲さんの態度が固いままよねー、どうしてかしら？」

「んゝアスナ？」

「あつ、ゴメン。起こしちゃった？」

明日菜の独り言で目が覚めたのか、木乃香が起き上がる。木乃香は布団から出てフラフラと歩く。

「ちよつと木乃香！何処行くの！？」

「トイレ……」

「（トイレか……それなら仕方ないか）気をつけてねー、早く帰ってきなさいよー」

「うんー」

トイレなら仕方ないと、見送る明日菜。木乃香は寝ぼけ眼でトイレの扉を開ける。

すると……

「入っとなりますえー」

巨大な猿のヌイグルミのようなものを被った千草が待ち構えていた。木乃香は、悲鳴を上げる暇もなく捕まってしまう。

波乱にとんだ修学旅行の初日の夜はまだ続く……

第12話 いざ京都へ！（後書き）

「どうも、約1ヶ月ぶりに出てきました、狩野健宏です！久々のこの回のゲストを飾るのは毎度おなじみこのお方！」

「ハア！ッハッハッハッハ！久しぶりだな貴様ら！お待ちかねのこの私、

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだ！」

「エヴァ、久しぶりつつたつてお前前回出たる？」

「アホか貴様は！この小説が最後に投稿されてから1ヶ月経ってからの更新だから言っているのだ！」

「あ、そゆことね・・・まあそう言つてやるなよ、R（この小説で作者の呼び名）にもいろいろ事情があったんだからさ。」

「事情だと？」

「自宅にいた時はパソコンだったから打つのも早かったけど、今は学生寮でスマートフォンで打ってるから手間取ってんだよ。」

「学生寮でパソコンとやらは使えないのか？というかノーパソがあるんだろ？」

「使えるっちゃ使えるけど流石に人目に付くし、何時間も張り付いてるわけにもいかないんだとさ。ノーパソはネットにつなぎたくても親の金だから料金払うのは親の方、だからダメなんだとさ。」

「全く難儀なものだな・・・」

「まあ近いうち外付け用のキーボード買うみたいだから、そうなりや更新スピードは上がると思うぜ？」

「ちよつと待て。本当にそれだけなのか、理由は？」

「へ？何でそう思うんだよ？」

「確かにスマートフォンだからというのも理由の一つなんだろうが、なんとなくそれだけでは無いような気がしてな。で、実際どうなんだ？」

「・・・お前の言う通りだよ理由はもう一つある・・・」

「やはりな、一体何なんだ？」

「怒るなよ？・・・何でもPSS3の魔界○記デ○スガイア4買ったんでそればっかやってたらしいぜ？」

「・・・あ・・・アホかー！！」

「ぶげら！？俺に怒んなよ！？」

「怒るにきまつとるだろーが！？よりによつてゲームだ！？ナメとるのか！？」

「だから俺に怒んなつて！？なんかデ○スガイア3発売の時から我慢してたらしいんだ、しゃーねーだろ？」

「全く、甘すぎるぞ貴様は！」

「んなこと言われてもこれが俺のキャラだからね・・・

そんなことより！次回予告行ってみよー！！」

あれほど注意していたのに木乃香を奪われてしまった！

木乃香の奪還に向かう健宏たち！

果たして木乃香を救い出すことはできるのか！？

「フン、大丈夫だろうよ。」

「つたりめーだろ、この俺が取り返せないわけねーだろ？」

「その割には簡単に誘拐されたがな・・・大体私が言っているのはそういうわけではない。」

「？じゃあどういうわけだ？」

「決まっているだろ？助けられないと話が進まないからに決まって

「メタ発言すんなよ！？と、とにかく今回はここまで！次回もお楽しみに！」って私のセリフを遮るなー！！」

第13話 2ndミッション！ 木乃香を救出せよ！（前書き）

誘拐されてしまった木乃香、健宏たちが救出に向かう！

果たして健宏たちは木乃香を助け出すことが出来るのか！？

奇想天外、愉快痛快な物語！

それではどうぞ！

第13話 2ndミッション！ 木乃香を救出せよ！

「ごめん、ネギー！！木乃香、ゆーかいされちゃった！！」
「ええーっ！？」

このちゃんが攫われてしまった・・・
やはり、一般人の神楽坂さんに任せたのが失敗だったか・・・
いや、神楽坂さんは悪くない。味方が増えたことで警戒心が緩んでいた私の責任だ。
いや、今はお嬢様を助け出すのが先決だ。

「神楽坂さん！！私は敵を追います！！」
「ちよつと待つてよ！私もいくわ！木乃香のピンチなのよ、親友として黙って見過ごせるわけ無いじゃない！」
「・・・急ぎますので遅れないよう」
「了解！」

押し問答している余裕すらもない。
今はこのちゃんを取り返す事が先決。

「桜咲さん？」
「いえ、何でもありません。行きます！！」
「ええ！！」

待つていてください、このちゃん！

『ごめん、ネギー！！木乃香、ゆーかいされちゃった！！』
「ええーっ！？」

ネギはある橋の側で、カモから仮契約のカードの説明の追加を聞いていた（道具の呼び出しなど）

すると明日菜から携帯で連絡があり、木乃香が攫われたことを知る。

「兄貴っ！アレは！？」

「えっ？」

電話で事態を知ったネギの前に、木乃香を抱き猿の着ぐるみを着た千草が着地する。

猿の口の中から顔を出しているので、ネギの姿をみつける。

「おやまあ。さっきはおーきに、カワイイ魔法使いさん」

「あなたは！・・・もしかして変態さんですか？」

「誰が変態や！ってこんなことしとる場合やない、さっさとずらかな。」

「こ、木乃香さん！」

いきなりの変態宣言に青筋を立てる千草だが、目的を思い出し逃げ出そうとする。

いきなり強力なボケを放ったネギだったが、千草に抱えられてる木乃香を見て予備の杖を取り出す。

「木乃香さんを放してください！ラス・テル・・・むぐっ！！」

「ほな、さいなら」

脱衣所でも現れた猿の式神たちがネギの口を塞ぐ。その間に千草が逃げてしまう。

「ネギーー！！」

「ネギ先生ー！！」

「ネギ!!」

そこへ気配を追ってきた健宏と刹那、明日菜が合流する。式神を追い払うと、4人と一匹が再び追い掛ける。

「今ここを逃げてったんだ、ちゃっちゃんと捕まえますか!」

健宏の言葉に誰も異論はなく、さらにスピードを上げる。その成果か、すぐに千草を発見する。

彼女は駅に逃げ込むようで、ネギ達も改札口を乗り越える。

「どうして誰もいないんでしょう?」

「人払いの呪符が貼ってあるんだ。一般人は近づけねえ。ありゃたぶん関東呪術協会の呪符使いだ!

あの着ぐるみを着込むタイプの呪符使いはけっこう手練れだ、気をつけるよ!」

無人なのに明かりが点いている電車が止まっており、千草が乗り込む。

ドアが閉まるギリギリでネギ達も飛び込み、電車が走り出す。

そんな事は気にも止めず、ひたすら千草の後を追う。あとは前の車両に追い詰めればいい。

皆はそう思っていた。だが、敵も甘くはない。

「お札さん、お札さん。ウチを逃がしておくれやす」

車両の繋ぎ目の扉を潜る前に、札を使って大量の水を呼び出す。千草は札の発動後、別の車両に避難しているので被害はない。

「わーっ!!」

「何、この水!?!」

「っ！」

「うへー!!」

「このままじゃ全員湯冷めしちゃう!？」

閉じ込められたネギ達はなす術もなく、溺れてしまう。

ネギは口を開く事は出来ず、明日菜は浴衣が乱れを直すので精一杯。刹那は自分の非力さを嘆いていた。

約一名は別のことを気にしていたが。

「（水の中では剣が・・・このちゃん・・・）」

脳裏に、幼少の頃の木乃香が溺れている光景が映し出される。

『ぷはっ!!せつちゃん!!』

「（そうだ、私はあの時誓ったんだ、もうこれ以上このちゃんに危険が及ばないよう私がこのちゃんを守ると！私は諦めない！このちゃんはずっと救い出す!）」

幼き日に立てた誓いを胸に、神鳴流の技の一つ『斬空閃』を放つ。

見事、扉をぶち破り水が流れ出す。その先にいた千草が水流に巻き込まれる。

その時にちょうど別の駅に着き、扉が開きホームへ全員が流れ出る。

「ゲホッ・・・デカザル女、嫌がらせは諦めてお嬢様を返せ」

「誰がデカザル女や!・・・それは出来ん相談や。木乃香お嬢様は返しませんえ」

「ま、待て!!」

再び木乃香を抱いて逃げ出す千草を追いかけるネギ達。

だが、敵の言葉から嫌がらせではなく木乃香一人を狙った事だと推

測できる。

ネギと明日菜がどうということだと刹那に問う。

「どうということなんですか、刹那さん!？」

「嫌がらせが目的じゃなかったの!？なんで木乃香を誘拐しようとするの!？」

ロビーでは木乃香の手前ということもあり、関西呪術協会の長の娘とまで説明していなかった。

以前から刹那が木乃香の護衛をしていたとは知らされていたが、敵にまで木乃香を『お嬢様』と言う意味が分からない。

「そ、それは・・・」

「それに関しては俺が話そう。このちゃんは関西呪術教会の長の娘なんだ。」

「ええ!？木乃香さんが関西呪術教会の長の娘!？」

「じゃあ木乃香は魔法使いなの!？じゃあなんで西の奴らは木乃香を誘拐しようとするの!？」

「いや、このちゃんは魔法使いじゃねえ。西にはこのちゃんを麻帆良・・・東に送ったことが気に入らねえ連中がいるんだ。西の奴らからすりゃ東は大切なお嬢様を奪った組織だからな。誘拐というより取り戻すって感じなのさ。そしてまあ今回はコッチが本題なんだろうが、このちゃんの力を利用して関西呪術協会を牛耳るつもりなんだよ。」

「ええーっ!？」

「な、何ですか、それはー!？」

ネギ達もそこまでは想像も出来なかったのか、驚くしかない。健宏の説明は続く。

「俺もちつとばかり甘く見すぎてた。まさか修学旅行中にここまでするとはな・・・」

関西呪術協会は元々裏の仕事も担う組織。予測するべきだった。」

もう少し警戒を強めていればこのような事態にはならなかった。流石に部屋やトイレ、風呂場などは無理だが自分が側にいれば事前に気づいていたか、阻止できたであろう。

「いえ、健宏さんは悪くありません。甘かったのは私のほうです。」
「せつちゃん？」

いきなり声を震わせ、呪詛を吐くように刹那が胸の内を語りだした。

「健宏さんは私と違いいつもお嬢様を守るわけではありません。私をもっと警戒していれば！・・・」

「ちよつと待つてよ、別に刹那さんのせいじゃ！・・・」

「いいえ、私のせいです！あの時だってそうだった！私がしっかりしていればお嬢様を危険にさらしてしまうことはなかったのに！もう二度とお嬢様を危険にさらさないと誓ったのに！私は、またお嬢様を危険にさらしてしまった・・・やはり私のようなものがお嬢様の護衛など・・・」

「えい」「ビシッ！」

「あう！？」

脳天にいきなり走った衝撃に驚く刹那。思いのほか痛かったらしく、涙目になりながらあたりを見回すと、いつのまにやら背後に回っていた健宏がチョップの構えを取っていることに気づいた。

「今、『私のような者がお嬢様の護衛などとはおこがましい』とか

思ってたろ？」

「な、何故わかったんですか!？」

何故わかったんだ、この人は!？まさか何か魔法を!？

「魔法でも何でもねーよ。前にも言ったけど幼馴染だからな、それぐらいわかんよ。話は戻るけど今回はせっちゃんのせいじゃねえ、襲ってくるのがわかったのに結界張ったぐらいで氣いゆるめてた俺の責任だ。だからもう氣にすんなくて。」

「な、何を言ってるんですか!健宏さんは離れてたところから監視をしていたんです、健宏さんに落ち度は無いじゃないですか!」

「いや、俺のせいだ。どうのこうの言ったって最終的に俺も油断してたからな、せっちゃんだけが悪いんじゃないやねえよ、だから落ち込むなって。とにかく今は誰が悪いだの何だの言ってる場合じゃねえ、このちゃんをさっさと取り返しにくぞ!」

「は、はい!」

・・・すごいなこの人は、昔と比べても段違いに強くなっている。だがそれを鼻にかけようとしてもしないからさらに強くなり、それでいていつまでも優しいままだ。やはり私はこの人のことが好きだ、でも私がこの想いを口にするには無いだろう、何故なら健宏さんはこのちゃんに必要な人だから、私はこの人にそばにいられるだけで十分だ・・・

「おーい、どした?」

「い、いえなんでもありません!それより急ぎましょう!」

「なんかよーわからんがそうだな、急ごう!」

想いにふけているといきなり話しかけられ慌てて返事をする。

少し進んで行くと、ホームの大きい階段の中央辺りで、千草は着ぐるみを脱いで待ち構えていた。
すぐ側には木乃香が倒れている。

「フフ・・・よーここまで、おつてくれましたな」

「お嬢様を取り返すまで、何処までも追ってやる」

「右に同じの以下同文ってな」

「あつ！あなたはさっきの・・・」

「兄貴、それ以前に新幹線で！」

「おサルが脱げた！？」

ネギはホテルを出る時にぶつかつた店員と思い出し、カモはさらに新幹線にいた事に気付く。

明日菜は見当違いな感想を出しているが。

「鬼ごっこはここまでにしようぜ？天ヶ崎千草さんよう？」

「！？アンタ何者や、なんでウチの名前を知つとるんや！？」

相手が自分のことを知っているとわかり動揺する千草。

「なんでつて、そりや同じ派閥の人間ぐらい知ってるさ。」

「同じ派閥！？理解できへん、何でアンタは西の人間のくせに東の味方をしとるんや！？」

同じ西の人間だとわかり、声を荒げる千草。

「あー、何か勘違いしてるみたいだから先に言っとくけど、俺は別に東に味方してるわけじゃねーよ？」

「？どいうことや？」

「俺はあくまでこのちゃんとせつちゃんの味方さ。それ以上でもそれ以下でもない。そしてこの二人にてえ出したら痛い目見るぜ?」

このセリフを述べた瞬間、健宏の纏っていた空気が変わった。いつもの暖かい何者をも護る太陽ような暖かさから一転、生きとし生けるもの全てを凍らせる氷のような空気に変わった。

「(な、なんなんやコイツ!? ヤバい! せやけどもう後には引けんのや!)」

フン! 強気なんもここまでですえ。お札さん、お札さん、ウチを逃がしておくれやす」

「させるか!」

刹那が飛び掛るが間に合わず、呪符が発動する。

「喰らいなはれ! 三枚呪符・京都大文字焼き!」

「うあっ!」

巨大な火柱が現れ、刹那は近寄れない。咄嗟に明日菜が刹那を安全圏まで引つ張り、事なきを得る。

「それは並みの術者じゃ越えられまへんえ。ほな、さいなら」

「待て!」

「待ちなさい!」

健宏たちが少しずつ近寄るが、すぐに進めなくなる。

万策尽きたのようだが、ネギはすでに詠唱を済ませていた。

「風花 風塵乱舞!」

「何や!」

ネギの呪文で火柱はかき消される。風圧が千草にも襲い掛かり、顔を腕でかばう。

「木乃香さんは僕の生徒で、大切なお友達です！！逃がしません！！」

ネギは右手に杖を、左手に明日菜の仮契約のカードを取り出す。

「契約執行180秒間ネギの従者 『神楽坂明日菜』！！」

明日菜へ魔力供給し、彼女も構える。彼女の身体から魔力の光がもれ、視線は千草を睨む。

「行くわよ、桜咲さん！」

「えっ・・・は、はい！！」

明日菜の掛け声に、あの炎を吹き飛ばしたネギに驚いていた刹那も返事をし、4人同時に飛び掛かる。

千草もネギの予測しなかった強さに驚き動揺していた。

「アスナさん！パートナーだけが使える専用アイテム（アーティファクト）を出します！」

受け取ってください！名前は『ハマツノツルギ』です！！」

「武器！？よ、よーし！頂戴、ネギ！！」

「いきます！！能力解放 神楽坂明日菜！！」

『ツルギ』とあるので、武器だと予測するが現れたのは・・・

「ハリセン？・・・」

「ハリセンですね・・・」

「ハリセンやな・・・」

「ハリセンだな・・・」

何故かハリセンだった。今更止まる事も出来ずに、そのままヤケクソ気味に刹那と共に振りかざす。

だが、千草もまだ対策はある。被っていたサルの着ぐるみと、同じ感じの熊のようなモノが現れ攻撃を防ぐ。

「う、動いた！？着ぐるみじゃなかったの！？」

「そいつらは呪術者を守る善鬼・護鬼だ！間抜けなのは見てくれだけだから氣いつけるよ！」

「ウチの猿鬼・熊鬼エンキ ユウキは強力ですえ。そのまま遊んでなはれ」

「木乃香！こうなりやヤケよ！！くらえー！！」

千草が木乃香を担ぎ、場を後にしようとする。明日菜が焦り、やぶれかぶれに猿鬼にハリセンを振るう。

誰もが効果はないと思っていただろう。

しかし・・・

「ムキッ！？」

「・・・おお！やった！」「・・・」

猿鬼はあっけなく送還され、消滅する。これには明日菜自身も驚く。仕組みは分からないが、効果があることは理解した。

「桜咲さん！健宏さん！よく分かんないけど、そのケ○ちゃんみたいなのは私に任せて木乃香を！」

「わかった！」

「すみません、お願いします！」

守りのなくなった呪術者は隙だらけだ。一直線に刹那は千草に向かう。だが、彼女は忘れていた。

この駅に止まったのは敵の計画の内だと言っことを。
ならば・・・

「えーい！」

千草の背後のガラスを破って、飛び出してくる一人の少女。
そう、千草の味方がいてもおかしくないのだ。

「くっ」

健宏たちはぶつかり合った時に、乱入者の剣筋を見て驚愕する。

（しまった！神鳴流の遣い手が護衛についていたのか！？）

敵も起き上がり、姿を見ると別の意味で驚く。

少女と言う事もあるが、帽子を被りゴスロリ風の服を着ていれば戸惑うのも無理もない。

「どうもー神鳴流の月詠いますー見たところ、そちらのお姉さんも神鳴流の先輩さんみたいですけど、

雇われたからには本気でいかせてもらいますわー」

「こんな者が神鳴流とは・・・時代も変わったな」

「せっちゃん、何かババくさいぜ？」

「月詠を甘く見ると怪我しますえ。ほな、よろしゅう」

「はいー、一つお手柔らかにー」

「健宏さん、お嬢様をお願いします！コイツは私が！」
「・・・わかった。せつちゃん、無理すんなよ？」

一礼してからにもかかわらず、予想外の速さで刹那の懐に入り二刀の小太刀を振るう。

『えゝい』『やゝ』『とおゝ』などと掛け声に気迫は薄い、太刀筋は素早く隙もない。

刹那は意外な難敵に焦りを隠せない。

「ホホホ。伝統か知らへんけどその野太刀じゃ、小回り効く二刀の相手をイキナリするは骨やる？」

そこのお嬢さんにはこれ、アンタにはこれや！」

「ざーんーがーんーけーん！」

「くっ」

「またおサルがー！」

「うおっ、デケエー！」

野太刀の弱点を付いてくる月詠の攻撃に、刹那は押されていた。

明日菜は新たに現れた小猿の式神達に邪魔され、どうする事も出来ない。

健宏には千種の隠し玉であろう、身の丈四メートルはある二本の刀を持った巨大な鬼が立ちふさがった。

「所詮は見習い剣士と素人中学生。一番厄介な奴も本山から拝借してきた隠し玉を使った。

足止めはこれで・・・」

「まだです！魔法の射手 戒めの風矢！！」

「しもた！？ガキを忘れてたー！！」

千草が猿の式神達を召還した時に木乃香を下ろしていた。
そのまま式神に運ばせていたので、ネギは密かに捕縛用の魔法の詠

唱に入っていた。

ネギを忘れていたのは明らかに千草のミス。炎を消されていても、今もなおネギを侮っていたのだ。今度こそ決まりだと思えたが・・・

「あつ！曲がれー！！」

咄嗟に木乃香を盾にされ、ネギは魔法を逸らす。

「あら・・・？」

「木乃香さんを離してください！！卑怯ですよ！！」

千草も目を瞑っていたので分からなかったが、ネギの言葉で理解する。

ネギは・・・おそらく明日菜と刹那、健宏も木乃香を盾にしている限り手を出せないのだと。

明日菜もクマの式神に捕まってしまう。

「・・・甘ちゃんやな。人質の多少の怪我くらい、気にせず攻撃してきたらええのに。ホーホッホッ！！」

全く役に立つ娘やなーそや！呪符やら呪薬を使って口を封じて、ウチの操り人形にするのもえーな」

『なっ！？』

残酷な提案に、ネギ達は驚き以上に怒りがこみ上げてくる。さらに挑発するように千草は木乃香のお尻を正面へ向ける。

「ウチの勝ちや。木乃香お嬢様も青臭いガキやなーほーれ、お尻ペンペ・・・」

しかし、その言葉は最後まで言う事は出来なかった。

原因はキレル寸前の刹那達でもない。何かが爆ぜるような轟音が聞こえてきたからだ。

それは・・・

「悪いな、よく聞こえなかったんだがもう一度言ってくれないか？」

今しがた二体の式神を相手取っていた健宏が、いきなり目の前に立ちふさがったからだ。

「な、なんでここにおるんや！？アンタのことは鬼が足止めしとるはずや！」

「ああ、あの二体か？あれなら倒したぜ？」

こともなげに健宏がいう。千草が健宏がいた方向を振り返ってみると、いつの間にか鬼が消滅していた。

「な！？あの二体は長年本山に封印されとった代物なんや！？それを倒してもうたやと！？ありえへん！」

「まあ結果は見ての通りだ。このちゃんは返してもらうぜ？」

そついうと健宏は千草から木乃香を取り返す。

「さてと、あとはアンタをとっ捕まえて本山に引き渡すだけだ。さっさとお縄について！・・・皆、早くこっから離れる！！」

千草を捕まえようとする健宏だったが、上空から気配を感じ全員に離れるよう指示を出す。

その瞬間、千草の使役するものとは明らかにタイプの違う式神が現

れる。

その式神は2本ある角の片方が無く、背に翼を広げ、見事なまでに引き締まった筋肉の体を持っていた。顔には何故か一枚の札が貼られていた。

「・・・・・・・・」

警戒する健宏達には目もくれず、千草と月詠を抱きかかえ再び飛んでいく。

それからその場には変化はなく、健宏は力を抜く。そしてネギ達の方へ向き、厳しい表情のまま言う。

「こりゃホント一筋縄じゃいかねーな・・・ま、このちゃんを取り戻せただけでよしとするか。」

こうして修学旅行の一日目が終わった。

敵は予想以上に戦力があり、捕まえる事も出来なかった。今度は何を仕掛けてくるか・・・

これからもう少し警戒を強めなければ・・・
そう考えていた時・・・

「・・・・・・・・しまった！」

「え！どうしたんですか！？」

「今度はなんだよ！？」

「何か問題でも！？」

「今度はなんなのよ！？」

いきなり健宏が叫びだす。それに驚き臨戦態勢をとる5人。そして健宏がゆつくりと口を開く。

「いま思っただが、俺たちどうやって帰ろう？後始末もせにやらんし・・・」

『あ・・・』

ある意味戦闘よりもやっかいな問題に出くわした健宏たちだった。

第13話 2ndミッション！ 木乃香を救出せよ！（後書き）

「前回の投稿から約3週間、どうもお待たせしました、狩野健宏です！

ゲストは驚きのこのお方！」

「どうも、関西呪術協会の天ヶ崎千草います。皆様方、どうぞよろしゅう頼みます・・・ってなんでウチがゲストに呼ばれとるんや？

アンタとはまだ敵同士なんやで？」

「こればかりは俺にはなんともなあ、たぶんRが『こっちの方が面白いかも』って思って急遽変えたみたいだぜ？」

「ただだけ適当なんや作者は・・・というかアンタ、ウチがいうんも妙な話しやけど、ウチのこと捕まえんのかいな？」

「いやー、そりゃ捕まえようと思えば捕まえるんだけどやるだけ家無駄だからな。」

「無駄？どついうこつちゃ？」

「だってここは後書きだぜ？本編じゃないからとっ捕まえたって意味ないしな。」

「なるほど、よう判ったわ・・・」

「判ってくれて何よりだよ。そんなことより、次回予告行ってみよう！」

なんとか木乃香を取り戻せた健宏たち。護衛のために張り切る皆だが今回は学生生活の一大行事の修学旅行、楽しむことも必要です！さて健宏たちはどのように楽しむのか！

「おお、そついや修学旅行だったな。そんじやお言葉に甘えて遊びまくりですかねえ。」

「そやったらウチらはその隙にお嬢様をいただきますわ。」

「無理だと思うぜ？」

「何でや！？」

「だってこの次回予告から察するにアンタ出番ないぜ？」

「不公平すぎるやろ！？少しはウチにもええところ取りさせてや！」

「無理無理（笑）とにかく今回はここまで！」

次回も奇想天外、愉快痛快な物語をお楽しみに！」

「お客さん、ウチの活躍にも期待してやー！？」

第14話 funny days in京都！（前書き）

無事に木乃香を取り戻した健宏一行！

今日は楽しい自由行動の日！

今回の見所はもちろんあの子！

今回はラブストーリー！？

それではどうぞ！

第14話 funny days in 京都！

「それでは皆さん、いただきます。」

『いただきます！！』

修学旅行2日目の朝、3-Aのクラスのみならず麻帆良の関係者が全員揃つての朝食。どこを見渡しても談笑しながら食事している光景が見える。

そんな中、ある意味一番目立っている一角があつた。

「ふあゝあ、眠い・・・」

「どうしたんアスナ？なんか眠そうやなあ？」

「あ、大丈夫大丈夫、気にしないでいいわよ。」

「本人が大丈夫って言つてんだから大丈夫だよこのちゃん（ま、昨日あんだけ遅かつたんだ。そりや眠いわな。）。」

「それはどうかと思いますよ？」

アスナが眠いのも無理はない。昨夜ホテルに戻つたのは午前一時、それから風邪をひかないように温泉に入ったので、最終的に寝たのは午前二時を回ってからだったからだ。

「というか健宏さん達も寝るの遅かつたはずなのに全然眠そうに見えるんだけど？」

「私はこれでも結構眠いんですけどね。健宏さんはそうは見えませんが。」

「まあ、実際俺は眠くないけどね。」

「眠くないんですか？寝たのは二時くらいでしたよね？」

「まあね。基本寝るのが三時以降でもない限りは大丈夫だよ。」

「三時まで大丈夫っていったい何やってるんですか（何やって

んの？／何やっとなるん）？・・・」「
「ネットとかゲームだけど？」
「「「・・・」」」

ひとまず4人のバカ話はほおっておこう。

食事が終わった後、それぞれの生徒は自由行動の準備に戻ったり、その場で話したりと実にさまざまだ。

健宏たちも今日はどうするかネギとカモを交えて考える。

「今日はどうしましょうか健宏さん？」

「このちゃんの目的地は・・・奈良か。こりや無理だな、明日か明後日に回そう。」

「そんな悠長な！この間にもあのデカザル女がお嬢様を刻一刻と狙っているんですよ！？」

「大丈夫だって、これ見てみ？」

「なんですかコレ？」

健宏は刹那に一枚の紙を渡す。それにはこう書かれていた。

『今回はバトルはお休みです。なので今日一日修学旅行を楽しむように！』

ちなみに呪術協会の妨害は無いよ。 by R

「・・・では今日一日楽しむことにしましょう。」

「そ、そうだな・・・（なんかツツこんでやろうぜ？）」

なぜか刹那が無表情になってしまったが話を進めよう。最終的に奈良に行くことになったのでどこに行くかを決める健宏たち。ちなみ

に高等部の生徒は班行動ではなく自由行動なので健宏も一緒に回れるらしい。高校生ともなると生徒の自主性に任せるということだろう。

そうやって話し合っているところに近づいてくる生徒がいた。

3Aの生徒の宮崎のどかである。友人に発破をかけられネギを誘いに来たらしい。その証拠に普段は顔に下ろしている髪を後ろへ束ねている。最も素顔は緊張のため真赤だが。

「あ、あの・・・」

「ネギくん！！私たちの班と一緒に見学しよー！！」

「わー！！」

「ズルイですわよ、まき絵さん！！ネギ先生は3班と見学をー」

「何よー！！私が先に誘ったのにー！！」

「それなら僕の班もー！！」

かなりの勇気を振り絞り、小さいながらも声を掛けたのどかだったが、まき絵が大声でネギに抱きついたため遮られてしまう。

それを引き金にネギにアタックする生徒達が続々と現れ、てんやわんやとなる。

このままではのどかが可哀想だ・・・そう思った健宏がこの場を静ませようとしたとき・・・

「あ、あの、ネギ先生！！よ、よろしければ、今日の自由行動・・・私達と一緒に周りませんかー！？」

のどか自身がさらに勇気を振り絞って、大声でネギを誘う。彼女の声にドタバタしていたあやか達もピタッと止まる。

「宮崎さん・・・」

声の主がのどかとネギも分かり、考え込む。

お告げ（？）によって今日は大丈夫だと言うが、だからといって敵の狙いである木乃香と別行動するのも拙い。

のどかも5班だし、明日菜・刹那も同じく。

健宏の方へ目を向けるが、お前が選べとウイंकをされる。（全く似合っていないが）

「わ、分かりました、宮崎さん。今日は僕、宮崎さんがいる5班と一緒に回ります！」

『おー！！』

一部始終見ていた他の生徒も、この結果に驚く。

えがったなあのだかちゃん。青春やなあと少々おっさんくさいことを考える健宏。

だが、人の青春にホンワカしている場合ではない。

なぜなら・・・

「健宏！今日は私たちと周るぞ！」

「ズルイよエヴァちゃん！健宏さん、私たちと一緒に周ろうよー！」

「いやいや、健宏さん、私たちと周ろうよ。」

エヴァ、桜子、和美に声をかけられたからだ。

「へ？俺？ごめんねー、俺このちゃん達と周ることに決めてんのよ。だから・・・」

「木乃香ばっかりズルイよ！私たちとも周ろうよ！」

「そうだ健宏！貴様はこの京都に住んでいるのだから私を案内するのだ！」

「エヴァちゃんとはかく・・・桜子の言うとおり、木乃香ばっか

りズルイよ。だから私たちと周る？」

エヴァの発言は微妙にずれているが、三者三様に痛いところを突いてくる。

「って言われてもねえ・・・」

「まあまあ健宏さん、椎名達の言うことも間違っではないんだ。だから今日は私たちと周ろうじゃないか？」

「コラー、抜け駆けすんなー！大体たつみーはエヴァちゃんの班でしょーが！」

「そうだよ、ズルしたんだから私たちと周る？」

「それなら私たちの班にも権利あるじゃん！私たちと、周る？」

「何を言っているのだお前たちは！戦いに卑怯も蜂の頭もないわ！健宏が私たちと周るのは決定事項だ、引つこんでろ！」

このままではちが明かない。それに騒ぎを聞きつけ鬼の新田こと新田先生が近付いてきた。

このままでは間違いなく説教され、最悪外出禁止を言い渡されてしまう。

「だあー、わかったわかったー！それじゃ皆で周ろう！それなら全員と周れるし文句ないだろ！？」

「・・・仕方がない、今回はそれで我慢するでしょう。」

「うにゃー、しょうがないなあ・・・」

「ま、一緒に周れるだけマシだしね。今回はそれで妥協しますか。」

3人も新田が近付いてきたのがわかったのだろう、いつもなら話をもっとこじれるのだが今回はすんなり納得してくれた。その点だけは新田に感謝する健宏だった。

そうこうして1班・3班・5班・6班は奈良公園に来ていた。

「わーっホントに鹿が道にいる！」

「へー、結構大きいわね。」

一番興味を示すのはネギ。側にいる一頭に近づき、明日菜に手を振る。

「スゴイスゴイ！見てください、アスナさん！わっ！」

「はいはい・・・子供ねー」

「クスクス」

反対の手を鹿に噛みつかれ、別の意味で手を振るネギ。明日菜は呆れ、のどかにとっては微笑ましく軽く笑う。

「ぐえっ！？」

だがそんな微笑ましい光景をよそに、ドカツと何かがぶつかったような音とカエルが潰れたような声が聞こえた。

何事かと思い周りを見回すと、何故か健宏が仰向けになりひっくり返っていた。

「な、なにがあつたの！？（まさか敵襲！？）」

手練れである健宏が倒れていることに慌てる明日菜。だが刹那が苦笑いしていることに気づきそうではないと思いなおす。

「ねえ桜咲さん、何があつたの？」

「実はなー、タケちゃんが鹿さんに触る思て近づいたらお腹に体当

たりされたんよ。」
「・・・」

辺りに微妙な沈黙が流れだす。

「おーい、誰か手え貸してくれー・・・」

健宏がそう言うまで沈黙は続くのだった。

そんな中・・・

「えへへー・・・ネギ先生？」

ネギの様子を頬を染めながら嬉しそうに眺めるのどかに、夕映とハルナが飛びつく。

「よくやったー！！のどかー！！」

「きゃー！？」

「見なおしたよ、あんたにあんな勇気があつたなんて！！」

「感動したです。」

「えへへー・・・うん、ありがとー？ネギ先生と奈良を回れるなんて幸せー・・・今年はもう思い残すこと無いかも・・・」

少々大袈裟なセリフではあるがそれだけ嬉しいということだろう。
だが、良くも悪くもハルナは次の作戦を考える。

「バカアッ！」

「はふうっ！？」

いきなりのどかの頬を張るハルナ。（効果音からも判るように対し

て力が入ってないが)

「この程度で満足してどーすんのよ！女は度胸、ここから先が本番よ！」

当り前だが、これはあくまでハルナ個人の意見である。他人の恋が面白くもあるが、それでいて大親友のために真剣にアドバイスを送るハルナ。

そして本日一番の爆弾発言を繰り出す。

「告るのよのどか。今日ここでネギ先生に想いを告白するのよ。」

「えー！？そ、そんなの無理だよー！？」

いきなりとんでもないことを言ったハルナ。一般論ではのどかに軍が上がるだろう。

のどかもそこまで考えていたわけではないので驚くのも無理はない。しかしここで諦めるハルナではない、得意の口でのどかを丸め込む。夕映はそんなハルナに呆れながらも大親友ののどかのため、あえてハルナを止めずにただ黙って見守っている。

「そ、そそそんな急に・・・私、困るです。でで、でもネギ先生とデート・・・」

しかしのどかも想い人とのデートを夢見る中学生。否定的ながらもハルナの意見に心が揺れる。

「（なーんだ、のどかもちゃんとそういう思いはあるってわけね。それならこつちも気合入れて行動しますか！）ここまで来て何言ってんの！大丈夫、今のあんたならいけるって！！」

「フアイトです、のどか！！」

「そうと決まれば行動あるのみ！まずはネギ君と二人つきりにならなきゃね、行くよ夕映！」

「ラジャです。」

心の中でのどかに謝りながら大親友のため改めて応援をすることを決めるハルナ。

かくして「のどかの恋愛応援大作戦」（ネーミングはもちろんハルナ）は始まりを告げるのであった。

「念のため、各班に式神を放っておきました。今日はお告げ（？）があるとはいえ、何も起こらないと決まったわけではありません。何かあればわかります」

「それなら安心ねー」

「私は封印が解けたとはいえ、無闇に手を貸す事は出来ん。『闇の福音が力が戻って暴れた』などと広まれば、ややこしくなるからな」

「大丈夫だって言うてんのに・・・ま、いっか。」

「私はやっぱり気になっちゃうわね。てゆーか健宏さん、気にしなさ過ぎじゃないの？」

「姐さん、こういう時こそ休めるのも仕事だぜ」

木乃香が夕映に呼ばれ、場を離れている。

その間というわけではないが、むやみに心配掛けないように今の内に話し合う。

確かにエヴァが手を貸せば、容易いかもしれない。

しかし彼女の力を頼るには、あらゆる意味で危険すぎる。

直接エヴァが狙われるか・・・

もしくは近右衛門の許可を得れば、限定的に可能というくらいだ。彼らの会議も強制的に中断させられる。

そう・・・

木乃香に事情を話し、協力を得たハルナ達が彼らに強襲を掛けるこ

とで。

「アスナアスナー！！一緒に大仏、見よー！！」

「な、何よ、突然！？」

「タケちゃんー、せつちゃん！！一緒に団子食べへんー！？」

「どわっ！？な、何や！？」

「こ、このちゃん！？」

「エヴァンジェリンさん、あなたも色々と物知りのご様子。是非、語り合いましょう。」

「ど、どういうことだ、綾瀬夕映？（ん？宮崎のどかがいない・・・そういうことか・・・）仕方がない、少々付き合ってやるよ。おい、龍宮真名、朝倉和美、椎名桜子、その他大勢。貴様らもついてこい」

「ええー！？なんで私たちも！？」

「いいから黙ってついてこい！」

明日菜はハルナに飛びかかれ、背中を押される。

その拍子に彼女に乗っていたカモが落ちかけるが、何とかしがみ付く。

木乃香は何処で用意したのか、団子を差し出して健宏と刹那を誘う。その勢いに圧倒されている健宏に団子を手渡し、彼と刹那の手を掴んで引っ張っていく。

夕映はエヴァを担当し、木乃香同様に引っ張っていく。

エヴァは同じ女として（はたまた年の頃としてか）ハルナ達の策略が分かったのだろう、大した抵抗もせず夕映について行く。他の恋敵達が抜け駆けしないように強引に連れて行っているが。

茶々丸は無言で主を追っていく。

台風が通り過ぎたような展開に、置いて行かれたネギはポカーンとしている。

その彼に近づく一つの影。

それは当然・・・

「ネ、ネギ先生・・・」
「あっ・・・宮崎さん。」

緊張のあまりガチガチに固まるのどかだ。

彼女はいざネギを前に、どう誘っていいか分からなかった。

「皆さんもどこかに行っちゃって・・・一緒に回りましょうか。」
「は、はい！こちらこそ喜んで！！」

しかし、彼女の気持ちを少しも理解していないお子様は気軽にのどかを誘う。

言葉以上の意味も理由もないが・・・

それでも、のどかにとつても望んでいた事なので即頷く。

こうしてネギとのどかの奈良見学が始まった。

「何や、そういうことかい。」

「ゴメンなー、タケちゃん。」

「いいよ謝んなくて。上手くいくといいな」

「健宏さんは、のどかを応援してくれるのですか？」

「おうよ！あんなに純粋に頑張ってるんだぜ？健気じゃねーの、応援したくもなるっての。」

木乃香と夕映が強引に連れてきたことに、謝りながら経緯を話す。

横島は笑って許し、明日菜達も反応は多少違うが同じようなもの。

ハルナはのどか上手くいくか見届ける・・・もとい、覗きに行った。当初は夕映も行く気だったが、エヴァと話があうのでこのままここに残ることに決めたらしい。

ちなみに他の班員はそれぞれの班で行動し始めたらしい。

「しかし何故エヴァンジェリンさんはここまでしてくれたのですか？」

「まあ同じ女としてほおっておけなかったというのが一つの理由だな。まあ健宏と回れないのはちと腹にすえかねるが。」

「そ、それに関しては本当に悪いと思っっているです。ごめんなさいです。」

エヴァが機嫌を損ねていると思ったのだろう、夕映は慌てて謝る。

「フン、別に怒っているわけではないから気にするな。まあ私にはばーやのどこがいいのか皆目見当もつかないが、それでも同じ恋する女として手助けぐらいはしてやるさ。」

「エヴァンジェリンさん……」

「それならさ、エヴァちゃん。健宏さんも譲ってくれるというわけ……」

「ンなわけあるか！健宏は私のものだ、貴様らに譲ってやる気など毛頭ないわ！」

「……」

和美達に異様なまでに喰ってかかるエヴァを観て先ほど感動した自分を後悔する夕映だった。

「でもさー、ネギ君も鈍感だけど健宏さんも鈍感だよなー……」

「それが問題だと言えば問題なんだよな……」

「……」「……」はあー……」「」「」「」

「しかし、ネギは10才のくせにモテモテやなー。健宏さんは人生で一度もモテたことがないってのに……ちきしょー、ネギは外人やからか！？外人やから何かー！？」

全世界の外人が聞いたらそれこそ怒り狂うようなことを叫ぶ健宏。今わかつているだけでも6人も好意を寄せているのに何故それに気づかないのだろう。

「……目標は遠いな……」

「そうだね、はあー」

またもため息をつく6人だった。

「（しかし不思議な人です、あれほどにも人との関わり合いを避けていたエヴァンジェリンさんをこうも変えてしまうとは……一体どういう人なのでしょう？）」

不意に健宏がこの短い間に行ってきたことに対し考え込む夕映。

「（かと思えば今のようには馬鹿な発言をして周囲を呆れさせるアホさ加減も持っています。つくづく良く分からない人です。健宏さん・・あなたは一体何を考えているのですか？・・・）」

彼女は持っているジュースを飲みもせず、ひたすら考え込む。

明日菜は急に黙り込んだ夕映に首を傾げる。

夕映の思考は意外な形で止められた。

「ハア、ハア・・・」

「のどか！？どうしたんですか！？」

息切れしながら、涙を浮かべているのどかが現れた事で。

「ゆ、夕映〜！」

「しっかりするです！」

「本屋ちゃん!？」

「しっかりするえ!」

「お、おい、何があつたんだ!？」

ぺたんと座り込むのどかに慌てて駆け寄る夕映達。

彼らは必死に宥め、のどかが落ち着くまでしばらく掛かった・・・

のどかが落ち着いた後、場所を移動し休憩場所の店の前で座り経緯を聞く。

彼女なりに頑張つて告白しようとするが、空回りしてしまう自分が情けなく、そして悔しくて逃げてしまったらしい。

夕映がハルナに連絡を取つて確認しても、大体は同じ内容らしい。

「私、鈍いしトロイので失敗してしまって、もうどうすればいいのか・・・」

「何を言うのですのどか!まだチャンスはあるです!もう一度チャレンジするです!ネバーギブアップの精神なのです!」

「夕映の言う通りや!」

「そうそう!頑張りなよ宮崎!」

「にはー、ファイトだよ本屋ちゃん!」

夕映、木乃香、和美、桜子の4人がのどかを励ます。

「うう・・・でも私もどうすればいいのか・・・」

「おい、宮崎のどか。何故ぼーやなんだ?」

「ああ、それは俺も一度聞いてみたかつたんだわ。」

「え?・・・」

まさか健宏とエヴァが話に入ってくるとは思わなかったのだろう。

のどかは二人の質問に驚きながらも答える。

「ぼーやはまだ10才だ。何故そこまでぼーやに拘る？まだ他の男もいるのだろうに？」

「エヴァ、その言い方はちよいとキツイような・・・まあ俺も言いたいのは同じことだけだ。」

「そんな、私なんて・・・」

「健宏さん、エヴァンジェリンさん！！そんな言い方しなくてもいいじゃないですか！それに健宏さんは先ほどのどかの応援をしようと云ったばかりではないですか！！」

「そうよ！確かにネギはガキだし、デリカシーも無いけど二人してそこまで言わなくてもいいじゃない！」

「・・・そこまで言うてるのは明日菜だけやで？」

「まあ確かにネギ先生はまだ子供ですね。」

健宏とエヴァの言葉に夕映と明日菜が噛み付き、木乃香は明日菜に突っ込む。

刹那は自分の中でも疑問に思っていたので、肯定する。

木乃香と刹那も、決してネギがどうでもいいということではない。

ネギが毎日どれだけ頑張っているかをイヤというほど知っているからだ。

「いいんです、皆さん！健宏さん、エヴァンジェリンさん、私は・・・」

真つ直ぐに二人を見て、のどかは自らの思いを語る。

「確かに普段のネギ先生は、皆の言うように子供っぽくて可愛いくところもあります。」

でも、時々私達よりも年上のような・・・頼りがいのある大人びた表情をするときがあるんです」

明日菜は失礼ながら『そうかな?』と首を捻る。のどかの話は続く。

「それはたぶん、私達にはない目標をネギ先生が持っているからだと思います。」

それを目指して、ひたすら前を見ている・・・私はそんなネギ先生を見ているだけで、満足でした。

それだけで、私は勇気をもらえました」

のどかは言葉を切り、改めて健宏たちを見つめる。

彼女の目には確かな『想い』があった。

「でも、今日は自分の気持ちを伝えてみようと思いました。この気持ちは嘘じゃないから・・・」

のどかは自分がネギに抱いている思いを語り、自分がどれだけネギを想っているかを改めて理解した。

そして自分がどれほど恥ずかしい事を言っているかも痛感し、もう一度真っ赤になって俯いてしまう。

比喻ではなく本当に煙が出ているのがよくわかる。

のどかの想いの独白を聞き終わった健宏は、そんな彼女の頭をポンポンと撫でる。

「そっか、のどかちゃんはそんなにネギのことを想ってんのか。大丈夫!のどかちゃんならきつと出来る!ここまで純粋に、そしてとても大きくきれいな思いを持っているんだ、絶対に大丈夫!この俺が保証する!」

「お前がばーやのことをどれだけ想っているかはよく分かった、それだけ想いが強いのならうまくいくだろうさ。」

「・・・あ、ありがとうございます!おかげで勇気が出ました!私、

もう一度頑張ってみます！」

「よっしゃー！さっきよりもええ顔しとるで！そんならもつかいチャレンジや！」

「は、はい！わ、私、行つて来ます！！！」

「頑張れよ！」

「フン、まあ頑張ることだな。」

「はい！！！」

自分の弱さと悩みや想いの自覚をさせてくれた健宏たちの応援。二人の言葉に後押しされたのどかは走り出す。

「ほ、本屋ちゃん！！行かつて、何所へ？」

「今の会話を聞いてなかったのか？ぼーやの所に決まってるだろ？」

明日菜の叫びに、エヴァが呆れて答える。

その言葉に明日菜を始め、木乃香たちも追いかける。

「ええーっ！？ちょっと、本屋ちゃん！！！」

「おおっ！これはスクープになりそうだね、私も行かなくちゃ！」

「にやはは、あたしも行くー！！！」

「私も行くです！！木乃香！」

「うん！！せっちゃんも行くえ！！！」

「わ、私もですか！健宏さんはどうしますか！？」

「さすがにこれ以上は野暮だろ？後の応援は皆に任せる。このちゃんを頼むよ。」

「は、はい！！！」

明日菜・和美・桜子・夕映・木乃香・刹那が離れ、休憩所には健宏、エヴァ、真名、茶々丸が残る。

「真名ちゃんはいかねーの？」

「ああ。私は皆が残していった団子を片づけるという大事な使命があるからね。」

龍宮真名、甘味が好物である。他人の恋より他人の甘味ということだろう。

そうこうしていると、のどかが引き返し4人の元に戻って来た。

「?どしたの？」

「あ、あの・・・お、お二人も来て下さい！」

そついい、健宏とエヴァの腕を掴み、またも走っていく。

「へ?な、なんで俺達が!？」

「そつだ、何故私たちがお前の告白などに付き合わなければならん!？」

「私はお二人から勇気をもらいました。だから、お二人に最後まで見届けてほしいんです！」

いつもはおとなしいのどかがこういうのだ、二人は顔を見合わせる。

「わかったよ。俺も見届けるぜ、のどかちゃん！」

「はあ、どうせ言っても聞かないのだろう?付き合ってやるよ。」

「!ありがとうございます！」

それから言うまでもなく、無事に告白をすることができたのどか。そしてネギはというと・・・

「えと・・・あう・・・ああ・・・あああ・・・」

「キヤーツ！？ネギーツ！？」

原作通り知恵熱を出してしまうのだった（汗）

第14話 funny days in 京都！（後書き）

「どうもー、今回も約3週間ぶりの投稿となりました、狩野健宏です！今回のゲストはこれのお二人！」

「ハアッハッハッハッハ！久しぶりだな貴様ら！そうだ、今回もゲストはこの私、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルだ！今回はもう一人いるがな！」

「ど、どうもー。宮崎のどこです、どうかよろしくおねがいします。」

「いやー、しかし今回のどかちゃんホンツと頑張ったよねー。」

「そ、そんな・・・これもお二人のおかげです、ほんとーにありがとうございましたー。」

「そうだ、私たちのおかげなのだから！存分に感謝するがいい！」「おいおい・・・あー、気にしないでいいよ。この小説のエヴァは基本壊れキャラって決まってるから。」

「そ、そうなんですかー？」

「ああ。原作ともそうとう違う面が見れるからそこんところ楽しみにしててねー。」

「ちよつと待て！壊すって私のキャラをどうするつもりだ！？」

「それは後のお楽しみだつてさ」

「ふ、ふざけるなー！！」

「ちよ、俺に当たってもしやあない・・・ギイヤー！？」

「あ、あわわわ・・・と、とにかく次回予告ですー！！」

無事にネギへの告白を終えたのどか、だが修学旅行はまだ終わらない！

次回は（おそらく）皆さんお待ちかねのあのイベントだ！
さあ、一体どうなる！？

「ふええ、い、一体どうなるのでしょうか？み、皆さん次回をお楽しみにー！」

「おい、宮崎のどか！私たちを忘れるなー！？」

「あら、のどかちゃんの一人勝ちだなコリヤ、ガクリ・・・」

第15話 バトルロワイヤル！ ラブラブキッス大作戦！（1）（前書き）

のどかに告白されたネギは原作通り悩みまくっていた！

それをあざ笑うが如くついにあのイベントが始まる！

奇想天外、愉快痛快な物語！

それではどうぞ！

第15話 バトルロワイヤル！ ラブラブキッス大作戦！（1）

「どうだ、ネギの様子は？」

健宏の言葉にネギを指差す明日菜。そこにはぼーっとしながら考え事をしていると思いきや、いきなり床を転がり始めたりしている。

「ネギ、さつきからあの調子なのよ・・・」

「アカンわコリャ・・・ちよいと話しつけてくるわ。」

ネギのあまりのパニクリ具合に不憫に思ったのか、健宏が話をしに行く。

「ったく、ちったあ落ち着けやネギ？」

「そ、そんな呑気なこと言ってられませんよ！奥ゆかしいと言われる日本の女性にここ、告白までされてしまった以上は、英国紳士としてそれなりの責任を取らないとー！？で、でもまだ僕10才ですし、子供だから今のお給料では養うこともできないし、一体僕はどうすればー！？」

「・・・お前は何世紀前の外人や、そこまで考えなくていいんだよアホ。」

「あたっ！？」

いい具合にブツ壊れているネギをハリセンでブツ叩き、強制的に落ち着かせる。

そしてしゃがみこみ、ネギと目を合わせて諭す。

「ひとまず俺が言えることわだ、イギリス紳士だの日本の女性だの

ンな考えは全部捨てる。簡単に答えが出るもんじゃねえからな。大体そんなもん必要ねーし。最終的にはお前がどうしたいかだ。散歩にでも行つて頭冷やしてこい。カモ、付いて行ってやってくれ。」

「・・・わかりました。」

「うつす！兄貴、行きやしよう！」

「・・・」

カモが肩に乗り、ネギはフラフラと正面玄関へ向かう。

その光景に明日菜は不安に感じてしまうのも無理はない。

「大丈夫なのかしら、あのガキンチョは」

「わ、私に聞かれましても・・・」

「情けない。ナギならドンと来いだぞ。まあ10才のガキに恋愛なんぞ荷が重いとは思うがな。」

「まあ、そこそこはしゃーねーだろ。俺は温泉にでも入ってくるから後頼むわ。」

「わかりました、ごゆるりと。」

ネギが外へ行つたのを確認した健宏は、温泉に向かう。

それからしばらく・・・

「えー！？ ま、魔法がばれたー！？ しかも、あああの朝倉にー！？」

明日菜の声がロビーに響き渡る。ネギは漆塗りで和風のベンチに座り、半泣きの状態であった。

どうやらネギはあのあとトラックから猫を助けるために魔法を使つたのだが、それを朝倉に目撃されてしまったらしい。

「何でお前はトラブルを背負い込んでくるかなあ・・・」
「あうう、すみませーん・・・」

あまりのことに頭を抱える健宏。その言葉にさらに落ち込むネギ。

「まあ、起こつちまつたことをとやかくいっても仕方がねえ。和美ちゃんに話しつけに行くからおまえも来い。」

「は、はい・・・」

和美を探しに行く健宏たちだがそこに朝倉が現れる。

「お、ネギ先生見ーつけ。健宏さん達も一緒だったんだ。」

「兄貴、もう大丈夫ですぜ。俺っちの説得でブンヤの姉さんは味方になってくれたんだ！しかも、周りからそれとなくフォローしてくれるってよ！」

「ほ、本当ですか!？」

あまりの急展開に驚くネギ。和美はその証拠に先ほど撮った写真を全て差し出す。そこでようやく安心し、涙をこぼしながら喜ぶ。

「そうそう。カモっちが喋っている事に何も思わないってことは、この場にいる全員が関係者ってことでいいのね？」

「わ、私は成り行き上こうなっちゃっただけだからね？」

「最初っからソツチ方面だったのは俺、せつちゃん、エヴァ、茶々丸ちゃんの4人だけだよ。」

「ちょ、健宏さん!？」

「貴様はいきなり何を・・・」

「まあまあ2人とも。ここで言っちゃったほうが後々変な詮索されないだろうからいいんだよ。」

「そ、それはそうですが・・・」
「まったく勝手にしろ・・・」

和美は全員を一瞥するが特に何も言う気配はない。言っていることが真実だと理解したからだろう。

「まっ、今は忙しいからその辺りは次の機会に聞かせてもらってからそれじゃーねー!」

「兄貴、俺はもうちょいブンヤの姉さんと話があるからまた後でなー!」

嵐のように現れ去っていく朝倉と力モ。

ネギ達が黙って・・・というより、呆然としたまま見送る。

「そ、それで?今からどうしようか?」

またもや微妙な雰囲気が出るが、明日菜が振り払うように今後の予定を訊ねる。

「私はパトロールをしてこようかと思えます。結界の強化もありますので。」

「私は部屋でのんびりと過ごすことにするよ。」

「そ、それじゃ僕は・・・って宮崎さんからの告白どーしよー!」?

それぞれの手配を述べるのだが、ネギは何を悩んでいたのかを思い出し、再び床を転げまわる。

「いちいち転がるな、鬱陶しい。神楽坂明日菜、ぼーやを自分の部屋へ放り込んでおけ」

「うわっ」

「おっと・・・それはいいけど、健宏さんはどうするの?」

「俺もせっちゃんと一緒にパトロールを・・・と言いたいところだが、流石に一回戻らんと同じ部屋の奴に怪しまれるからな、部屋に戻るとするよ。んじゃ、また後でな。」

エヴァがネギの襟首を掴んで明日菜方へ放り投げ、見事にキャッチしながら訊く明日菜。

それに答える健宏を皮きりに解散していく皆だった。

「くつくつく・・・どうやら気づかれなかったみたいだね。」

「ああ・・・それじゃあさっそく行動開始だぜ、ブンヤの姉さん。」

「くつくつく・・・これが成功すればアタシ達は百万長者よー!!」

「ひゃーはっはっはっはっは!!」

この二人は一体何を考えているのだろう・・・（もちろん読者の皆様はお気づきだろうが）

夜も更けた11時ごろネギは自室で今もなお悩んでおり、戻ってきた健宏は人生の先輩としてアドバイスをする。そんな頃、明日菜と刹那がパトロールを終えて戻ってきた。

「無事、見回りも終わったよー」

「健宏さん、ネギ先生、特に異常はありません。結界の処置も終わりました」

「そ、そうですか、ありがとうございます」

「せっちゃん、明日菜ちゃん、お疲れさん。」

報告を聞いて労わりの言葉を掛けるネギと健宏。だが、刹那の報告は続く。

「しかし、カモ君が変な魔方陣のようなモノを書いていましたが・・・」

「何？魔方阵？」

あのオコジヨが用意する魔方阵は『仮契約』しか思いつかない。
健宏は何か企んでいるのではないかと考え、腰を上げる。

「しゃーねー、俺も見回りに行ってみるわ。なんか嫌な予感がするし……」

「な、なら僕も。」

「でもネギがこの時間帯に歩き回るのはマズインじゃない？アンタ、一応10才の子供なんだし……」

「あう……」

「そつだぞネギ。先生達に見つかったら面倒だからお前はここにいな。」

ドアノブを掴み顔を後ろに向けながらネギを諭す健宏だが体勢がま
ずかった。なぜなら……

「ネギ先生ー！！そろそろ寝ましたかー！？」

「んぎやつ！？」

ノックもせず扉が開き、しずなが入ってきたからだ。

かなり勢いがついており、健宏は後頭部をぶつけられた上に扉に挟
まれてしまう。

明日菜と刹那はすでに就寝時間は過ぎているので身を隠す。

「生徒達は私達に任せて、ネギ先生は皆と一緒に就寝してください
ね」

「は、はい……」

「部屋に出てはダメですよー」

健宏の事など気にも留めず、一方的にネギへ伝えすぐに去っていく。ネギと明日菜はいつもの彼女とは違う一面を見て呆然としており、刹那は健宏を救出している。

「だ、大丈夫ですか!？」

「だ、大丈夫大丈夫・・・と、とにかくネギはここにいろ。じゃあな。」

「し、しかし僕だけここで寝てるわけには・・・」

「んなこと言われてもなあ・・・」

「それでしたら、これをどうぞネギ先生。」

なおも渋るネギに対し、何かを思い出したように刹那は人型に切つてある紙束を差し出す。

「これは『身代わりの紙型』という物です。これに筆で自分の名前・・・・本名全てを書くと、分身のようなものが出来ます。単純な命令しか受け付けませんが、『自分の代わりに寝ろ』というくらいなら大丈夫です。」

「うわー!! 凄いなー!!」

使い方を聞いてネギは目を輝かせる。そんな彼に健宏は苦笑しながら忠告する。

「それでも疲れていることには変わりねーからな。出来れば休んでおけ。明日は大変だろうしな。」

「は、はい・・・」

『明日は親書を届けに行く為、これ以上は無理をするな』という意味にネギも渋々残る事にする。

「せっちゃん達も温泉に入って休んでくれ。俺も見回りの後に入りたいしな。」

「分かりました。明日菜さん、行きましょつか」

「そうね。敵が現れなかったのに、予想以上に疲れちゃったわ」

彼女らも横島の提案に賛成して温泉へと向かう。

こうして部屋にはネギー一人だけが残された。

その頃、他の生徒達は寝静まっていると思いきやそんなことはない。反対に3-Aの生徒達はテンションが上がっている。その理由は・・・

「それでは、修学旅行特別企画『くちびる争奪戦！』 修学旅行でネギ先生＆健宏さんとラブラブキッス大作戦！！』を始めたいと思います。実況は私、絡繰茶々丸が務めさせていただきます。」

和美主催のイベントの為だ。

カモが提案し、和美が行動に移したのだ。

ルールは・・・

- ・各班から2名ずつ参加し、見回りの教師達に見つからずにネギ。
- ・健宏の唇をゲットする事が目的。
- ・妨害や戦闘も可能（ただし武器は枕のみ）
- ・勝者には豪華商品をプレゼント。
- ・教師に見つかれば玄関前で正座をしなくては行かない（死して屍拾う者なし！）
- ・直接参加しない生徒達は自室で観戦し、トトカルチョで班と個人で誰が勝つかを予想する（賭ける物は食券）

これにはお祭り騒ぎが好きな3-Aが乗らないはずがない。

これがネギの嫌な予感であり、刹那達も感じた異様な気の正体。

参加者は・・・

1班・椎名桜子、釘宮円

2班・古非、長瀬 楓

3班・雪広 あやか、朝倉和美

4班・明石 裕奈、佐々木 まき絵

5班・宮崎のどか、近衛木乃香

6班・エヴァンジェリン・A・K・マクダヴェル、龍宮真名

それはともかく、疑問に思う方も多いだろう。なぜ和美主催のイベントなのに茶々丸が実況を務めているのか。それはイベント開始の約30分前に遡る。

3-A全員にイベントのことを伝えた和美だったが致命的な欠点を思いつく。それは・・・

「ああーっ！！健宏さんも候補に入れたらエヴァンジェリン達も参加しちゃうじゃん！？何やってんのよ私ー！？今から中止にするわけにもいかないし、どうしょー！？」

そういい慌てだす和美。

「ちょ、落ち着けてブンヤの姉さん！」

「これが落ち着いていられるわけないでしょ！？ああーどーしょー！？」

大慌ての和美だが、そこに救いの手が入る。

「あの、それなら私が実況を執り行いましょうか？」

「えー？いいの、茶々丸さん！？」

何と茶々丸が司会に名乗り出たのだ。どうやら6班からはエヴァと真名が出場するのでお払い箱になっただけらしい。

「あ、ありがとー茶々丸さん！この借りはきつと返すからね！そうと決まれば行動開始よー！！」

「お、おい姉さん！？」

茶々丸への感謝もほどほどにエントリーのため走っていく和美。カモが恐る恐る振り向くと茶々丸が無表情でこちらを見つめている。

「な、なんだよ・・・」

「カモさん、今回はどうぞよろしくおねがいします。」

「お、おう。コッチこそよろしくな茶々丸の嬢ちゃん・・・」

カモと茶々丸、異例の人外タッグが結成された瞬間だった。

第15話 バトルロワイヤル！ ラブラブキッズ大作戦！（1）（後書き）

「おう、今回もこの小説を読んでくれてありがとな！今回はこの漢の中の漢、アルベール・カモミールと！」

「麻帆良のパパラッチこと朝倉和美の二人でお送りいたしまーす！」

「いやー、まさか俺っち達が二人で後書きを任されるとはなー。」

「何か今回はラブラブキッズ大作戦の最中だから、健宏さんはあえてださないつもりらしいよ？」

「確かに狩野の旦那にバレると面倒だからなー・・・そこはRに感謝だぜ・・・」

「私はRに文句言いたいけどね。」

「へ？何でだよ？」

「だってさー、あやうく健宏さんがエヴァちゃん達に唇奪われちゃうところだったんだよ！？もう少し気づくのが遅かったら私参加出来なくなってたじゃん！？」

「そういうことかよ・・・」

「そういえば話は変わるけどさ、気づいた時私の代役は超にするつもりだったらしいよ？」

「誰だよ超って？」

「そっか、カモッチは知らないんだっけ。私たちのクラスメートで麻帆良の頭脳って言われてる子だよ。確かに超なら魔法知ってても不思議じゃないよねー？」

「じゃあ何でその超ってのにしなかったんだ？」

「それだと流石にどう話を作ればいいのか判らなかつたから茶々丸ちゃんにしたらしいよ？」

「今さらだけどマジでいいかげんだな・・・」

「ホントだよなー。そんなことより次回予告行ってみよー！」

ついに始まったラブラブキッズ大作戦！

ネギ、そして健宏とキスをするのは一体誰なのか！？
何と意外なあの子のフラグも！？

「ちょっと！意外なあの子って誰よ！？」

「ね、姉さん！潰れる、潰れちゃう！？」

「ああーもうー、何でこうなっちゃうのよー！」

「と、とにかく次回もよろしくな・・・グエエッ、姉さん身が出ち
まうってガクリ・・・」

第16話 バトルロワイヤル！ ラブラブキス大作戦！（2）（前書き）

ついに始まったラブラブキス大作戦！

優勝は誰の手に！？

今回は意外なあの子にフラグが立つ！？

奇想天外、愉快痛快な物語！

それではどうぞ！

第16話 バトルロワイヤル！ ラブラブキッズ大作戦！（2）

「それではこれより、『くちびる争奪戦！！ 修学旅行でネギ先生 & 健宏さんとラブラブキッズ大作戦！！』のスタートです。」

茶々丸の実況を合図にゲームがスタートする。

その頃のネギは悪寒を感じた為、刹那から預かった身代わりの型紙を使い、外へ出てしまっていた。

何枚かミスリ、ゴミ箱に捨てた失敗作も発動しているとは知らずに・
・

「何なんだ、一体？さっきから漂っているこの闘気みたいなのは？」

ホテルの中を見回っている健宏は首をかしげる。修学旅行中なので生徒が色々な事をやっているのは分かるが、それにしてもあまりにも騒然としすぎている。それに闘気のようなものが辺りに漂っている。

しかもホテルのものではない監視カメラが取り付けられている。

流石の健宏もこれが自分とネギを狙った地獄の（天国の？）ゲームだとは夢にも思わないだろう。

「アカン、もう部屋戻る。何かエライ目にあいそうな気がするし・
・」

どうやら動物的本能が危険を察知したらしい。早々に部屋に帰ろうとする。

だが少々遅かった。

「探したぞ、ここにいたのか健宏。」

「本当だよ、全くあまり歩き回らないでほしいね。」

「あ、健宏さん見ーつけ？」

「フフ、年貢の納め時だよ。」

「あん？エヴァと真名ちゃん、桜子ちゃんに和美ちゃん？・・・枕持って何してんだ？」

「どうやら6班と1班、3班が健宏さんに遭遇した模様です。1班の釘宮さんの姿が見えませんがどうしたのでしょうか？そしてマスター、ご健闘をお祈りしています。」

「あらあら、あやかも朝倉さんも頑張ってね。」

「桜子、頑張れー！って円は？」

「どうやら木乃香はまだ来ていないようですね。」

途中でエヴァ・真名ペア、和美・あやかペア、そして何故か一人の桜子に遭遇したからだ。別にこの五人が一緒にいても何もおかしくないのだが、何故か五人とも枕を持っていることに疑問を浮かべる。

「ちょっと朝倉さん、ここで油を売っている場合ではありませんわ！一刻も早くネギ先生を見つけ出さないと・・・ヒイツ！？」

「いいんちょ、悪いけどちょっと黙っててくれない？」

「わ、わかりましたわ・・・」

「お、おーい、何か今スゲー殺気感じたんだけど？」

「まあ気にするな。ところで健宏、少々目をつむってはくれないか？何、時間は取らせん。」

「嫌だ。」

エヴァの問いに対し、きつぱりと断わりを入れる健宏。

「何故断る？別にいいではないか！」

「ぜってえー嫌だ！言う通りにしたら骨までしゃぶりつくされそうだもん！？」

「失敬な！少々貴様のXXXXXを頂くだけだ！」

「は？俺の何だつて？」

エヴァが何を言ったのかが分からず近づく健宏。だがそれが命取りだった。

「**今だ！**」

すかさずエヴァが飛びかかる。

「そうはさせるか!」

「んなーっ！？」

訂正、飛びかかるうとしたエヴァだったが、真名、和美、桜子の三人に叩き落とされる。

「**抜け駆けは許さないよ!**」

「にやははー、そうだよエヴァちゃん♪」

「私たちを甘く見過ぎではないかい？」

「クツ、貴様らあーっ！！」

ここで互いに互いをつぶし合う醜い戦いが始まる。

「な、何や何や！？どない何つとんねん！？」

あまりの展開に目を白黒させながらも、これはチャンスだと思い逃げようとする健宏。だが……

「どこに行くのかなー、健宏さんは？」

「にやははー、逃がさないよー？」

「観念するんだね？」

「そういうことだ。」

「いつ、嫌ー！？」

辺りに健宏の絶叫が響き渡る。もうダメかと思われた健宏だったがここに救いの手が入る。

「コラーツ、何をしているお前ら！？」

見回りをしていた新田が現れたのだ。

「新田先生いいところに！？おねがい助けてHELP MEE！？」

新田に助けを求める健宏。だが・・・

「悪いが少々眠っててもらうよ？」

「はらほろひれ〜？」

真名が撃った麻醉弾で昏倒してしまう。

「よし、いいぞ真名！」

「これで邪魔者はいなくなった・・・」

「後は健宏さんを・・・」

「ってアレ？健宏さんは？」

新田を相手にしているうちに忽然と健宏が消えてしまっていた。

「どこに行ったんだアイツは！？」

「まだ近くにいるはずだ、探すぞ！」

「幸い道は4つある、四手に分かれて探すぞ！誰が見つけても恨み

つこなしだからな！」

「にやははー、分かったー」

「OK、それじゃ行くよ！」

「た、助かりましたわ・・・ってこうしている場合ではありませんわ！一刻も早くネギ先生のもとへ！」

和美の声を合図に五人に分かれて健宏を探しに行く。

「・・・うわあ、何か見てて気の毒になって来たよ・・・」

「あらあら、大丈夫かしらあやかは？」

「おや？健宏さんはどこにいったのでしょうか？」

「どうやら健宏さんは騒ぎに乗じて逃げたようです。おや、アレは・・・？」

テレビを見ていた生徒たちは先ほど乱闘のあった場所を写しているカメラの映像を信じられない面持ちで見る。突然、健宏が天井から飛び降り姿を見せたのだ。

「どうやら健宏さんは先ほどの混乱に乗じて天井に張り付いていた模様です。」

「ど、どうやってあそこまで飛び上がったんだろ？」

「まさかあんなところに隠れていただなんて・・・」

「健宏さんってル〇ンみたい・・・」

「め、滅茶苦茶な人です・・・」

いろんな意味で普通でない健宏にテレビを見ていた生徒たちは呆然としていた。

「ふう、まさか48ある奥義のうち『壁を這うことやモリのごとし』を使う羽目になるとわ・・・」

女子中学生恐るべし・・・」

・・・何ともかつこ悪い奥義だがそこは気にしないでおう。

「しかし、マジでヤバかったな・・・てか何だったんだ一体？」

逃げ出し、冷静になった健宏はもう一度考えてみる。しかしやはりわからない。

「まあいい。さっさと部屋戻ろ、それが一番だ。」

そういつて駆け出す健宏だがここで刹那と明日菜に遭遇する。

「あれ、何やってんの健宏さん？」

「シェーッ!？」

「な、何ですか一体!？」

二人に遭遇し、また襲われるのかと慌てて逃げ出そうとする。だが刹那たちにその気がないことが分かると足を止める。

「ああー助かった、二人は大丈夫みたいだな・・・」

「何かあったんですか？」

「そりゃこつちが聞きたいわ!？エヴァ達がいきなり襲って来たんやで!？どうなつとるんや!？」

何事かと尋ねる刹那に泡を吹きながら食ってかかる健宏。

「ちょ!？わ、私に言われても!？」

「そ、そやかてなー!？」

「ひ、ひゃあああああーっ!？」

「何だ今の悲鳴!?」

「あれは・・・本屋ちゃん!?」

「あちらの部屋からです!」

押し問答をしていた三人だが突如聞こえてきた悲鳴に我に返る。慌てて駆けつけると、そこには2班と4班、5班、そしてネギの部屋にはのどかが目を回して倒れていた。

「の、のどかちゃん!? い、一体何があっただんだ!?」

「うーん・・・ネギ先生が5人・・・」

「・・・はい?」

「あらあら5班はキスに失敗したみたいね」

「5班・宮崎のどか選手がネギ先生のお部屋に突入いたしましたけど、どうやらキスに失敗した模様です。」

ネギ先生は逃走した模様。各オッズは現在当初と変動していません。

「じょ・・・嬢ちゃん、嬢ちゃんってば!」

「何でしょう?」

「何か・・・俺っちの目の錯覚かなあ・・・ネギの兄貴が5人に・・・」

「ん?・・・安心して下さい、カモさん。」

「ハハ、そうだよなあ。ネギの兄貴が6人もいるわけ・・・」

「この映像は本物です、錯覚ではないのでご安心ください。」

「ってそっちかよ!? そしてやつば錯覚じゃねーのか!?」

「ご安心ください、私に妙案があります。」

「本当か!? なら頼むぜ嬢ちゃん!!」

「それではさっそく・・・ご鑑賞中の皆様と参加している皆様にお知らせです。これは私がサプライズのため急遽用意させていただきました、ネギ先生の偽物です。どうかお楽しみを。」

「6人に対しての策じゃねーのかよ!?」

カモと茶々丸、何気にいい（漫才）コンビである。

「まったく何でもこうもトラブルが舞い込んでくるのよ！」

「す、すみません私のせいで・・・」

「まあまあ、せつちゃんだけのせいじゃないって・・・」

愚痴をこぼしながら偽ネギの回収に精を出す健宏たち。

ちなみに型紙が暴走したのは、失敗したのを破り捨てなかったのが原因である。これは刹那がそれをネギに伝え忘れた為起こったハプニングだった。

「よっしゃ、偽ネギ発見って・・・」

「あちゃあ・・・」

「ど、どうしましょう・・・」

三人が頭を抱えるのも無理はない。2班と4班、そしてあやかの人々が偽ネギと対峙していたからだ。

「じゃあない、こうなったら・・・」

「「こうなったら？」」

「無視しよう。」

あまりの一言にズッこける刹那と明日菜。

「ちょ、何言ってるのよーっ!？」

「そうですよ!このままでは何が起きるか!？」

「ンなこと言っただってどうしろと?監視カメラから察するに皆見てんだぞ?どうしようも出来ねーだろ?」

「「そ、それは・・・」」

「ねえ何やってんの三人とも？」

会話を続ける三人だがそこに円が近寄ってくる。どうやら最初から桜子と別れ、二手に分かれて健宏を探していたらしい。

「あり？確か君は・・・くぎみーちゃん？一体皆何してんの？」

「くぎみーって言うな！！・・・実はね・・・」

三人は今起こっている出来事を聞き唖然とする。

「ったくなにやってんのよ和美ちゃん・・・ということはくぎみーちゃんもネギを！？」

「だからくぎみーって言うな！！私は桜子のサポートで参加しただけよ！」

そうこう言ってたのがまずかったのだろう、四人とも背後から迫って来たもう一人の偽ネギに気づけなかったのは。二人と対面していたために偽ネギが見えた明日菜と刹那を覗き偽ネギに押し倒されていた。

咄嗟に刹那が夕風で偽ネギを消しさる。

「だ、大丈夫ですか二人とも・・・」

二人の方を見て言った刹那だがいきなり固まりだす。同じくそれを見た明日菜も固まりだす。

まあ無理もない。咄嗟に健宏が円をかばい下敷きになったため、円が健宏を押し倒した形になり、なおかつ二人の唇が重なる・・・早い話がキスをしている状況になったのだ。

いきなり円が飛びあがる。

「あああああ、あの、たたたた健宏さん・・・」

健宏は何が起こったか判らず呆然としている。

「う、ごめんなさいー!!」

円は真っ赤になると、チーターもびつくりのスピードで逃げ出して行った。

「た、健宏さん、だ、大丈夫?・・・」

「あ、ああ・・・」

明日菜の問いに答える健宏だが、いきなり真っ青になる。

どうしたのかと思い明日菜も健宏の向いている方を見ると、顔をひきつらせる。

木乃香が見た感じはイイ笑顔なのだが明らかにヤバイオーラを醸し出して立っていたからだ。

「あ、あの、このちゃん?」

「何やのタケちゃん?」

意を決して木乃香に話しかけてみるが、纏っているオーラが倍どころか二乗になったので慌てて口を紡ぐ。何とか逃げ出そうとする健宏だが、ヤバイオーラを強くなり動けなくなる。

このままでは殺られる!そう思った健宏は明日菜に助けを求める。
だが・・・

「わ、私用事を思い出したから先帰るねー!!」

「イーヤー、一人にせんといてー!？」

巻き込まれるのはゴメンだと早々に部屋に逃げ帰ってしまった。

「タケちゃん？」

「sir yes sir!？」

木乃香の醸し出すオーラにビビり、軍人口調になる健宏。これから何をされるのかと恐怖に震える健宏に木乃香が近づく。

「ヒイツ!？こ、殺さないでー!？」

「動いたらアカンでー？」

「sir yes sir!？」

命令(？)通りに動かない健宏に木乃香がゆっくりとしゃがみこみキスをする。

これと同時に、のどかが本物のネギとキスをしていた。

「ゲーム終了。これにより宮崎のどか選手がネギ先生とのキスに成功いたしました。健宏さんとは本命の近衛木乃香選手がキスに成功よって両者が優勝となります。配当については後ほどお知らせを、受け渡しは明日の朝食後、ロビーにて行いますのでご了承ください。」

茶々丸は実況を終えると、全ての監視カメラの映像を切り、片づけに入った。

その頃の健宏は・・・

「俺、くぎみーちゃんとこのちゃんの二人とキスしてもうた、どな

いしょ・・・」

絶賛お悩み中だった。だが考えている途中であることに気づく。

「・・・あり？　そういやいつのまにかせつちゃんいなくなってたな。どこ行ったんだ？」

「よくやったのですのどか、木乃香！！」

「いやー、お姉さんも興奮しちゃったよー！！」

「えへへー、ネギ先生？」

「ありがとなー皆。」

一転してここは5班の部屋である。現在はキスを終えたのどかと木乃香の祝賀会を行っていた。

「健宏さんが釘宮さんだけではなくお嬢様とキスを・・・」

円と健宏のキスシーンを見て脱兎のごとく逃げ出した刹那だったが、その後の放送を聞き、木乃香が健宏とキスをしたことを知る。

「私も健宏さんとキスしたかったな・・・って私は何を考えているんだー！？」

いい感じに壊れている刹那だった。

「惜しかったねー、桜子。」

「うにゃー、残念だったにゃー。」

「ホント惜しかったですー。」

「そうだよねー。」

うってかわってここは1班の部屋である。

「ところでさあ、円は一体どうしたの？さっきいきなり戻って来たと思ったら布団被って寝ちゃうし。」

「さあ、私達二手に分かれて探してたから何があつたか知らないんだよねー。」

「（どうしよどうしよ健宏さんとキスしちゃった私ファーストキスだったのにじゃなくて健宏さんを好きなのは桜子なのに何やってんのよ私のバカァー！？）」

ちなみに円は寝てはおらず、絶賛後悔中だった。

「クッ、キスをしたのは結局近衛木乃香か・・・」

「当然と言えば当然なのだろうけど意外な伏線だったね・・・」

またも変わり、ここは6班の部屋である。

「全く・・・茶々丸がナビゲートをしていれば結果は・・・おい、茶々丸お前は今までどこにいた！？」

「朝倉さんの代わりに実況をしていましたか？」

「何！？朝倉和美が参加していたので誰が実況をしているのかと思っただけがお前だったのか！？」

「はい。マスターが龍宮さんと出場してしまい、お払い箱になってしまった私は朝倉さんの代わりに実況を行っていましたが何か？」

「ちゃ、茶々丸？どうしたというのだ、何かおかしいぞ？」

「私はお払い箱になってしまったので朝倉さんのお手伝いをしていただけですが何か問題でも？」

「茶々丸が反抗期にー！？私が悪かった、だから機嫌を直してくれ

「!？」

「（寂しかったんだな茶々丸・・・）」

（チャラララ、チャツチャツチャー♪）

茶々丸は仲間外れになってしまったことで反抗期を覚えた！

「どこのド○クエだー!!」

第16話 バトルロワイヤル！ ラブラブキス大作戦！（2）（後書き）

「おう、今回もこの小説を読んでくれてありがとな！今回は前回に引き続き、漢の中の漢、アルベール・カモミールと！」

「前回と今回でラブラブキス大作戦の実況を務めさせていただきました、絡繰茶々丸の二人でお送りさせて頂きます。」

「しかし、また俺っちが、それも連続で後書きを任されるとはなー！」

「はい、私は連続ではありませんが2回目です。マスターは計5回も後書きに出演しています。」

「もうそんなに出てんのかよエヴァンジェリンは・・・」

「はい。何でもマスターはキャラを壊しやすいので書きやすいのだそうです。」

「そりやまたスゲー理由だな・・・」

「話は変わりますが、今回の見どころは何と言ってもこのラブラブキス大作戦の結果についてです。」

「そりやこれがなかったらこの話成り立たねーからな。」

「最終的には木乃香さんがキスをしましたが、途中では桜咲さんにするかどうか迷ったらしいですね。最初にキスをした釘宮さんでは当初、椎名さんの目の前で小説の中にもあった釘宮さんとの事故キスが行われる予定だったそうです。」

「へえー、そうだったのか。」

「後、木乃香さんのキスですがその後にはマスター、龍宮さん、朝倉さん、椎名さんと立て続けにキスをする予定だったのですが、流石に話の流れが思いつかなかったようですね。」

「土壇場で書くからそうなるんだよ・・・そういえば、今回出てきた新しい設定みたいなのがあったよな？」

「ああ、48の奥義のことですね。」

「そうそうソレソレ！」

「実際は48もあるわけではなく、単純に思いついた数字がそれだけだったという事らしいですね。48というのには元ネタがあるそうですし。」

「元ネタ？何だよ一体？」

「R曰く、48の殺人技と48の関節技から取ったそうです。」

「早い話がキン○マンかよ・・・」

「そしてもう一つ、Rの個人的な目玉としては私とカモさんのコンビだったそうです。」

「そうだったのか！？」

「はい。元々カモさんと私のコンビは超を出すのが難しかったのでそうしただけだったようですが、コレが意外と筆が進んでいたようです。」

「マジか・・・そういえばよお嬢ちゃん、最後の最後にアンタが反抗期っぽくなったのは何でだ？」

「何でも健宏さんの影響を受けたという裏設定を、今し方思いついたそうだからです。」

「そうなのか・・・」

「何度もスミマセンがもう一つだけ。私とカモさんのコンビは今回が最初で最後らしいです。」

「筆が乗ってたんじゃないのかよ！？」

「なんでもカモさんとのコンビはもう決まっているらしいのでそちらの方で書くらしいです。」

「一体誰なんだ、スッゲー不安だぞ・・・」

「さて、長らくお待たせしましたが次回予告です。」

無事(?)にラブラブキッス大作戦が終わり、一息つく皆。

だがまだ重要な使命が残っている！

呪術協会に親書を届ける健宏達の前に立ちふさがる刺客達！

果たして健宏たちは無事に親書を届けることができるのか！？

「やっと本題に戻って来たな。後は親書を届けりゃ万々歳だぜ！」

「はい。どうかご武運をお祈りしています。」

「それじゃあ、奇想天外、愉快痛快な物語、これからも見てくれよ！」

「皆様方、どうか感想もおねがい致します。Rの励みになりますので。それでは次回お会いいたしましょう。ではごきげんよう。」

第17話 3rdミッション！親書お届け大作戦！（1）（前書き）

無事（？）に終わったラブラブキッス大作戦、ネギたちは今回の一番重要な任務に取り掛かる。

ネギ達は親書を無事に本山へと届けることが出来るのだろうか！？

奇想天外、愉快痛快な物語！

今回はあの作品のパロが！？

それではどうぞ！

第17話 3rdミッション！親書お届け大作戦！（1）

「これが優勝者に送られる豪華商品です、どうかお受け取りください。」

朝食後、茶々丸から昨日の放送通りのどかと木乃香には商品の仮契^{バクテイ}約カードのコピー（本人達には和美特製のカードだと話してある）が手渡された。

「これが豪華賞品なんだ、いいなー！」

「ありがとーな茶々丸さん、これ一生の宝ものにするなー！」

「あ、ありがとございますー。」

二人とも想い人との初キスの品だけあつて恥ずかしくも嬉しそうだ。
^{ファースト}

三日目の完全自由行動日の準備のため、部屋に戻った皆。ネギとの思ひ出の品のためトリップしてたのどかが少し遅れながらも部屋に戻っていた時それは聞こえた。

「ちよつとどーするのよネギ！本屋ちゃんとのカードを作っちゃうなんて！」

「えう！？そついわれましても！？」

「まあまあ姐さん。」

「そーだよ明日菜。もーかつたつてことであーじゃん。それにヤツたのは私達でネギ君が悪いんじゃないからあんま叱らないでよ。」

「そ、そりゃそうだけど・・・って主犯のアンタ達が言うなー！！」

「おい、カモ。お前どういふつもりだ？」

そこにはネギ・明日菜・刹那・カモ・和美・健宏・エヴァ・茶々丸

の面々が揃っていた。

明日菜からネギへの説教が終わったところで健宏がドスの利いた声で力モに詰問する。

以前茶々丸に攻撃した時のような声を聞き、力モがびくつく。

「だ、旦那……」

「健宏さん？……」

言うまでもなく健宏は怒っていた、それもあの上以上に。健宏から感じるとてつもない怒りに和美も困惑を隠せない。

「お前、なんでのだかちゃんの仮契約カードなんぞ作った？まあお前のことだから金目当てなんだろうが。なにより和美ちゃんも一枚噛んでるってことはお前、ちゃんと事情を説明してねーな？」

「あ、兄貴の現状はちゃんと話しましたさあ！」

「魔法がバラされるっていう意味の重み、その罰。一般人がこちら側に巻き込まれる危険さ……は？」

「……！」

「話してなかったのか……俺がちゃんと話しとくべきだったぜ……」

「健宏さん……」

血の気が引く力モと頭を抱える健宏。

「えーと、話の途中悪いんだけどさ、どういうことなの？」

「……そうだな、他人事じゃないんだ、和美ちゃんにも話しとかないとな。」

健宏は和美魔法使いが一般人への魔法がバレた時の手段と魔法使いへの処分を話した。

最初は興味深そうに聞いていた和美だったが、話が進むにつれ表情が真剣身を帯びてくる。

「・・・それってマジなの？」

「ああ。ネギはまだ『魔法使い見習い』だ。温泉で和美ちゃんが脅迫している時、もし魔法の存在を携帯で広げていたら・・・」

「広げていたら?・・・」

ゴクリとつばを飲み込む和美に、答えたのはエヴァだった。

「ぼーやのみならず、健宏も責任を取ってオコジヨにされ強制送還。直接関係は無くてもな。」

「ぼーやは年齢と『見習い』ということを考慮され、オコジヨにされる期間はそれほど長くはないだろう。だが、それだけではない。修行は失敗とされ、失格の烙印を押されることは間違いない。」

次の機会というモノがあればいいな、ぼーや？」

「あうう・・・」

「そんなに虐めてやるなって、ネギは猫を救おうとしたただけなんだから。それに関しちや俺は良くやったと思ってるよ。」

「健宏さん。」

「フン、お人よしもほどが過ぎるぞ・・・先ほど言った通り、健宏は無関係でもぼーやが一般人に魔法を知られるのを止めることができなかったということとで責任を負わされる。しかも、今の世は情報伝わるのは早いから。上の連中が上手くもみ消しても、罰はかなり重いだろう。おそらく原因の地である麻帆良に来る事は出来ないだろう。」

「・・・っ!!」「」「」

健宏への罪の重さに明日菜・木乃香・刹那・和美は絶句する。
ネギも自分のせいで健宏が巻き添えを食うことになるとは思わなか

った。

「エヴァ、話がズレてきてるぞ。俺が言いたいのは、魔法というモノは和美ちゃんが考えている以上に深くて重いという事。和美ちゃん・・・記者魂などの大義名分で、むやみに暴こうとするなよ。自分はもちろんのこと、周りにも影響を及ぼす」

「・・・・・・・・」

和美は黙っているしかなかった。

彼女も当初の明日菜同様、気軽に考えていた。

だからこそ、自分の野望の為に魔法を使うことを強要したのだ。よく考えればちよつとしたキツカケで魔法を知ることが出来るなら、すでに知れ渡っていても不思議ではない。さらに健宏の指摘は続く。

「それに『面白そう』だから、のどかちゃんを『こちら側』に巻き込んだろ？まあ、そこはカモが元凶だが」

「ま、巻き込むって！？そんなつもりじゃ！！・・・」

「実際そうだろうが。軽いゲーム感覚で何も考えず・・・いや、『黙っていれば大丈夫』などと考えていたんじゃないか？さらに『賭けで儲かって上々』って、思っていただろう？」

「・・・・・・・・」

「答えられないところを見ると凶星らしいな。カモ、お前まさかコピーカードは・・・」

「・・・渡しちまった。姐さんのコピーと一緒に作って、茶々嬢ちゃん経由で・・・」

「何？なんでまた茶々丸ちゃんを巻き込んで・・・まあそれは後で聞くとしよう。」

お前、のどかちゃんを戦力に加える算段だったろ？」

「！？だ、ダメだよカモ君！！のどかさんは一般人なんだよ！？」

「重ね重ね済まねえ・・・」

「それに問題はもう一つある。お前、このちゃんにもカードを渡したんじゃないだろうな？」

「！？本当ですかカモさん！！」

「・・・すまねえ・・・」

「・・・」

健宏の言葉に刹那は顔色を変える。間違いであってほしい・・・しかし現実是非常だった。健宏も天を仰ぐ。

「・・・起こつちまつたことをどうこう言っても仕方がねえ。それにこの後は本山に親書を届けなくちゃならねえんだ。ネギ、お前も早く用意して来い。生徒達に誘われる前にここを出なくちゃならないんだからな。」

「は、はい・・・」

心なしか顔色を悪くしながらネギは去って行った。生真面目なネギのことだ、自分の使い魔が仕出かした事を自分のせいだと思っているのだろう。カモもネギにそんなことを思わせたのが心苦しいのだろう、目に見えて落ち込んでいる。

さらに事態は悪い方向に進む。平常心ではなかったのだろう、解散したメンバーで誰ひとりどこかに気づくことは無かったのだから。

カモがコピーカードの説明をしている所や、明日菜が実際に召還したアーティファクトを見てしまう。

のどかはその場から立ち去った後、コピーカードで自らもアーティファクトを呼び出してしまう。

・ 健宏の心配を嘲笑うかのように、のどかは巻き込まれつつあった・

ところ変わって健宏・エヴァ・茶々丸トリオ。

「さてと・・・何で茶々丸ちゃんはあることをしたんだ？一般人を巻き込むのはまずいつてわかってたろ？」

「・・・はい。」

「ならなんでまた・・・」

「そうすれば昨日のイベントが中止されてしまい、マスターが悲しむと思ったので。」

「茶々丸、お前・・・」

茶々丸の言葉に胸を打たれるエヴァ。

「茶々丸・・・昨日は私が悪かった、お前を仲間外れにしてしまつて！・・・お前は私の最高の従者だ・・・」

「マスター！・・・」

「茶々丸！・・・」

ひつしと抱き合う二人。

「・・・何か無理やり終わらせようとしてねーか？」

蚊帳の外にされてしまい、呟く健宏だった。

「それはともかく、私達も準備をしてくるが、どう待ち合わせをする？ぼーやとは別行動なのか？」

ネギは親書、健宏は木乃香の護衛。それぞれ目的が違う。

「まあね。待ち合わせはせつちゃんにメールで知らせるよ。」

「なら、私達は正門から少し離れた所で待っている。そのままお前と行動を共にする。待たせるなよ？」

「仰せのままに、お姫様つと。」

エヴァ達も準備の為にひとまず分かれる。

ネギは私服に着替えて裏門から、健宏は忍者も顔負けの隠形術で正門から抜け出す。

ネギはともかく、健宏はこの手の方法は得意中の得意なので苦労はしなかった。

本当にすぐ近くで待っていた、私服に着替えたエヴァと制服のままの茶々丸と合流。

そこでネギ（カモモ）は先にその場から離れ、横島は刹那へメールを送る。

思ったより時間が過ぎた頃に返信があり、さらに書かれている言葉使いや内容が刹那にしてはやけに軽く、少し疑問を感じた。アドレスは刹那からに間違いはない。

気のせいかと、待たされていて不機嫌なエヴァを茶々丸と一緒に宥めながら指定された場所に向かう。

ネギが明日菜と合流予定地である同じ橋へと・・・

「なんでこんなにおんねん・・・」

「じ、実は・・・」

ネギも合流場所で明日菜のみならず、5班全員で現れたときは驚いたものだ。

明日菜は一人で向かおうとしたのだが、ハルナに捕まってしまう。そして今日一日の計画を立てていない5班全員で同行する事になった。

しかしハルナはそれだけでは留まらない。

『ちよつと待つてね』実はまだ合流する人がいるから』

そして遅れて、さきほど分かれたばかりの健宏達が現れたのだ。

ネギはさらに驚き、健宏はありえない現状にズシャーと地面を滑る。エヴァは微かに顔を顰めるが何も言わない。

茶々丸は言わずもがな。

「申し訳ありません。私が・・・」

「・・・まあなっちまったモンは仕方がねえ。途中で適当に撒きやあいいさ、気にするなつて。」

健宏が正門でメールを送った時、刹那は5班の部屋で明日菜たちと一緒にいた。

そこでメールの着信音が鳴り、確認しているのを木乃香が気付いた。彼女が『タケちゃん?』と訊いたのを、さらにハルナが聞きつけてしまった。

メールには『??橋の上で合流』としか書いていなかったのだ、魔法関係はハルナ達にはバレていない。

『どうせなら健宏さんも誘おう!!』と提案し、ハルナが代わりにメールを打ったのだ。

それで健宏はメールに違和感を感じたのだ。

「そう上手くいくか? 早乙女ハルナは宮崎のどこを応援しているかな。お節介をするだろう。」

それに・・・」

「エヴァちゃん?」

「いや、なんでもない。そろそろしびれをきらす事だろう。ひとまず、健宏の意見に従うしかないだろう。魔法で眠らせるわけにもい

かんし。」

「エ、エヴァンジェリンさん・・・そ、そんな強引なことは」

健宏の意見を採用し、隙を見て逃げ出す方向に決まる。

合流すると、ハルナはネギと明日菜の仲を確認する。

『付き合っているの?』と訊かれ、明日菜は慌てて否定するという一幕があった。

そんな中、エヴァと健宏は気付いていた。

夕映がネギと健宏へ探るような視線を向けている事を・・・

この後も、中々タイミングがなくて逃げられない健宏たち。

ハルナがゲーセンを見つけて、記念にプリクラを撮ろうと提案。

図書館島探索部のメンバーだったり、木乃香と刹那のツーショットとパターンは様々。

中には・・・

のどかと明日菜が、それぞれネギとツーショット。

木乃香と刹那も健宏と3人で撮ったり、それぞれツーショットなど。エヴァと茶々丸も木乃香たち同様、健宏と3人だったりツーショットも。

さらには、ハルナのお節介により夕映と健宏のツーショット。もちろん自分もツーショットを撮っていた。

「おんやぁー微妙にラブ臭が・・・」

「き、気のせいでしょう」

「私は別に夕映とは言っていないけどなー?」

「私も自分だとは言っていないませんが?」

ハルナが独り言のように呟くが、夕映は否定する。

彼女も墓穴を掘るような真似はしないが、顔は微妙に赤い。

反応ありと見てハルナはさらに仕掛ける。

「ふーん・・・じゃあなんで今顔が赤いのかなー？」

「これは暑いからです。そういうハルナも微妙にラブ臭なるものがあるような気がしますよ。健宏さんとツーショットを撮ったことから言えるです。」

「へ、私？ツーショットは別に意味は無かったんだけどねえ？」

反撃の場と思い先ほどのことを追求する夕映だが、当の本人は何故そんなことを言うのかとキョトンとしている。

そんなこんなで話をどう逸らすべきか悩んでいた夕映だがとあるゲーム機が目につく。

「パル！！あそこに目的のゲーム機がありますよ！！勝利して関西限定レアカードを全てゲットです！！」

「そ、そうだった！！よし覚悟しなさいよ不○遊星、九十九○馬！！」

見事に釣られてしまうハルナは、一目散にデッキを取り出しゲーム機へ向かう。

ちなみにそのゲームとは皆さんご存じだろう遊○王だ。

単純な彼女に感謝しつつ、夕映は一息つく。

「（行ってくれましたか・・・まさか、パルまでバレていたとは・・・私が健宏さんたちを見ていた理由は一つだけです）」

今もポケットに紙型が入っている。それがどうしても気になるのだ。二セモノを用意していたネギはもちろん、健宏も関係あると自分の勘が告げていた。

それは自分なりに築いてきた判断力か、はたまた女の勘か・・・

「（でも、今はのどかの応援です。今は忘れる事にしましょう。それに・・・）」

ハルナが必死にプレイしているゲームを興味深そうに見ているネギ。彼の後ろで珍しい本を抱え、ネギの近くにいることが嬉しそうなのか。

少し離れて苦笑している明日菜。

エヴァに強請られ、UFOキャッチャーをプレイしている健宏。

アームの動きを目で追い一喜一憂する木乃香とエヴァ、応援する刹那と茶々丸。

「（無理に訊いて、今の雰囲気壊す事もないです）」

夕映もネギに近づきデッキを貸してプレイさせる。

ネギは飲み込みも早く、とても初心者とは思えないくらいだった。そんな中、学ランを着た一人の少年が勝負を申し込んできた。

「となり、入ってええか？」

「あつ・・・うん、いいよ」

勝負を申し込んで来ただけあって、デ○エルは白熱するがネギが負けてしまう。

イスから立ち上がり、ネギへニヤツと笑う少年。その笑顔に嘲笑はない。

「なかなかやるなあ、アンタ。でも、魔法使いとしてはまだまだやけど」

「えっ・・・うん、どうも・・・」

「ほなな。ネギ・スプリングフィールド君」

「えっ？ど、どうして僕の名前を！？」

『魔法使い』の言葉にも多少動揺があったが、自分の名前を言い当てた事には驚いてしまう。
そのタネは簡単だった。

「どうしてってプレイ前に自分の名前を入れたやる？違うんか？」
「あっ・・・そっか」

少年が画面を指差す。

『GAME OVER』と書かれている下に『ネギ・スプリングフィールド』と出ていた。
納得するネギを尻目に少年は立ち去る。
その時、余所見をしていたのでどかとぶつかってしまったアクシデントがあったが・・・

「それじゃ、今度はこのパル様がお手本を見せてあげようかな」
「お相手するです」

「よーし！！関西限定レアカード、ゲットするぞー！！麻帆良の決
○王と呼ばれた私の実力、見せてあげるわ！！」
「おー、です。」

盛り上がるハルナと夕映。

その隙に抜け出そうとカモが小声で言い、ネギと明日菜は頷く。
出る前に健宏たちに一声かける。

「それじゃ・・・刹那さん、そっちはお願いね」
「ああ、任せときな。二人とも気をつけろよ。」

ようやく親書を届けるといふ仕事につくネギと明日菜。

「ネギ先生と明日菜さん、どこ行くんだろー？今朝話してた『戦闘』をするつもりなら止めないと・・・」

その後ろから、のどかが追いかけていることを知らずに。

そして、ゲームセンターから出て行った少年は仲間達と合流する。

「やつぱ、名字は『スプリングフィールド』やて」

「やはり・・・『サウザント・マスター』の息子やったか。それやったら相手に不足はないなあ」

その中に天ヶ崎千草と月詠の姿や、彼女らを救出した怪物。さらに無表情の一人の少年がいた。

「ふふ・・・坊や達、一昨日の力はキッチリ返させてもらっさかい、覚悟しいや・・・」

こうしてそれぞれの準備は終わった。

再び彼らが激突するまで、もう僅か・・・

第17話 3rdミッション！親書お届け大作戦！（1）（後書き）

「どうもー、2話ぶりの登場となりました、主人公こと狩野健宏です！今回のゲストはこれの二人！」

「ハアッハッハッハッハ！久しぶりだな貴様ら！今回もゲストはこの私、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだ！そしてもう一人は！」

「前回に引き続き後書きを務めさせていただくことになりました、絡繰茶々丸です。今回もどうかよろしくおねがい致します。」

「いやー、今回でやっと本当の目的までこぎ着けたなー。いやホント長かった……」

「何をジジくさいことを……そういえば今回はあの作品のパロだったな。」

「ああ遊○王ね。それがどうかしたんか？」

「いや、単純に何故なのかと思ってな。」

「まあぶっちゃけた話、Rが今嵌まつてるからだネ。」

「それはものすごい私事だな……」

「巷にはデ○エルタ○ミナルつてのがあるらしいけど小説の中のやつとは全く関係無いからな。大体Rもやったことないし。」

「早い話が適当なわけか。」

「……まあな。」

「しかしRは遊○王ネタで番外編を作りたいと思っているらしいですね。」

「そうなのか？」

「はい。まあ相当先の話のようですが。」

「まあ期待せずに待つとするか……」

「さて今回のネタ話も済んだところで次回予告行ってみよう！」

ネギ達と二手に分かれた健宏たち。そこに刺客の魔の手が忍び寄る！

健宏は無事に木乃香を守りとおせるのか！？

「ほお、少しはまともな小説になって来たではないか。」

「『今まではまともじゃない』的な言い方するなよ・・・」

「マスターそれは少々失礼かと。」

「な、茶々丸まで！？」

「今回はここまで！それでは皆さん次回をお楽しみにー！！」

「どうか次回もよろしくおねがいます。」

「二人して私を無視するなー！！」

第18話 3rdミッション！親書お届け大作戦！（2）（前書き）

ネギ達と別れた健宏一行、果たして健宏たちは木乃香を護りきることが出来るのか！？

今回はいろんなパロが盛りたくさん、突っ込みは無しの方でネ（泣）

それではどうぞ！

第18話 3rdミッション！親書お届け大作戦！（2）

「せ、せつちゃん、タケちゃんどこ行くん？足速いよー。」

「ああつ、すつ、すいませんお嬢様。」

「悪いなこのちゃん、もうしばらくの間我慢しててくれ。」

ネギ達と別れてから数十分後、刺客が襲ってきたことを知った健宏たちはゲームセンターを離れ、何処へともなく走っていた。

しかも木乃香は気付いていないが、刹那へ度々千本を投げられ攻撃されている。

刹那も対応しているが、いつまでもこうしているワケにはいかない。ネギと明日菜は合流したのどかの助けによって、刺客を退けたことを式神を通して知っている。

それを健宏へ伝える暇はなかったが、幼馴染だけあってアイコンタクトで伝えていた。

刹那は健宏へ視線を向ける。彼は『ある荷物を抱えて』走っていた。

「お、降ろしてください！わ、私は自分で走れるです！」

「ハア、ハア・・・い、いいじゃん、夕映。し、正直言ってかなりしんどいよ。」

「それなら代わって下さい！！」

「そ、それもイヤ。」

「っつ！！早く降ろすですー！！」

当初、敵襲に気付いた刹那が木乃香の手を引いて行った後、追いかけるようにすぐ側にいた夕映を健宏が抱きかかえたのだ。

次にハルナの方へ視線を向けると、彼女はそれは勘弁とばかり先に走り出してしまった。

もし二人同時なら小脇に抱えていたが・・・その場合すぐに体力が

切れていただろうが。

なお、エヴァも側にいたが自分で走れるので気にしていない。彼女も分かつてはいるが、ついつい走りながらも健宏を睨む。身長差でお姫様抱っこされている夕映は気付いていないが。茶々丸も無言で走っている。

「ああ、周りの人たちの視線が痛いです・・・」

「少しの間、我慢してくれ。夕映ちゃんは体力がなさそうだし厳しいぞ」

「うつ・・・わかったです・・・」

健宏は汗一つも掻かずに夕映を説得する。

図書館島探索部所属の夕映も見た目より体力はあるが、かなり辛い事は理解していた。

健宏が少しでも息切れしたり、無理しているようなら言いようがあった。

だが、本当に平気で走り続けるので抵抗する理由がなかった。

健宏も夕映を抱きかかえても、暴走はしなかったのでなおさらだ。理由は皆さんの察するとおりだろう。

「（うつ・・・どうしてこんなことに！桜咲さん！！早く止まってください！！）」

下手に暴れて落ちてしまったらお互いに迷惑がかかる。

その為、真っ赤になりつつもジツとしているしかない。先に行く刹那が早く止まる事を祈りながら・・・

彼女は気付いていない。他の男は当然として、親しくなった者でも（彼女の友好関係に異性はかなり少ないが）抱きかかえられるなど、恥ずかしさ以上に嫌悪感を感じるはず。

しかし、健宏には恥ずかしさなどはあるが嫌な感情はない事を・・・

「（しかしホント楽でいいわよねえ夕映は。てか羨ましいなあ・・・って何で私は羨ましがってんの？）」

その頃ハルナも自分のうちに広がった感情に首を傾げていた。

そして刹那が先行に走っていると、その先にある場所にハルナが気付いた。

「ここってシマネ村じゃん！？何よ、桜咲さんったらシマネ村に来たかったんだー！？」

ハルナの単なる勘違いだが、刹那は一つ妙案が思いつく。

（今はこのちゃんと他の班と巻き込まないために別れることが先決！！迷惑をかけるが、後のフォローは健宏さんに任せるしかない！！）

考えを纏めると、刹那は振り向く。
そして・・・

「す、すみません！！私はこのちゃんと2人つきりになりたいんです！！」

『ええっ！？』

焦りからか、微妙に問題発言を残して木乃香を抱きかかえジャンプして壁を飛び越える。

まともに受けたハルナは驚きの声を上げる。

健宏はせつなの発言に夕映を降ろしつつ、デッカイ汗（呆れたときや動揺したときに漫画なんかで出てくるアレ）を掻いていた。

「（これどーやってフォローしよ・・・）」

「そ、そうね、早く行かないと二人の百合百合なシーンが見られなくなっちゃうもんネ!？」

「私としては、ある意味その方が助かるのだがな。」

「マスター・・・それはあんまりだと思います。」

「もう十分見失ってるです、というか二人の分のお金は私たちが払うですか?・・・」

ハルナが自らの妄想に浸り、エヴァが誰を想っているかを知っているがゆえに意地悪なことをいい、茶々丸がそれを宿め、夕映が当然なことをツツコむ。なんとも見事な漫才であった。

「これは、木乃香の友人としては確かめなくちゃいけないわね!! 私達も入るわよ!!」

「私は違うと思いますが・・・逸れたままというのも問題なので、合流するのは賛成です」

「ちょ、ちょいと2人とも・・・」

「行くわよー!!!」

「人の話聞けや!？」

夕映とハルナもシマネ村に入ろうとし、健宏が慌てる。

刹那の意図を理解している健宏も別れたままの方がいいと考えている。

しかしハルナは漫画研究会にも所属しており、自らも書いたりしている。

そのせいか朝倉に並ぶほどの嗜好好きで、特に恋愛関係には目がなく悪乗りしたりする事もしばしば。

スイッチが入ってしまったら、止める事は夕映や木乃香でも困難なほど。

結局、説得する理由もないために全員がシマネ村に入ることになる。

ちなみに、料金は刹那と木乃香の分も含めて健宏が支払った。

「あ、領収書下さい、宛名は麻帆良学園学園長で。」

一方、先に入っていた刹那は一息ついていた。

（ふう・・・これだけの人目があるならば、敵も手出しは出来まい。シマネ村で、親書を渡したネギ先生達が戻ってくるまで時間を稼ぐのが得策か・・・
しかし、ネギ先生もかなり消耗していた様子。やはり健宏と合流しなくてはいけないか）

放った式神・・・通称・ちび刹那との連絡も、敵襲に集中できなくて解けてしまった。

刹那が現状を整理していると・・・

「せつちゃん！じゃーん」

「わあっ！？」

更衣所で木乃香が振袖に着替えて現れた。

髪も結い上げ、傘まで持っている。

シマネ村では、こういった衣装に着替えることも出来る。

「えへへ・・・どうどう、せつちゃん？」

「は、はい・・・とても、お綺麗です」

「そっか？これやったら、タケちゃんも似合うとるって言ってくれるかな？」

「も、もちろんです！」

刹那の肯定に嘘はない。普段の木乃香は『可愛い』が、振袖姿は『綺麗』という言葉が似合う。まるで本物のお姫様のようにだ。

「次はせつちゃんの番やでーほら、行こ！」

「こ、このちゃん！！私はそのようなモノは・・・！！」
「いいから、いいからー」

木乃香だからこそ似合うのであって、自分には浮いてしまうと思いきや遠慮する。

しかし、木乃香は刹那の手を引いて更衣所に入る。そして・・・

「おっ！このちゃん、やっと見つけたわ。」

「あっ、タケちゃんやー！」

刹那達を捜していた健宏達がようやく合流することが出来た。彼女も健宏の側まで駆け寄り笑顔を向ける。そして木乃香は、着物をアピールするように腕を軽く上げる。

「なあなあ、これどない？似合うとる？」

「おっ、バッチグーだ。本物のお姫様みたいだぜ。そっぴやせつちゃんはやんは？」

「んふふー、何言うとるんタケちゃん、すぐ近くにおるやん。」

「なに？・・・このちゃん、これは狙いすぎだろ、確かに似合っているけど・・・」

「何々、桜咲さん何の格好ブツ！？」

「おおっ、これは！？」

「木乃香、ちよっと悪ノリしすぎですよ？・・・」

「桜咲さんとても良くお似合いですよ。」

「ハハハハ、よ、よく似合っているじゃないか桜咲刹那！まるで本物の『男』のようだな！」

「っ！！わ、笑わないで下さいエヴァンジェリンさん！！」

これだけでは誰も判らないだろうからそろそろネタばらしをしよう。確かに刹那の服装はしんせんぐみではある。だが皆さんご存知の羽織に袴のほうではない。

カラスもびつくりの全身真っ黒のジャケットとズボンである。

そう、新○組ではなく○選組。刹那の格好は銀○の○選組だった。

ちなみに夕映は、巫女服を着た柊か○み、ハルナはこれまた銀○で女忍者の猿飛あ○め、

和美はる○うに剣○の緋○剣心、エヴァはうる○やつらのお○ちゃん、茶々丸は犬○又の○瑚（通常ver）である。

「どう、せっちゃんよう似合っとるやろ？」

「確かに似合ってはいるけど・・・もうちょい他に何かなかったんか？しかもご丁寧に亜麻色の鬘^{かつら}まで被ってるってことは沖田○悟か・

・・・

「スゲエ似合ってるよ桜咲さん！木乃香と並ぶと本物の沖田○悟とお姫様だね！」

「いいじゃん二人とも！これはぜひとも撮らなきゃ！」

「ああ本当に良く似合ってる。このまま愛の逃避行でもしたらどうだ？私は応援するぞ？」

「とてもよくお似合いです刹那さん。」

「ハルナもエヴァンジェリンさんも落ち着くです。ああ、またしても周りの視線が痛いです・・・」

「ま、まあそれはともかく流石に周りの目が多くなってきたな。そろそろここを離れっ・・・！！？」

皆、下がるんだ！！」

皆に離れるよう指示する健宏だが、突然馬車が割り込んでくる。木乃香を背に庇う刹那、その2人の前にさらに前へ出る健宏。3人が緊張する中、乗っていた女の子が降り立つ。

「どうもー神鳴流ですー。」

その女の子とは、初日の夜に駅で刹那と戦った月詠みだった。ご丁寧にドレス姿で。

「・・・じゃなかったです。その東の洋館のお金持ちの貴婦人です。ごきますー。そこな剣士はん、今日こそ借金のカタにお嬢様をもらい受けに来ましたえー。」

「な、何だと？どういうことだ？」

「せつちゃん、たぶんやけどお芝居やない？」

「俺も夕映ちゃんに話を聞いたけど、シマネ村じゃ客を巻き込んでちよつとしたイベントをやるらしい。

設定からして木乃香ちゃんを攫う借金取りといったところか？良く考えたもんだ。」

「それはもうー。」

「って感心してる場合じゃないでしょう！？」

月詠の言葉の意味を当初、刹那には分からなかった。

だが、月詠の存在と自分が狙われている事を知らない木乃香はシマネ村のイベントと思い、

健宏がそれとなく詳しく説明する。

「（なるほど、劇に見せかけて真正面から堂々とこのちゃんを連れ去ろうとするわけか・・・）」

刹那は理解したと一つ頷き、健宏より一步先まで出て月詠に宣言する。

「そうはさせん！！このちゃんは私が守る！！」

「せっちゃん、格好えー！」

「わっ！？こ、このちゃん、いけません！」

「と、まーそういう訳だからこのちゃんは諦めてくれ。」

刹那の力強い言葉に木乃香は感極まり彼女に抱きつく。

健宏は苦笑しながら諦めるように言う。

だが、月詠は怒るところか嬉しそうに片方の手袋を刹那へ投げる。

「むっ？」

「木乃香お嬢様を賭けて、決闘を申し込ませていただきますー。30分後、場所はシマネ村正門横『日本橋』にてお待ちしてますー。

ご迷惑と思いますけど、ウチ・・・

是非とも手合わせしていただきたいんですー逃げたらあきまへんえー・・・刹那センパイ♪」

咄嗟に受け取った刹那に決闘を申し込む月詠。

一度言葉を切り、刹那の名を呼ぶ時に見せた暗い笑顔に側にいた木乃香の方がビクツとする。

「ほな、お待ちしてますえー。あつ、そこな人ももちろん来て下さいねー。」

「これはご丁寧にどうも。喜んでお受けさせていただくよん♪」

「ほな、30分後にまたお会いしましょうー♪」

再び馬車に乗り去っていく月詠。刹那は息を一つ吐く。木乃香は健

宏に抱きついて、少し震えている。

「おっと・・・このちゃん、大丈夫か？」

「お嬢様！如何しましたか！？」

「だ、大丈夫や・・・ちよつと、あの貴婦人役の人が怖かっただけやから・・・」

「そつか」

「このちゃん・・・」

木乃香の言葉に納得し、健宏は彼女の頭を軽く撫でて落ち着かせる。刹那も横から木乃香の手と肩に、自分の手を回して抱きしめるようにする。

大好きな2人の温もりに、木乃香は少しずつ落ち着きを取り戻す。なんとも美しい光景だった。

そんな3人に突撃する影があつた。

更衣所ではったり出くわし、一部始終を見ていたエヴァたちと3班全員だった。

余りの勢いに健宏たちはそれぞれパツと離れる。

「ちよつと、桜咲さん！？どーゆーことよー！？」

「今の心境は！？」

「えっ？」

ハルナと夏美が最初のターゲットの刹那に質問するが、本人は理解していない。

さらに朝倉がマイク片手にインタビューを続ける。

「もー！！何でこんな重要なことを言ってくれなかったのよ！？あつ、もしかして恥ずかしかったとか！？心配ご無用！！記事にはしないから、全て吐いちゃって！！」

ズスイっと、さらに追い討ちを掛けるように迫る朝倉とハルナ。

「それでいつから2人は付き合ってるの！？健宏さんともちよつと怪しかつたけど、何にもないの！？」

「チャンスよ、夕映！！ライバルはいないわ！！」

「だ、だから、違うと言っているじゃないですか！！」

ハルナからの思わぬ言葉に夕映は大声で否定する。

「ちよ、ちよつと待って下さい！！な、何の話ですか！？」

「いやいやうん、お姉さんは応援するよぉ！私達味方だからね桜咲さん！！」

「ちよ、ちよつと話が見えせんわよ！！皆さん私を置いてけぼりにして」

「もうニブいな、いいんちよはー。いいよね皆！？よし決めた！
！二人の恋、私達が全力で応援するよー！！」

『おー！！』

「わああ！？ちよちよ、違うんです待って皆さんー！？」

そうこうして騒ぎ立てる皆。だから健宏もエヴァも気づかなかったのだろう。

その光景を隠れるように見ていた白髪の少年の存在に・・・

『一同』は月詠が指定した場所へ移動する。

そう・・・

夕映とハルナはもちろん、3班も一緒に行くと言い出したのだ。

朝倉は『魔法関係』で危険だと伝えられたが、今更ながら事態に気付くがすでに遅し。

周りのテンションが上がっており、明確な理由もなく引き止めることもできない。

木乃香達が仮装している中、健宏だけが私服のままなので逆に浮いてしまっている。

事情を知らない者達と木乃香を朝倉が引き付けながら前を歩き、その間に後ろで健宏達が話し合う。

「どうしますか？このままでは彼女たちも巻き込む事に・・・」

「うーん・・・ここまで来ちゃったんだ、今俺たちからはなれるほうがよっぽど危険だろうからこのままにしておこう。もう一度聞くけど、せつちゃんがあの子を相手をする。これはいいかな？」

「もちろんです、お任せください。」

横島の確認に刹那は力強く頷く。

自分に目をつけられている事もあるが、同じ神鳴流の遣い手としてあのような手練れとは自分のほうが組みやすいのだろう。

「エヴァは動けないんだっただな？」

「ああ。前にも言ったが、私が動くとき色々面倒な事になる。さらに事態が大きくなるか、直接私が狙われるか・・・後は、ジジイの許可というかフォローを頼むかしないと無理だ。口惜しいがな。」

『闇の福音』が封印を解けて一騒動を起こしたら、問題が多すぎる。

事後承諾にしても、この程度で彼女が動くわけにはいかない。

「そっか・・・たぶん一般人も芝居だと思って集まるだろうから、派手な事はせんだろっし・・・」

茶々丸ちゃん、木乃香ちゃんの護衛を任せていいかな？」

「マスター・・・」

「構わん。いくら自由に力を振るえんとしても、どうとでもなる」

「分かりました。健宏さんの指示に従います」

「それよりも近衛木乃香自身はどうする？この際、自分が狙われていると全てを打ち明けた方が対応しやすいぞ？」

「エ、エヴァンジェリンさん！？」

エヴァの台詞に度肝を抜かれる刹那。まあ無理もない、魔法のことやらないやら全てを話せといっているのだから。

「・・・まあ確かにちつとくらいなら話すとするか。」

「健宏さん！？」

「落ち着けよせっちゃん、何も全部そのまま話せって言ってるんじやねえ。一先ずは『このちゃんが悪いやつに狙われてる』って伝えればいいんだから。魔法のことは伏せてな。」

「・・・わかりました。」

「・・・そやったんか。だからせっちゃんとタケちゃんは・・・」

「申し訳ございませんお嬢様、今まで黙っていて・・・」

「うっん、せっちゃんの悪いんとはちゃう、悪いんは悪者さんの方なんやから。そしてせっちゃん今までありがとな。」

「お嬢様・・・勿体無いお言葉です・・・」

木乃香に事情を話した（もちろん魔法のことは伏せて）刹那が木乃香に謝る。

しかしそれを止め、今までの礼を言う木乃香。木乃香の礼に刹那は目が潤んでいた。

そこから離れて二人の会話を微笑ましく聞いていた健宏だったが、

何故か『上』から声が聞こえてきた。

「皆さんー！大丈夫ですかー？」

「兄貴、全員いるみたいだぜ！」

「はっ？」

ミニサイズのネギとその上に乗っている力モだ。これには健宏も驚く。

だが、刹那の紙型を使った分身と察する。

別行動していたネギ達は、敵の罠『無間方処の咒法』に囚われてしまふ。

その効果は空間を歪め、ループさせて閉じ込めてしまふ。

過激派の刺客、狗神使い『犬上小太郎』が蜘蛛の式神に乗って現れる。

式神は魔力供給された明日菜によって倒されたが、小太郎は強敵だった。

彼は西洋魔術師であるネギ狙いで、明日菜は眼中に無かった。

当初は自分と同じ子供ということで戦いを渋っていたネギだったが、
「西洋魔術師は弱い」と小太郎に馬鹿にされ戦いに挑むネギ。

一度退却するが、善戦し小太郎を後一步まで追い込む。だが、小太郎も獣化しさらなる強敵になる。

その時、ネギ達の後をつけていたのどかが自らのアーティファクト『いどのえにつき』を使用する。

この本は相手の名前を呼ぶ事で、表層意識や質問の答えが日記風に描かれるのだ。

のどかの機転により結界の弱点が判明し、抜けだせた。

さらにちび刹那が、小太郎を逆に閉じ込めることに成功する。

一段落し休憩していると、ちび刹那が元の紙型に戻ってしまった。

ネギはその紙型を使い、ちびネギになり刹那の気の跡を追ってきた

のだ。

文字通り目の前を飛んでいるちびネギを、横島は軽くピンと弾く。

「あいたっ」

「ネギ、そっちの方も大変だったみたいやな。のどかちゃんの件も聞いたぜ？」

「あう……」

健宏もさきほど刹那から経緯を聞いたばかり。

彼の言いたいことを察したちびネギは頂垂れる。

健宏もそれ以上言わない。

今のこちらの状況を説明する方が先だからだ。

「いいか、ネギ。こっちは……」

『ふふふ』

だが、説明をする時間はなかった。

いつの間にか指定場所についており、橋の上には月詠が待ち構えていた。

「ぎょうさん連れてきてくれはっておおきに。楽しくなりそうですなー。」

両手に刀を持ち、笑顔でゆつくりと歩く月詠。

健宏と刹那が木乃香の前に周る。

「ほな、始めましょうかー？木乃香様も、刹那センパイもウチのモノにしてみせますえー。あ、そうそう、そこな人はこの人がお相手しますゆえ、頼んますー。」

「いやいやいいよ、そこまで手間をかけさせるためにはいけないからねえ？」

「そうはいかないよ、君には木乃香嬢を連れ去る邪魔をされたからね。君の相手は僕だ。」

いつものようにおちゃらけて相手をしていた健宏だが、月詠の背後から現れた白髪の少年に表情を引き締める。

「あらら・・・こりゃちよいと面倒なことになっちまったねえ・・・」

「ほう、どうやら並大抵の奴ではないようだな。おそらく私が健宏でないと相手にもならんな。」

エヴァの言つとおり、少年の相手は健宏かエヴァでないと無理だろう。

健宏は一瞬考えてから指示を出す。

「茶々丸ちゃん、このちゃんを安全な場所に連れて行ってくれ。正直、俺もせつちゃんも相手を抑えるので精一杯だ。」

「はい」

「ネギと力モも着いて行ってくれ。万が一茶々丸ちゃんも戦わずをえない場合は、お前がこのちゃんを誘導しろ。」

「うん！」

「合点でさー！」

「それならば、ネギ先生を等身大にします。見かけだけです。攻撃はもちろん、飛ぶことも出来ないので注意してください。」

「分かりました、お二人とも気を付けてくださいね！」

「あ、そうだネギ。コレ渡しとくからな。うまく使えば時間稼ぎが十分にできる。」

「何ですかコレ？」

「それは見てのお楽しみつてな。じゃ、頼んだぞ！」

刹那が印を結び、ちびネギが本人と同じ大きさになる。仮装に合わせたのか忍者姿で。

健宏が何かが入った袋をネギに渡す。受け取ったネギが木乃香の手を引き、茶々丸が先導する。

「では、ウチから先に行かせてもらいますえ。ひゃっきゃこー♪」
『きゃー！！！』

月詠は数多くの札をばら撒き、やけにコミカルな妖怪を召喚する。

妖怪達は健宏と刹那を無視し夕映たちに襲い掛かる。

と言っても、何故か服を脱がそうとしている。

千雨とザジは一般客に紛れていたので被害はない。

妖怪たちには実力がわかるのだろう、エヴァには近づこうともしない。

「にとーれんげき、ざんてつせーん！」

「くっ！」

月詠は橋の手摺を踏み台にして、刹那に飛び掛る。

刹那も迎え撃ち、一瞬で何度も斬撃をを交わす。

こうして彼女達の再戦が始まった・・・

「大丈夫ですか、木乃香さん！？」

「う、うん！」

一方、ネギ達は月詠が召喚した妖怪に追われながら逃げ回っていた。茶々丸の姿はない。

あの場から逃げ出すと、初日の夜に千草が使役していた『熊鬼』が現れた。

彼女はその相手をするために留まり、2人で逃げる事になる。

刹那の忠告どおり、ネギは式神の為に魔法を使うことは出来ない。

今の彼に出来る事は木乃香を安全な場所まで逃げ回る事、ただそれだけだ。

「兄貴！！前から来たぜ！！」

「ええっ！？木乃香さん、ここに隠れましょう！！」
「分かったえ！！」

正面からも猿の式神が多く現れ、このままでは挟み撃ちだ。
すぐ横に城の裏口が開いていたのでそこへ逃げ込み、ドアを閉め鍵をかける。

「これで少しは時間を稼げと思います。木乃香さんは息を整えてください」

「ハア、ハア・・・」

元は式神のネギはともかく、仮装したままで走り回るのは木乃香にとってはかなり辛かった。

衣装も気にせずその場に座り込む。

その間にネギは健宏から預かった袋の中身を見える。するとこの大きさの袋の中には入りきらないほど多くのものが出てきた。

「確かにこの中のものを使えば・・・でもどうやって入れたんだろっ？」

「それにしても運良くドアが開いていて良かったぜ！あのままだったら俺たちも対応できないし」

背後からの襲ってきた妖怪はカモが対応していた。
だが、正面からの敵も追加されたらひとたまりもない。

「あつ……」

しかし、ネギはカモの言葉に反応し言葉を切る。確かに前後とも挟まれていては危険だった。

そんな時に扉が『偶然』に開いていたのだ。まるで入ってくる様にお膳立てしたように……

「しまった！！カモ君、急いで外を見てきて！！」

敵がいなかったり、少なかつたら強引にでも外へ出なくちゃ！！」

「ど、どうしたんですかい、兄貴？今は隠れたままの方が……」

「違うんだよ、カモ君！！これは罠だ！！僕達を巧みにこの城の中心まで誘導してたんだ！！」

早く出ないと……！！」

早くここから出るように促すネギだったが、わずかに遅かった。

「うーん惜しいなあ、もうちょい早く気付くべきやったなあ坊や？」

廊下の先から千草が姿を現す。さらに千草と月詠を助けたあの怪物も。

余裕なのかゆつくりとネギ達に近づく。

「念のために下りてきて正解やったわー、下手したらまんまと逃げられてしまうところやった。

ちなみに、扉の外はウチの式神達が見張っているさかい戻られへんで。

さて……坊やが何でここにいるんや？小太郎が閉じ込めたはず

やのに？」

「クツ……」

「ネギ君……」

木乃香は立ち上がり後ろへ下がるが、ネギはその場に留まっている。それはある狙いがあつたからだ。

「はーん。あんた、実体ちゃうな。」

いくらサウザントマスターの息子でも、その年で転移魔法やなんて使えるはずあらへん。

今のアンタは手出しできない役立たずっちゅーことや。大人しくお嬢様をこつちへ……」

「木乃香さん！！」

「わっ！？」

ネギは木乃香の手を引いて、近くにある階段を駆け上がる。だが、千草は追おうともせず余裕を崩さない。

「機転を活かしたと思うやけど、所詮ガキやなー。今のこの城はウチ等のテリトリーなんやで。」

他の階段や外に出れる場所は、ウチの式神が塞いであるんや。捕まるんも時間の問題やな。」

扉の鍵を外し、自らの式神を招き入れる。

「ほな、いきましょか」

千草はネギ達が駆け上がった階段に足をかける。すると……

つるん♪

「ぶはっ!？」

滑って倒れてしまう。

慌てて身体を起こし、階段をチェックすると濡れていることが分かった。しかも水ではなく油だ。

「あ、あんのガキー!!」

これは健宏から預かった袋の中にあつたペットボトルの中身の油だ。せこい手だが、この先も警戒しなくてはならないので時間稼ぎになる。

往年のギャグのような滑り方をしてしまった千草は、自分がまんまと引っ掛かってしまったことに対し、横にいた怪物に八つ当たりを兼ね睨みつける。

「あのクソガキ!・・・もう手加減はせん!大人をからかったことを後悔させたるわ!」

怒りを胸に秘めつつ・・・

橋の上では、刹那と月詠の戦いが続いていた。

「(くそっ!きりがいい!!)」

月詠との戦いはそれこそ短時間で着くものではない。

相手はただ自分と戦えばいいが、自分にとっては木乃香のことが気になり焦ってしまう。」

「（健宏さんも動けないし・・・）」

健宏と白髪の少年は戦いどころかその場から動かず、お互いに牽制し合っている。

というより、健宏が行動を起こせば少年も動くといった感じだ。

周りが盛り上がっている中、この2人は今も一步も動かず会話を続ける。

「チミの狙いは俺を引き付けておくことかな？」

「そうだよ。君を抑えるのは僕しかいなかったからね。逆に言えば、僕を抑えるには君しかない。」

お互いに手を出せば、一般人まで巻き込む事になる。それは望まないだろう？」

「そりゃもちろん。そっちも困るのか？見たところ、そんな事気にするようには見えねーけど？」

「僕も僕なりの考えがある。今、この場で力を振るうほど愚かじゃない」

横島は挑発の中に疑問を混ぜる。少年は少なくともこの場では様子見らしい。

「（ちっ！また面倒なタイプだ！！）」

策士であるが知恵だけが武器ではなく、冷静で力もある。

（自分で言うのもなんだが）こつも同じだとなまじ対応に困ってしまう。

「それに、もう僕は必要はないかもしれない。いや、逆に君が実力行使に来るかもね」

「何？」

言っている意味が分からず、健宏は眉を寄せる。

その答えはすぐに分かった。

『聞ーとるか！！木乃香お嬢様の護衛、桜咲刹那！！この鬼の矢が2人をぴつたりと狙つとるのが見えるやろ！！お嬢様の身を案じるなら、手を出さんとき！！』

「このちゃん！？」

「余所見はいけませんえー」

「くっ！！」

城の屋根にネギと木乃香、千草と怪物が立っていた。

しかも怪物が弓矢を構えており、宣言通り木乃香に狙いを定めている。

刹那もその光景を目のあたりにして動揺する。健宏も顔には出さないが、かつてないピンチに焦る。

「こういうことか・・・でも、お前達はどういう目的だが知らんがこのちゃんが必要なんだろう？」

ああいう脅迫は無意味じゃねーの？」

「確かに近衛木乃香は必要だ。でも、五体満足である必要はない」
「くっ・・・」

断然優位に立つても、少年は表情は変わらない。

忠告を無視して刹那が城へ向かって、ただ健宏に集中している。

「だけど、気を付けた方がいい。アレは命令に忠実だから、もしか

したら本当に打つかもしれないよ？」

「・・・」

今は刹那に任せるしかないと判断する。

動けば鬼が矢を放ってしまうので硬直状態が続く。

しかし・・・

「このちゃん！？」

風に煽られたネギを見て鬼が矢を放ってしまったのだ。

「木乃香さん！」

木乃香を庇うネギだったが、今の身体は式神。

腕を伸ばすが貫通し、勢いを止めることなく矢は木乃香へ飛んでいく。

刹那が飛ぶように近づくが間に合わない。

木乃香は周りがスローモーションのように感じていた。

「このちゃん逃げてええー！！」

「（このままやったら矢がうちに当たってしまうなー、痛そやなー・・・ウチ、このまま死んでしまうんやるか？・・・いやや・・・そんなんいやや！！）」

「・・・あれ、痛ない？なんでやる？」

目をつぶり、矢が自分に突き刺さることを覚悟する木乃香。しかし一向に痛みが襲いかからないのを不思議に思う。下から観客の驚きに満ちた声が聞こえる。
ギャラー

「なんでやる？・・・！！」

「ふうー、あふねえあふねえ。はいほうふは、ほのはん？（危ねえ危ねえ。大丈夫か、このちゃん？）」

「た、タケちゃん！？」

木乃香が驚きの声を上げる。それもそのはず、目を開けてみれば自分から50mは離れた所にいた健宏がいきなり現れ、矢を口で咥えているのだから。

「な、なんでタケちゃんがここにおるん！？」

「・・・ぺつ。なんでつてひつでーなーこのちゃん。助けに来たからに決まってるっしょ？」

「タケちゃん・・・」

「ンなアホな！アンタは新入りが足止めしていたはずや！！それにさっきまで確かに向こうにおったで！！アンタ一体何をしたんや！？」

千草は先程までの余裕など消え、驚きを隠せない。

「それはだな・・・」

「それは！？」

そついうと健宏はいきなり服を脱ぎ捨てる。

「拙者が忍者だからでゴザル」

「はあ！？」

そこには忍者服を着た健宏の姿があつた。千草はあんまりと言えばあんまりな答えに啞然としている。

「ふ、ふざけとるんかアンタは!!」

「いや、どうやら彼に一杯食わされたようだね。周りを見てごらん。」

少年に言われた千草が周りを見てみると観客からすげー、どういうトリックいや忍術を使っただんだ!?!すごい劇だなという声が上がっている。

「クツ、これじゃお嬢様を戴いてもすぐに居場所がバレてまう!!」
「しかも、だんだん観客が増えてきた。仕方がない・・・今回は僕達の負けだ、君に勝ちを譲るとしよう。しかし次はこうはいかないよ。月詠、千草さん。」

「はい!。」

「なっ!?!なんでアンタは新入りの言うことを聞いとるんや!そして新入り!アンタなんでウチに命令を・・・!!」

「千草さん?」

「・・・わかった、アンタの言う通りや。ここは引くことにしまひよ。」

月詠が少年の言うことを聞いたのと、少年が命令したために檄を飛ばす千草だが、少年の冷徹な瞳を見て恐ろしくなったのだろう、少年の言う通り撤退していった。

「ふう、一安心つてとこだな・・・」

千草たちが撤退した後、湧きに沸いた観客たちから逃げ切った健宏たちは、シネマ村の近くまで来ていたネギ達と合流していた。

「でもすごいですよ健宏さん!!あんな風に木乃香さんを守り切るなんて!!」

シネマ村での健宏の行動に興奮が収まらないネギ。

「そうでもねーよ、実際ヤバかったしな。だがそれよりも今のほうがバイな・・・」

健宏が言うのも無理はない。和美が刹那の荷物にGPS携帯を忍ばせていたため、和美、ハルナ、夕映の3名が付いてきてしまったのだ。

「なによー、別にいいじゃん付いてくるぐらい。もしかして知られたら困るようなことを木乃香たちをするとか？」

「バカ言っなよ・・・たくしやーねーな、撒いたってどうせいつてくる気なんだろう？一緒に来る？」

「もちろん！！」

健宏の言葉に刹那が慌てる。

「（な、何を言ってるんですか！！）」

「（このまま歩き回ってたら和美ちゃん達も狙われちゃう可能性もあるからな。本山にいけば結界が貼ってあるから皆大丈夫だしな。）」

「（・・・わかりました。）」

健宏に物申す刹那だが、健宏の言葉に納得したようだ。

「んじゃ、皆ついてきて。」

健宏が皆を先導する。十分程歩いていくと大きな門が見えてきた。

「ここが目的地だよ。」

少しの間、その雰囲気圧倒されるがそこは良くも悪くも行動派が主体の3-Aの生徒達。

「そうとわかればレッツゴー！」

「そういえばここどこなの？」

「ん？関西呪術教会だけど？」

「はあ！？敵の本拠地じゃない、何考えて・・・」

「大丈夫大丈夫。な、せつちゃん。」

「はい。」

「どうして!？」

「あんなー、明日菜、ここはなー」

健宏の思いがけない言葉に慌てるネギと明日菜だが、健宏と刹那は気に留めない。

明日菜がくっついてかかるが、木乃香が答える前に向こう側から動きがあった。

『おかえりなさいませ、木乃香お嬢様ー!!』

「へっ？」

道の側面にブラッと巫女達が並んでいたのだ。これにはネギと明日菜も目が点になる。

「ここってウチの家やねん。」

「ここは関西呪術協会の総本山であると同時に、このちゃんの御実家でもあるのです。」

「ええーっ!？」

「ま、そういうことなのよ。お解り？」

今日だけでも幾度となく驚いた二人だがこれが本日の一番の驚きであったのは言うまでもない。

第18話 3rdミッション！親書お届け大作戦！（2）（後書き）

「どうもー、今回も約2週間ぶりの投稿となりました、主人公こと狩野健宏です！さて、今回のゲストは！」

「ハアッハッハッハッハ！毎回言ってる気もするが久しぶりだな貴様ら！今回もゲストはこの私、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル、そして！」

「11話ぶりの後書き出演となりました、桜崎刹那です。」

「どうもー、みんな元気にしてたかな？麻帆良のパパラッチこと朝倉和美でーす！」

「どーもー、天才漫画家パール様こと早乙女ハルナだよー！」

「どうも初めまして、綾瀬夕映というです。よろしくなのです。」

「どうも皆様、2話ぶりの登場とさせて戴きました、絡操茶々丸です。」

「そして最後はこの小説の作者、Rだ！」

「いやー、ホントにゲスト多いな今回は。」

「多いのはゲストだけじゃないぞ。何と今回は今までの話の中でも一番長いのだ！」

「だからなんなんだ？」

「いや、言ってみたかっただけ。」

『あつそ。』

「・・・なんか女性陣の反応がすげー悪いよ、なんで？男としては肩身が狭いんですけど・・・」

「いえ、健宏さんは気にしないでください。今回はRに話があるので。」

「へ、俺に？」

「そうだ。貴様を除いた今回のゲストの共通点を思い出せば判るはずだが？」

「共通点？・・・シネマ村でコスプレやったメンバーか。」

「そうです！何なんですかアレは！？」

「納得のいく説明を求めるです！」

「まあ私は別にいいんだけどね、良いネタになったし。」

「私もいいのが撮れたからいいんだけどね。」

「私も同意見です。」

「貴様らが良くても私たちは納得しておらんわ！何なんだアレは、元ネタの身長やら髪色やら何も考えておらんだろうが！」

「いや、しゃーないやん！？元々は原作どおりに行こうと思ってたけど書いてるときにせっちゃんのが昔漫画で見た新〇組に見えたから、どうせならコスプレでしょうって思ったんだよ！まあ確かにせっちゃん以外はみんなやつつけ仕事だったけどさ。銀〇とうる〇やつらと犬〇又以外はそのキャラ以外知らんし。」

「サ〇デーキャラばかりではないか！良くそれで書く気になったな。」

・・・

「しかも危うく和美ちゃんのは忘れるとこだったし。」

「そうなの！？」

「いやー、ちゃんと見直して良かったよ。」

「こんどやったらどうなるか解ってるんだろうな？」

「まあまあ落ち着けやエヴァ。大体そんなこと言っていられるのも今の内だしな・・・」

「どういう意味だ？」

「そっからはノーコメントだ、ネタバレになっちまうからな。」

「・・・なあ、もういい？」

「あ、ゴメンゴメンすっかり忘れてた。」

「俺主人公なのに・・・」

「おい、お前はちゃっちゃと自分の仕事をしな。」

「お前が引つ掻き回したんだろうが！！・・・まあいい、そんなことより次回は！」

無事に木乃香を送り届けた健宏たち。

しかしそこにも刺客の間の手が忍び寄る！

「いかにも戦闘って感じだね。」

「え、刺客って！？一体何が起こるの！？」

「それは後のお楽しみだよパル君。」

「なんかすごい嫌味に聞こえるです・・・」

「えー・・・まあいい、ところでこの場を借りて重大発表がある！」
『重大発表？』

「なんと近々新しい連載小説を作ることが決まったのだ！」

『ふ・・・』

「ふ？」

『ふざけんなー！！』

「のわああっ！？」

「お前、新しいの書くって本気か！？この小説だって基本は2週間に一回のペースじゃねーか！」

「そうですね！また投稿を遅らせる気ですか！？」

「だ、大丈夫だって！次からは確実にペースが上がるから！」

「何？とうとうパソコンを繋げたのか？」

「いいや？」

「じゃあどうやって投稿するんですか？」

「俺は気づいた、確かにスマートフォンで書くのは無理だ。しかし俺にはネットに繋いでなくてもパソコンがある！」

「いや、ネットに繋いでないんなら意味ないんじゃない？」

「フッフッフ・・・そうでもないのだよワトソン君、もとい和夫君。」

「じゃあどうすんのさ？」

「どのパソコンにも入っている「メモ帳」を使うのさ！これで予め作っておいてUSBにコピー、そして後はそのデータを繋いであるパソコンに移し、そこで最終確認をすればいいのさ！」

「確かにそれなら更新スピードは上がると思われます。」

「つかいままで気づかなかったってのもすげーな・・・」

「それは言っなよ・・・」

「ところでその新しいのとは？」

「遊戯王だ。T〇6やってたら無性に書きたくなってきた。まあ舞台は5d'sじゃなくてGXだけど。」

「なんでまた一昔のやつで・・・まあいい、それならさつさと書くんだな。もしそれにかまけて投稿が遅れでもしたら・・・」

「わぁーってるよ。まあでもしばらくは家の都合で遅れるかもしれないからそこんこは勘弁な。」

「まあそれなら仕方ないですね、どうか頑張ってくださいです。」

「おう！それでは最後にこの小説を読んでくれる皆さんこれからこの小説と、そして新しく始まる遊戯王の小説を」

『どうかよろしく願いします！！』

第19話 本山襲撃！ 迫りし刺客の魔の手！（前書き）

木乃香を無事に送り届けた健宏たち、しかし物語はまだ終わらない！
またもや大ピンチの予感！？
奇想天外、愉快痛快な物語！
それではどうぞ！

第19話 本山襲撃！ 迫りし刺客の魔の手！

屋敷の中に入り、案内された部屋はかなりの広さがあり、周りにも顔馴染みの巫女達が控えていた。厳やかな雰囲気の中、指定された席にそれぞれ正座する。

前列の左端から刹那・木乃香・健宏・ネギ・明日菜、後列にはハルナ・のどか・夕映・エヴァ・茶々丸・和美。

ちなみにエヴァは胡坐あくらをかき偉そうにしている。

そして彼らの前にこの屋敷の主とその傍らに身を寄せる者が姿を現す。

「お待ちせしました。木乃香、クラスメートみなさん。そして担任のネギ先生、そして健宏君。」

「皆さん、よう来はりましたな。歓迎しますえ。」

「お父様ー、お母様ー」お久しぶりやー！

「ははは、これこれ木乃香。」

「ふふふ、木乃香は甘えん坊さんやなあ。」

この二人こそ関西呪術協会の長であり、木乃香の父である『近衛詠春』と、その妻『近衛鈴菜』である。

鈴菜は詠春と違い、20代と見間違われるほど若々しい。

久しぶりの親子の抱擁に皆、様々な反応をする。明日菜の反応は異色を放っていたが。

「あ、あの長さん。会話中すみません、これを・・・」

ネギは親子の会話に断りを入れ、声を掛ける。詠春と鈴菜も姿勢を正し、ネギと対面する。

「東の長、麻帆良学園学園長・近衛近衛門から西の長への親書です。お受け取りください。」

「確かに承りました。大変でしたね。」

「これはこれはご丁寧にありますありがとうございます。」

両手で親書を差し出し、詠春と鈴菜が労いの言葉を掛けながら受け取り、その場で親書を開き目を通す。

そして正式な手紙の中の私的の1枚に苦笑いする。

『下の者も押さえられんとは何事じゃ！！しつかりせい、媚殿！！』

ご丁寧に近右衛門の似顔絵つき。苦笑いが出るのも仕方ないだろう。

「（相変わらず厳しいですねお義父さんは・・・）」

「（ほんまやな、ウチらも頑張ろうな？）」

心中で呟きながら親書を仕舞い、いまだ表情の硬いネギに笑みを向ける。

「いいでしょう。東の長の意を汲み、私達も東西の仲違いの解消に尽力するとお伝えください。」

任務ご苦労、ネギ・スプリングフィールド君！」

「ほんまお疲れ様、よう頑張りましたなあ。」

「は、はい！」

望んでいた言葉と任務をやり遂げた達成感にネギの顔が綻ぶ。

「あーもー、ホンマ可愛えなあー！」

「わぶっ!？」

「のどか、木乃香さんのお母さんに負けてはダメです。」

「ででで、でもおー・・・」

「何言ってるのよ、このままでいいの!? ほらっ行けー!」

「の、のどかさー!? うわあっ、すみません!」

「ひゃああああ!」

「あらあら、どないしまひよ?」

感極まった鈴菜がネギに抱きつき、それを見たハルナがのどかをネギのほうに押しやったためネギを押し倒してしまい、その拍子にネギがのどかの胸を鷲掴みにしてしまうというハプニングもあったが。

「ええどすか? 殿方の心は掴むにはなあ・・・」

『勉強になります。』

この後、本山で大宴会をすることになり、何故かその後に鈴菜による『男の心の掴み方講座』なるものが開催されていた。

「はじけてんなー、奥方様・・・」

「ええ、本当に・・・」

「なんとも変わった方なんですネ・・・」

「鈴菜は昔からああだったからな。よく私も玩具にされたものだ・・・」

健宏、刹那、ネギ、エヴァ・茶々丸はその輪から離れていた。

健宏、ネギ、エヴァ、茶々丸は興味がないから。刹那はここで自分が羽目を外すわけにはいかないと我慢していただけだが。

「刹那君、健宏君。」

「長? 何か御用ツスか?」

「こ、これは長! 私のような者にお声を・・・」

「ハハ、刹那君。そう畏まらず、健宏君のように自然体でお願いしますよ。・・・刹那君はこの2年間、健宏君はこの半年、木乃香の護衛をありがとうございます。長としてはなく一人の娘の親としての頼みに答え、よく頑張ってくれました。本当に苦勞をかけましたね。」

「ハッ、いえ・・・もとよりお嬢様の護衛は私の望みでしたので・・・」

「そうツスよ。このちゃんはせつちゃんにとって、そして俺にとっても大切な幼馴染ですからね。
当たり前のことをしたまでツスよ。」

自分の頼みということでも少々申し訳ない顔をした詠春だが刹那と健宏の言葉に顔を綻ばせる。

「こちらとしてもそういつてもらえると嬉しい限りです。これから木乃香のこと、お願いできますか？

勿論、ネギ君やエヴァにも。」

「ハ、ハイ！もちろんです！」

「勘違いするな。私があいつを手助けするのはあくまで健宏に頼まれたからだ。そこを勘違いするなよ？」

「ハハ、肝に銘じておきますよ。」

「それと長、途中で襲ってきた奴についてなんですが・・・」

「天ヶ崎千草についてですね。彼女については居場所の見当は付いています。明日の昼には腕利きの部下たちが戻りますのでそこで御用となりますよ。」

「いえ、確かにそつちも拙いんですがそつちじゃないんです。問題はその連れの白髪の子供のほうでして・・・」

「白髪の子供・・・ですか？」

「ええ。まるで人形みたいな子だったんですけど・・・」

「（白髪の少年・・・人形のよう・・・いえ、そんなはずはありません）」

せんね・・・」

健宏の言葉を聞き思い当たることがあるのか、詠春は考え込む。

「・・・長？どうかしたんスか？」

「はっ！いえ、大丈夫ですよ。すいませんね、心配を掛けてしまつて。」

「いえいえ。あ、そうだ、忘れるところだった！」

長の様子が気になり声をかける健宏だが、特に何もないようなので安心する。

しかし何かを思い出したのかいきなり声を上げた。

「まだ何かあるのですか？」

「ええ、あやうく忘れるところでした。」

健宏はそう言ってどこからか包装された何かを取り出した。

「これ、奥方様と一緒にどうぞ。麻帆良名物の饅頭です。」

狩野健宏、出張などで地方に行った際には必ずお土産を買ってくるタイプだった。

この後風呂に入った男性陣だが、そこで女子と鉢合わせてしまうと

いう王道ハプニングなどもあったが、しばらくは何事もなく過ぎた。

事が起こったのは午後11時、夜も更けた遅い時間である。

健宏が警戒するように言っていた天ヶ崎千草、白髪の少年の両名が本山に攻め入ってきたのだ。

明日菜が刹那に頼まれ、木乃香を風呂場に連れてくる途中で異変に気付いたのだ。

同時刻、ネギものどか達の泊っている部屋から聞こえた悲鳴で騒ぎに気づいた。

そしてこれも同時刻、白髪の少年に襲われながらも和美が庇ってくれたおかげで助かった夕映、ネギを捜しに行っていたため無事だったのどか、そして偶々トイレに行っていたため難を逃れたハルナの3名は森の中を走り回っていた。

「は、早く逃げなきゃ!？」

「何!? 何なのよ今は!？」

「分かりません、しかし今はさっきの何なのかということを考えるのではなく、この場をどうやって乗り切るか、そしてどうやって助けを求めるかを考える時です!」

少年の狙いは、小太郎からもたらされた情報にあった、心を読むアーティファクトを使うのどか唯一人。

他の人間はどうなってもかまわなかったのだ。

しかしのとかと夕映が助かったのは、和美がこの中で夕映が一番機転が利き、体力もあるために逃げ出せると思い立ったから。そして健宏に助けを求めるように助言をした。

その途中で遠くから同じように現場を見ていたハルナのとどか合流できたのはラッキーだった。

しかし・・・

「何故見つからないのですか!？」

「まさか健宏さん、もう石になっていてるのでは・・・」

「のどか! アンタ何言ってるの! 大丈夫よ! きつと誰が残ってないか捜しまわってるだけだって!」

ハルナが言うものの、実際ハルナ自身もそうなのではないかと薄々思っていたのだ。

しかし、自分が弱気になるわけにもいかず夕映とのどかを励ました。しかし・・・

「ようやく見つけたよ。ずいぶんと逃げたものだね、それには素直に感心するよ。」

二人の思いも虚しく、先ほど皆を石化した少年が現れた。

「あ、ああ・・・」

「そ、そんな・・・」

「ちいっ・・・」

「だがもう鬼ごっこは終わりだ。君たちにも石になってもらうよ?」

そいうと少年の指先に光が集まった。石にされてしまう。

もうダメだと思った時、人間は今一番合いたい人間が頭に浮かぶという。3人は助けを求め叫んだ。

「「「助けて・・・」」」

「?」

「「「助けてください(よ)、ネギ先生(健宏さん)!!!!」」」

森に虚しく木霊する3人の声。だが・・・

「無駄だよ、さあ君たちも早く石になるんだね。」

もう駄目だ。3人が諦めたその時・・・

「デビス・エイルス・レビス・ラビテウス！ 魔法の射手 炎の矢！」

「ラ・ステル・マスキル・マギステル！ 魔法の射手 光の十矢！」

とてつもないスピードの一本の炎の矢と、それを追うように十本の光の矢が少年に直撃し、数十mは吹き飛ばした。

「ええ！？ちよ、大丈夫！？」

「死んだんじゃないですか！？」

「あれ、今の声は！・・・」

殺人現場と見まがうほどの惨状に、夕映とハルナが声を上げる。し
かしのどかは一度ネギの戦いを見ているせいかあまり動揺せず、今
の声の主を捜す。そこには・・・

「大丈夫ですか、のどかさん、夕映さん、ハルナさん！？」

「やっと見つけたぜ！狩野健宏、只今参上！」

3人が探し求めていた二人の救世主の姿だヒーローった。

「もう、遅いよ！」

「危つく石にされるところだったです！」

「ごめんごめん、捜しまわってただけだなかなか見つからなくてね。」

「ネギ先生！」

「大丈夫ですか、のどかさん！？」

・
それぞれが自分と呼んだ救世主のほうに駆けよっていく。しかし・

「ヤバい、離れる！」

そういつて健宏は夕映とハルナを突き飛ばし、自身もその場から飛び退く。その直後その場所を石の槍が地下から貫いた。

「大したものだね、今の攻撃を避けるなんて。」

「あたぼうよ、避けるだけなら戦闘機の機関銃だってなんとかなるしな。」

「・・・喰らったことがあるのかい？」

「おう！全部避けたけどな！」

「・・・」

「おっと手が止まってるぜ！」

あまりの言葉に言葉を失う少年。いや、この場合は呆れているだけか？

とにかくその隙を狙って少年に蹴りを入れ吹き飛ばす。その間に健宏はネギに指示を伝えた。

「ネギ！お前はせつちゃんと明日菜ちゃんの所に行ってこのちゃんの救出を手伝ってくれ！」

「ええ！？しかし・・・」

「しかしも案山子もあるか！こいつの相手は俺かエヴァしか出来ん

「今のうちに早く行け！」

「・・・わかりました。気を付けてください！」

ネギは健宏の無事を祈ると刹那達のほうへ飛んで行った。

「それからのどかちゃん、夕映ちゃん、ハルナちゃん！君らは速く逃げろ！流石に守りきれん！」

「ええ！？」

「だ、だけど！・・・」

「どこに逃げればいいですか！？」

「大丈夫、助っ人を呼んである！楓ちゃん！」

「にんにん♪任されたでござるよ♪」

健宏が呼ぶと、どこからともなく忍者装束の楓が現れた。

「「「おお！？」」」

「さ、早く。3人とも急ぐでござるよ。」

「「「は、ハイ！！！」」」

そして3人＋忍者はこの場から走り去った。

「どうやら逃げられてしまったようだね、まあいい。今からでも十分追いつくだろう。」

「待てや、そこのお坊ちゃん！お前さんの相手は俺だぜ？」

「・・・どうあっても通してくれないのかい？」

「当たり前だろ？」

「・・・なら仕方が無い。僕はさっさと君を倒してあの4人を石化しに行くでしょう。」

「・・・やれるもんなら、やってみな！」

こうして、二人の戦いの火蓋が切って落とされた。

第19話 本山襲撃！ 迫りし刺客の魔の手！（後書き）

「はい、どうもー！皆いつも見てくれてありがとねー！今回の後書きはこの私、天才漫画家パール様こと早乙女ハルナと！」

「キラリと光る見事なおデコ、バカリーダーこと綾瀬夕映と！」

「あ、あう・・・恥ずかしがり屋の司書、宮崎のどかの、」

「『図書館三人娘でお送りします！！』」

「ってなんなんですか私の紹介は！？誰が『きらりと光る見事なおデコ』『バカリーダー』ですか！？」

「いや、バカリーダーは正解じゃん、夕映。」

「う・・・」

「だ、大丈夫だよえー。ゆえのおデコは光ってないからー。」

「！？のどかは私をバカだと言いたいのですか！？」

「ええ！？違うよゆえー！？」

「まあまあ落ち着きなって夕映。のどかがそんなこと思ってるわけ無いでしょ？勿論、私もね。」

「う、そうですね。私とした事がお見苦しいところを・・・ごめんですのどか。」

「ううん。気にしてないよゆえー。」

「そういえばなんでのどかは『恥ずかしがり屋の司書』なのかな？」

「そういえばそうですね、何故でしょう？」

「（たぶん仮契約カードの称号からだよねー、コレ・・・）」

「今回はオリキャラが出たね。」

「木乃香さんのお母さん、近衛鈴菜さんですね？この人に関してはいつもどおりの作者のその場での思いつきなのです。」

「マジでいつもどおりだね・・・まあそれはさておき、今回はヤバかったねー私達！」

「本当です。健宏さん達が来てくれなければどうなっていたことやら。」

「だけのどかは分かるとして、何であの場面で健宏さんの名前を呼んだんだろうね私達？」

「さあ？確かにそれは謎なのです。」

「（あわわ・・・それってゆえとパルは健宏さんの事を？・・・）」

「ん？どうしたののどか、オタオタしちゃって？」

「そうですよ。どこか具合でも悪いのですか？」

「えー？ち、違うよー！？そ、そんなことより次回予告に行こうー！？」

ついに始まる健宏と白髪の少年のバトル！果たして健宏の運命は！？そして無事に木乃香を救いだすことが出来るのか！？

「はうー、どうなるんだろー？ネギ先生、大丈夫かなー？」

「ネギ君なら大丈夫だって！明日菜や刹那さんが付いてるんならさー！」

「私もそう思うです。」

「う、うんそうだね。」

「それじゃあ今回はここまで！」

「皆さんご精読ありがとうございました。」

「そ、それでは次回も読んでくださいねー！」

第20話 健宏VS少年！ 道化と人形の戦い！（前書き）

健宏と白髪の少年の戦いが始まった！健宏は勝つことが出来るのか
！？

奇想天外、愉快痛快な物語！

第20話 健宏VS少年！ 道化と人形の戦い！

「ヴィシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト 小さき王 八つ足の蜥蜴 邪眼の主よ 時を奪う 毒の吐息を 石の息吹！！」

先に動いたのは白髪の少年だ。石化する煙を放ち、健宏を一撃で戦闘不能にするつもりらしい。だが・・・

「遅すぎるぜ！」

「！！！」

健宏は瞬く間に少年の背後に回り煙を交わすと、少年に蹴りを入れ吹き飛ばす。

「それならこれではどうか？ヴィシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト 小さき王 八つ足の蜥蜴 邪眼の主よ その光 我が手に宿し 災いなる眼差しで射よ 石化の邪眼！！」

煙で避けれたとしても、光が相手ならばそれも不可能だと思ったのだろう、次は石化する光線を放ってきた。しかし・・・

「あーらよつと！」

またしても避けられ、今度はハリセンの一撃をくらってしまった。

「君、真面目にやる気はあるのかい？」

「いいや？チミの狙いは飽くまでのどかちゃん達みただからな。まともに相手するよりここで長引かせてもらっぜ？最も逃げようとしても逃がしはしないけどね。」

どうやら健宏はまともに戦うつもりは一切ないらしい。

「まともに戦う気がないのならそれでもいい。僕は彼女達の元へ行かせてもらおうでしょう。」

少年はそう言い放つと、その身を水に変えこの場から逃げ出そうとする。だが……

「逃がしはしなと言ったる！」

いつの間にか近づいていた健宏にまたしてもハリセンで叩かれ、呪文の詠唱を中断される。

「魔法を使えば避けられ、逃げようとすれば間合いを詰められ詠唱を中断される。ならば接近戦で片をつけさせてもらおう。」

距離をとつての攻撃では埒が明かないと判断した少年は、肉弾戦に切り替え健宏に襲いかかる。

「あ、ちょ、タイム！タイムを要求する！？」

「そんな要求が通ると思っているのかい？」

「んなこと言ったって、俺はヒットアンドアウェイが基本戦術だからこういうガチの殴り合いは！？」

ヒットアンドアウェイはともかく、接近戦に弱いと判断した少年はここぞとばかりに襲いかかる。

実際健宏は避けるのだけで精一杯だ。

「・・・君、本当に接近戦は苦手なのかい？その割には全部避けられているんだけど。」

「避けるのは得意分野だからな。避けるだけならどうって事ねえよ！」

少年が襲いかかり、健宏が避け続ける。そんなことが幾度となく繰り返されていく中、健宏がふと少年に尋ねる。

「しかし4人がここを去ってから結構経ったな！。大体どんくらいたったか分かる？」

「大体15分くらいだけど？」

「そっか、もう15分も経ったのか。」

健宏はいきなりそう呟く。

「それだけの時間が経てばあの4人も相当遠く逃げられたはずだな。足止めはここまで！そろそろ真面目にやりますか！俺もさっさこのちゃんを助けに行かなきゃならないんでね。」

「今まで逃げ回っていただけの君に何が出来ると！・・・」

小馬鹿にするように言い放つ少年だが、言い終わる前に健宏に蹴り飛ばされる。

「そうだな。何が出来るっていうと、今までの倍のスピードで動くくらいかな？」

「・・・どうやらすっかり騙されていたようだね。ならこれならどうだい？」

「へえ、何をするって・・・なんで暗くなったんだ？・・・げ・・・

「

そういうと健宏の頭上に影が差す。怪訝に思い空を見上げる武宏だが、影を差したものの正体に顔を引き攣らせる。

「流石の君も、これなら避けきれないだろう?」

健宏が顔を引き攣らせるのも無理はない。何せ頭上に全長10mほどの巨大な石柱が十数本ほど浮かんでいたからだ。

「これで終わりだよ。」

ズドドドドドドドド!!!

十数本ものの石柱が健宏に降り注ぎ、あたりが土煙に包まれる。

「流石にこれを避けることは出来ないだろう?」

「いやー、流石に今のはヤバかったぜ?」

「!」

背後から聞こえた声に振り向く。そこには紛れもなく、今しがた押しつぶしたはずの健宏がいた。

「・・・どうやってあれを避けたんだい?」

「影の転移魔法でお前さんの頭上に転移させてもらっただけさ。そろそろ俺は失礼するよ、早くこのちゃんを助けに行かないといけないからな。」

そういうと、健宏は少年との距離を大きく空ける。

「僕が君を逃がすとしても・・・身体が動かない？」

少年は追いかけてようとするが、突如身体が動かなくなる。疑問に思い自分の身体を見てみると、身体が魔法の射手で捕縛されているではないか。

「いつの間に？」

「仕込みはお前さんが俺に殴りかかって来たときにだよ。」

「あの時感じていた違和感はこれだったのか。」

実は接近戦を挑んでいた時既に妙な違和感を感じていたのだが、健宏があまりにも避けまくるものだからそちらに気を取られて忘れてしまっていたのだ。

「どうやら君の勝ちのようだね。早く僕に止めを・・・」

「それじゃ俺はこれで失礼させてもらうぜ！んじゃまたなー！」

止めを刺されることを覚悟した少年だが、健宏はそれを無視し木乃香の元へと急ぐ。

「・・・この借りは返させてもらうよ。この後、必ずね・・・まずは、この拘束を解いてからだけど。」

どうやらプライドを刺激してしまったらしい。健宏に幸あれ。

その頃、ネギ達は千草によって召喚されて鬼達と対面していた。

「ちょっとちょっと、こんなありなのー!？」

「やるー、木乃香姉さんの魔力で手当たり次第に召喚しやがったな

！」

「ひゃ、１００体暗い軽くなるよ・・・」

「あんたらには、その鬼どもと遊んでてもらおか。ま、餓鬼やし殺さんよーにだけは言っとくわ、安心しときい。ほな？」

「まつ・・・待て！！」

「スマンのうお嬢ちゃん達。呼ばれたからには手加減出来んのや。恨まんといてえなっ！」

リーダー格と思しき鬼の掛け声を合図に鬼達が一斉に襲いかかる。

「きゃああああ！？」

「明日菜さん、落ち着いてください、大丈夫です！」

「刹那さん・・・そうよね、木乃香を助け出すためだもの！鬼が何だつてのよかかってきなさい！」

刹那の檄に葉っぱを掛けられ善戦する明日菜だが、いかんせん数が多すぎるのでネギ達は徐々に不利になっていった。そして・・・

「あつ、ハマノツルギが！」

一瞬の隙を突かれ、鬼にハマノツルギを弾き飛ばされてしまったのだ。

「悪いなお嬢ちゃん、ちと痛いやろが勘弁な！」

「明日菜さん（姉さん）！！！！」

「きゃあああああ！」

絶体絶命、鬼の一撃をくらってしまう！そう思った明日菜だが・・・

「ぐあああああ！？」

いつまで経っても痛みが起こらず、それどころか鬼の叫び声が聞こえる。疑問に思った明日菜が眼を開けてみると・・・

「フン、やはり貴様には荷が重すぎたようだな神楽坂明日菜。」

「「エヴァンジェリンさん（エヴァちゃん／吸血鬼の姉さん）！
！」「」

どうやら寸でのところでエヴァが到着し、鬼を吹き飛ばしたらしい。

「え、なんでエヴァちゃんが！？もしかして助けに来たくれたの！？」

「馬鹿を言うな神楽坂明日菜。私は健宏との誓いにより近衛木乃香を護りに来たただけ。」

「それでもありがとうございます、エヴァンジェリンさん！」

「全く、人の話を聞いているのかばーや？私はお前たちを助けに来たわけじゃ・・・」

「よくもやってくれたのうお嬢ちゃん！これは吹き飛ばしてくれたお礼や！」

エヴァがネギに説教をしていると、先ほど吹き飛ばした鬼が戻ってきてエヴァに攻撃を仕掛ける。しかし・・・

「ぐああああ！？」

「おいおい、女の子に手え挙げようとすんなよ！」

少年との戦いを終えた健宏が到着し、魔法の射手で鬼を焼き尽くす。

「「健宏さん（旦那）！！！」「」

「全く余計な真似を・・・あの程度の雑魚、目をつぶっていても倒

せたというのに・・・」

「そういうなよエヴァ。」

「健宏さん、大丈夫だったんですか!？」

健宏の助太刀に機嫌を損ねたエヴァを宥める健宏に刹那が感嘆の面持ちで近づく。

「ああ。今頃は戒めの矢で拘束されてるから抜けだすのに後30分はかかるぜ?」

「何故倒さなかったんだ?」

「あれは飽くまで人形だったからな。もしかするとさらに精密な人形、もしくは術者本人がこっちに来てるかもしれないからな。それにあれ、もう少して時間切れで自動的に消滅するしね。」

「なるほどな。」

「おい、ワシらを見無視するとはええ度胸じゃのう小童?」

「あ、ごめん忘れてた。もうチョイ待ってくれ。ネギ、障壁頼むわ。」

「

「あ、ハイ!ラス・テル マ・スキル マギステル!!逆巻け 春の嵐 我らに 風に加護を 風化旋風風障壁!!」

「おおっと!!」

「こ、これって!？」

「風の障壁だよ、明日菜ちゃん。」

「ただし2、3分しか持たんがな。」

「とにかく状況を教えてくれ。」

ネギ達は木乃香が千草に攫われたことと話した。

「ちつ、このちゃんは連れていかれてたか・・・」

「すいません、私が付いていながら!・・・」

「いや、せつちゃんのせいじゃないさ。それに問題はこれからどうするかだ。」

「といつても『二手に分かれる』、この一択しかないがな。」

「そうだな・・・よし！鬼は明日菜ちゃんと、せつちゃんの二人に任せる！ネギは俺と一緒にこのちゃんの救出だ！エヴァは、状況を見てどちらにでも手を貸せるように待機していてくれ！」

「まあ物足りないが仕方ない、わかった。」

「ええ、それでいきましょう。」

作戦を立て、風の障壁が消えるのを待つ健宏一行。だが・・・

「よし、そうと決まったらアレもやっとうござい！」

「アレ？アレってなんだよ？」

「キッスだよキス？仮契約だよ！！！」

「えええ！？」

カモの言葉に全員度肝を抜かれる。

「おい、カモ。お前ふざけているのか？」

「ち、ちがうつて！手札は多いほうがいいだろうよお！？」

「お前なあ！！！」

「わ、わかりました！！！」

「へ？」

どう考えてもふざけてるとしか思えないカモの言葉に怒る健宏だが、刹那が待ったをかける。

「おねがいします、健宏さん！カモさんの言うとおり手札は多いことに越したことはありません！わ、私と仮契約してください！」

「ちょ、せつちゃん！？エヴァ、お前も何とか言ってくれ！？」

まさか刹那から了承が出るとは思ってた健宏は、エヴァに助けを求める。だが・・・

「・・・緊急事態だ、許可しようではないか桜咲刹那。ただし、私もだ。」

「いや、『私もだ』じゃねえよ！？許可しようってお前が決めることじゃないだろ！？ってそうじゃねえ、なんで仮契約する事前提で話が進んでんだよ！？」

「やかましい！！急がんと障壁が解けるだろうが！！小動物、早く準備しろ！」

「お、おい！？むぐ！？」

「合点承知だ！仮契約！！」

健宏の反論をよそにエヴァが健宏にキスをする。

「おい桜咲刹那。次は貴様の番だ。」

「は、ハイ！」

「お、おいせつちゃん？無理すること無いんだぜ？」

刹那があまりにも顔を真っ赤にしているので、やはり嫌なのだと勘違いした健宏は刹那に辞めるよう指示する。

「む、無理などしていません！私はあなたとの絆の証が欲しい、そしてなによりこのちゃんを助け出す力が欲しいんです！だから・・・」

「せつちゃん・・・わあーったよ。」

「刹那の姉さんとも仮契約！！」

刹那の想いがどれほど大きく、そして木乃香を救いたいという気持

ちが痛いほど分かった健宏は刹那と仮契約を結ぶ。

「これが私のカード・・・」

「ほう、なかなか立派ではないか。ん？どうした健宏？」

「5人・・・これで5人の女子ちうがくせい唇を奪ってしもた、どないしょ・・・」

「ほう、5人だと？」

「貴様、私達より先に3人も人間とキスしただと？」

「この戦いが終わってからゆつくりと聞かせてもらいますね？」
「ヒイツ！？」

思わず口が滑り、合計5人も唇を奪ってしまったことを喋ってしまった健宏。そのためこの後根掘り葉掘り聞かれる羽目になってしまった。ちなみにネギ達はエヴァ達の出すさつきに怯え、互い抱き合っていた。

「な、なんや！？このとんでもない殺気は！？」

それは外の鬼達にも伝わっていた。下に恐ろしきは女の執念、ということであろう。

「と、とにかく風が止みます！構えてください！」

「と、とにかく今はこのちゃん救出が先だ！さあ、頑張るぞー！？」

「ちつ、運のいい奴。」

「せ、刹那さん？なんか性格変わってない？」

「来ます！」

ネギの言葉に全員気を引き締める。

「いまや、いてこましたれえ！！」

「雷の暴風!!」

「おおお!？」

「西洋魔術師かあ!？」

障壁が解けるとともに襲いかかる鬼達だが雷の暴風により、20体ほどがやられてしまう。

「あちらを気にかける暇は無いぞ!」

「私達が相手よ!」

「おお、えらいすまんのう。すっかり忘れつつたわ。さつきも言うたけど手加減出来ひんのや、勘弁・・・ぐおっ!？」

ドパン!どこからか銃弾が飛んできて鬼の頭を穿つ。

「いや、手加減など無くても十分に戦えるのでね、心配は無用だよ。」

「それに本気で戦わないのは相手にとって失礼ネ。」

「あ・・・」

「え・・・ええ!?!えええ!?!龍宮さん、それにくーちゃん!?!何でここに!?!」

「龍宮真名、古菲。何故貴様らがここにいる?」

「報酬が魅力的だったんでね。最も健宏さんからの頼みとあれば断る理由は無いのだが。」

「私はバカリーダーの頼みで来たネ。楓は夕映を助けに行たヨ。」

現れたのは真名と古菲だった。古菲は真名とは違う理由のようだが。

「健宏さんからの報酬だと?それは一体・・・とそんな場合では無いな、まずはお嬢様をお救いしてからだ。話はそのあとでゆっくり

と聞かせてもらおうぞ？」

「ああもちろんだとも。私も聞きたいことがあるんでね。」

「待て貴様ら、私を忘れてはいまいか？」

「な、何事アルか！？三人とも怖いネ！？」

「ま、またなの！？」

「な、なんちゅう殺気出しとるんやあの譲ちゃん達・・・」

笑顔で話し合う三人だが、それとは逆に醸し出すオーラはとんでもなく禍々しかった。その禍々しさときたら味方の二人もドン引くものだった。まあ鬼達もあまりの恐ろしさに近づこうとしなかったのは不幸中の幸いではあった。

「・・・まあいい、今はこの場を乗り切ることが先決だ。力を貸してくれ、龍宮。エヴァンジェリンさんもお願ひします。」

「ふっ、わかつている。任せておけ、刹那。」

「健宏の頼みだからな、最後まで協力してやるよ。」

「ちよつと待ってくださいー、センパイ？」

「っ、月詠！！」

鬼達を相手取ろうとする刹那達だが新たに月詠が参戦する。

「鬼さん達、センパイはウチの相手ですから邪魔せんといってくださいねー。さ、はよ殺り合いましょ刹那センパイ？」

「くっ、まさか月詠まで現れるとは！・・・あ、あの光の柱は！？」

月詠が現れたことに焦りを隠せない刹那だが、追い打ちをかけるように森の向こうに巨大な光の柱がそびえ立つ。

「まさか、間に合わなかったの！？」

「わかりません！でも助けに向かわなければ・・・」

「あきませんよ、センパイ。ウチとの決着がつくまで逃がしません
えー？」

「月詠、そこを退け！」

健宏たちの元へ向かおうとする刹那に月詠が立ちふさがる。明日菜
も鬼を相手取っているためうかつに動けない。

「くっ、このままでは・・・」

「行きますえー、センパイ・・・あや？」

刹那に追撃を掛けようとした月詠だが、真名の銃弾に道を塞がれる。

「行け刹那！！健宏さん達の元に！」

「ここは私達に任せるアルよ！」

「しかし・・・」

「大丈夫だ、仕事料は弾んでもらうがな。」

「・・・すまない！行きましよう明日菜さん、エヴァンジェリンさ
ん！」

「う、うん！」

「無論だ。」

真名の援護の甲斐もあり、刹那達は健宏たちの元へと急ぐ。

（無事でいてください、健宏さん、ネギ先生！）

（無茶なことすんじゃないわよネギ、健宏さん！）

（無事でいろよ、健宏！）

それぞれの思いを胸に健宏たちの元へと急ぐ刹那達だった。

第20話 健宏VS少年！ 道化と人形の戦い！（後書き）

「どうもー、こんちまたまた！今回ひさしぶりに2週間ぶりの投稿となりました、主人公こと狩野健宏です！さてはて、今回のゲストは！」

「どうも、2話ぶりの登場とさせていただきました桜咲刹那です。」

「久しぶりだな貴様ら！そうだ、私がエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルだ！」

「序盤から出ていたのに20話にして後書き初登場！神楽坂明日菜よ！」

「君なんてまだいいさ、本編ではほぼ毎回出ていたからね・・・後書きにも本編にも久しぶりに登場の龍宮真名だよ。」

「二人ともいきなり自虐ネタから入るなよ・・・てかエヴァのセリフは志〇けんの変な〇じさんか？」

「R、あいつ絶対殺す・・・」

「仕方ないじゃない、後書きなんて初めてなんだから！」

「健宏さんはいいよね、本編でも後書きでも出番があつて・・・」

「いや、それはRに言いなよ・・・」

「そうよ！あの自堕落作者、どこいったのよ！ここんとこ後書きに出まくりだったのに！」

「そう言えばそうだな。一体どこだ？」

「この礼はしてやらねばな・・・」

「それならあそこに・・・なんかめっちゃ暗いんだが？」

「何かあったのでしょうか？」

「どうせくだらないことだと思うがね。」

「私も同意見だな。」

「一応、俺達の話作ってんのはあいつなんだからあんま言わないようにね・・・おい、黄昏てどうしたんだ？」

「ああ・・・おっは・・・」

「……」ネタが古っ！てかなんでそんなテンション低いの！？」

「色々あるんだよ俺にも……」

「ま、まあ気を取り直して……今回原作のシーン結構入れ替わってたりしてるよな？」

「ああ、あれね……書いてたら入れ替わってるのに気づいてね、どうせならこのまま入れ替わっても面白いかなって……」

「そ、そうですか……」

「何かマジでテンション低いわね？」

「一体何があつたんだい？」

「感想が……」

「……」感想が？」「……」

「来ねえーンだよーっ！！」

「……」……はあ？」「……」

「今までは1話に付き1つは確実に感想が来てたんだぞ！？なのにいきなり来なくなつたんだよー！」

「そりや来ないこともあるだろ。たかが1話ぐらい……」

「たかがって言うなー！！投稿してから1週間は経ってるんだぞ！？今まで1日ぐらいたら確実に感想が来てたのがいきなり来なくなつたんだぞ！？不安に決まっとうーが！！！」

「大体投稿してから1週間って遊戯王のほうでしょ？大体それ、あつちの方にも書いてたじゃない。」

「アレ書いてからも来ないんだよ！」

「私達の話を投稿しないからじゃないか？先ほども言ったがもう2週間になるだろ？」

「修学旅行編は文章書きにくいんだよ！今回だって本当なら1週間前には確実に投稿出来てたんだ！でも構成は出来てもそれを文章に表わすとなると出来ねーんだよー！！！」

「まあ文章を作るのって難しいわよねー。私も作文とか苦労したわ……」

「分かってくれるか明日菜ちゃん！」

「ええ！」

「なんか息があつとるぞあの二人……」

「馬鹿はほおっておけ。」

「え、エヴァンジェリンさん……」

「まあRは明日菜に任せておこう。私達は次回予告をね。」

とうとう召喚されてしまったリョウメンスクナ！木乃香を助けるためについに刹那が動き出す！

果たして健宏たちは木乃香を助け出すことができるのか！？

「まあ無いわけ無いんだけどね。そうでないと話が進まないし。」

「ちょ、真名ちゃんセリフがメタすぎるって！！」

「そうは言ってもね、実際事実なんだから。」

「だからってんなこと言うのは辞めなさい！……コホン。ええ読者のみなさん、どうか感想をお願いします。Rの奴、マジで不安がつていますので。おそらく皆さんの声援があれば更新スピードも飛躍的にアップすると思うのでお願いします。」

「私からもお願いします。」

「……仕方がない、私達からも頼む。」

「龍宮真名の言うとおりだな。私としては不本意なのだがこのままでは私達の先々の幾重にも関わるのでどうか頼む。まあ先々と言っても小説が終わるわけではないがな。」

「とにかく今回はこれで終了！次回をお楽しみに！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5878v/>

麻帆良に降り立つボディーガード

2011年11月28日10時57分発行